



提供：四国水族館（宇多津）。瀬戸内海に繋がる絶景

讃 樹 會

令和2年9月1日発行

CONTENTS

- 02 同窓会長就任挨拶
- 03 同窓生教授就任挨拶
- 06 医学部教授退官挨拶
- 07 新任教授就任挨拶
- 08 ニュースの窓
- 09 寄稿 竹中生昌先生叙勲祝賀会参加報告
- 10 理事会議事録
- 12 組織図と理事一覧
- 13 事業報告
- 14 令和元年度会計報告
- 15 令和2年度予算
- 16 令和2年度研究助成金研究奨励金 選考結果
- 18 特集1 対・新型コロナウイルス
- 22 特集2 卒業記念に思う
- 30 恩師から貴方へ《上原正宏先生》
- 32 関連病院紹介【香川県済生会病院】
- 36 留学レポート
- 38 趣味ざんまい
- 40 追悼
- 46 教室便り
- 56 学生の短期留学報告
- 60 編集後記／事務局からのお知らせ

発行 香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
TEL/FAX 087-840-2291
E-mail dousou@med.kagawa-u.ac.jp
<https://dousoukai.site/sanjukai/>

発行人 平川栄一郎
編集人 谷 丈二
印刷所 株式会社 美巧社



同窓会長就任挨拶

平川 栄一郎（昭和61年卒・1期生）



讃樹會会員の皆さまにおかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご厚誼にあずかり、厚く御礼申し上げます。

この度、讃樹會会員の多くの皆さま方からご信任をいただき讃樹會会長に就任することとなりました。どうぞよろしく願いいたします。

さて、ご承知のとおり、新型コロナウイルスの急速な感染拡大に伴い4月16日には緊急事態宣言が全国に拡大され、移動の自粛や三密を避けることなどにより当面の感染爆発は回避することができました。しかしながら、その後有効な対策が打ち出せない中、感染拡大が止まらない状態が続いております。この未曾有の事態は世界の政治経済への打撃や不安定要素の増加をもたらし、社会の混乱や厳しい医療環境を引き起こしています。医学科同窓会讃樹會としても新型コロナウイルス感染症のもたらす困難に対して、どのような支援ができるのかについて検討しておりますが、今年度のコロナ関連予算としてweb会議システムの導入と臨床実習前の学生へのPCRプーリング検査体制構築への支援を行っていく予定です。

医療を取り巻く状況は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けるのみならず、深刻な社会問題である少子高齢化に伴う地域包括ケア、在宅医療の推進、地域医療構想による医療提供体制の見直しなどにより大きく変化しています。一方では国の働き方改革による医師の勤務環境や地域における医師数の偏在、分野別による偏在が問題となり、地方においては必要医師数の確保が喫緊の課題となっています。また、今後、医療機関の地域における機能と役割の明確化がより一層必要となり、大学の持つ役割や医療の在り方が大きく変化していくでしょう。そのような中で、讃樹會は状況の急速な変化に対応できる同窓会を目指していきたくと考えています。同窓会はこれまで大学運営への協力、卒後研修センターへの協力、国際交流への協力、同窓生への学術助成や留学助成、支部会・同期会への助成などの多くの事業活動に取り組んで参りました。これらの活動を継承、発展させるのは勿論のこと、その上で同窓会の見える化を進め、同窓会運営体制の見直しを行って参ります。関連部会の設立や女性医師の活躍支援、さらなる情報交換の場をつくるなどの母校医学部及び同窓生の支援、地域貢献につなげていきたいと考えております。

様々な状況に対応できる同窓会を実現していくためには、皆さま方のお力が必要不可欠と思っております。皆さま方のご指導を賜りながら、身近で頼れる同窓会となるように尽力していく所存です。讃樹會会員の皆さまにはますますのご理解とご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



同窓生教授就任挨拶

教授就任にあたって



香川大学医学部附属病院 教授・薬剤部長
小坂 信二 (平成25年大学院修了)

「讃樹會」会員の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

このたび、2020年4月1日付けで医学部附属病院教授・薬剤部長を拝命いたしましたので、この場をお借りしてご挨拶申し上げます。

私は1985年に北里大学薬学部を卒業後、初代教授の故中野 節先生が主宰される薬剤部に入局し、さらに第2代教授森田修之先生のもと医療薬学について幅広く御指導いただきました。第3代教授芳地 一先生のもと医療薬学および医療安全について御指導いただき、2009年より副薬剤部長として、薬剤業務はもちろんのこと医学部での教育支援、研究活動を行ってまいりました。

研究活動としまして第1点目は、薬剤業務に直結した調剤過誤を防止するシステムの研究開発に注力し、実際の業務にも反映しております。現在では錠剤PTPシートのバーコード表示が標準化されつつありますが、そのバーコード表示を活用した機器開発の共同研究を行ってまいりました。2点目として、TDM解析ソフトの開発と臨床応用があげられます。より簡便で精度の高い薬物血中濃度の測定手法の研究で、例えば抗菌薬についてはTDMガイドラインに初期投与設計及び維持投与設計のレジメンが示されていますが、維持投与量については腎機能に応じた一定の投与量が設定されているのみであり、独自の検討の余地が大きいと考えられます。そこで、データを集積・解析することにより実臨床に適した投与マニュアルを作成することが出来ました。臨床研究においても、医療の安全を目指した研究を行う必要があります。すでに開発を行っている腎機能と禁忌薬剤のアラートシステムをさらに発展させ、肝機能障害患者や特定の疾患との禁忌についても研究を重ね病院の安全対策に貢献したいと考えております。このような臨床研究を推進することで、副作用を軽減・回避できる管理法やさらには新しい薬物治療法を見出して、患者さんや社会に貢献したいと考えます。

また、今後も他講座・診療科との共同の研究にも着手したいと考えておりますので、ご指導ご支援のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

私が考える当薬剤部の目標としては、(1)患者さん中心の良質で安全な医療を実践する、(2)高い能力を持つ医療人を育成し、生涯研修の場を提供する、(3)特色ある研究を推進する、(4)香川県の医療向上のために貢献する、の四つを掲げております。薬剤業務を着実かつ安全に遂行することを最重要項目としながらも、業務の効率化と新規業務の開発を行い、先端医療を担う大学病院の一部門として、患者さんの治療に目に見える変化をもたらしたいと努力しています。薬剤部の業務については、最重要課題である安全を念頭に置き病棟業務をさらに充実させ、単に機械化を推進するだけでなく業務で何が必要とされているかを検討しさらなる安全性の向上を目指していきたいと考えます。薬剤部は「医薬品のプロ集団として、病院内における医薬品のあらゆる問題に責任を持つ」を念頭に置き、従来型の薬剤師業務に加えて、感染制御部門などに対しての臨床支援業務をはじめ、医薬品情報管理に必要な専門性の高い臨床薬学の知識・技術を駆使して新医療システムの構築や社会的要求の高い研究も可能にするような業務展開を図って行きたいと考えております。

最後に、このたび教授・薬剤部長としてスタートを切らせていただく機会をいただき、改めまして身の引き締まる思いです。また、着任にあたり多くの先生方・先輩方より激励のメッセージをいただき心より感謝申し上げます。今後とも香川大学医学部ならびに附属病院の発展に尽力していきたくと考えておりますので、「讃樹會」会員の皆様には広くご指導ご支援ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

略歴

昭和60年3月	北里大学薬学部製薬学科卒業
昭和60年6月	香川医科大学附属病院内 誠恵会より薬剤部出向
昭和62年4月	香川医科大学附属病院薬剤部
平成17年8月	香川大学医学部附属病院薬剤部 薬剤主任
平成21年5月	香川大学医学部附属病院薬剤部 院内副薬剤部長
平成25年4月	香川大学医学部附属病院薬剤部 副薬剤部長

同窓生教授就任挨拶

始めてを永遠に 教授就任にあたって



東海大学医学部医学科
基礎医学系生体構造機能学領域 教授
林 省吾 (平成14年卒・17期生)

令和2年4月1日付で、東海大学生体構造機能学(解剖学)教授を拝命いたしました、林 省吾と申します。

私は2002年卒業の後、2期生の伊藤正裕先生(東京医科大学主任教授)のご厚意で、卒後1年目から解剖学の教育と研究に携わらせて頂きました。現在ではほとんどありえないことですが、そのお陰で学生時代から関心があった医学教育学をサブスペシャリティとすることが叶いました。以後「好きなことだけ、好きなだけ、好きなところで、好きなように」やって生きてきました。我ながら「お前、何がしたいねん」と突っ込みたくなる略歴です。にも拘わらず今日を迎えられましたのは、ひとえに伊藤先生はじめ多くの先生方に支えて頂いた賜物であると思います。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

せっかくこのような貴重な機会を頂いたのですが、いざとなるとうまく言葉が出てきません。申し訳ありませんが、先日別件で認めた文章を転載させていただき、抱負に代えることをお許し頂きたいと思います。以下は、本学献体の会の会員様に宛てた挨拶状からの抜粋です。

広島県生まれの岡山県育ちです。広島カーブ初優勝の折、私は母の胎内におり、今はなき広島市民球場の熱気を、胎盤を通して吸収していたといえます。母曰く、「試合のことは何も覚えていないが、優勝した後、球場のコーヒーがタダになった」とのこと。相当量のカフェインを摂取したに違いありません。お陰様で、落ち着きのない息子が誕生し、今日に及んでおります。

阪神大震災の時は、京都で浪人生活を送っていました。センター試験が終わった翌日未明、前日にインフルエンザを発症し、高熱で惨敗を喫した私は、寮のベッドでうなされていました。最初はめまいかと思いましたが、ベッド上の壁に並ぶ本棚から参考書が頭を直撃し、地震に気が付きました。幸い京都の被害は軽微でしたが、移動中の列車から見た、あの光景を忘れることはできません。

縁あって香川医科大学(今の香川大学医学部)医学科に入学しましたが、増す知識はうどんのことばかり。

卒業も国家試験合格も危ぶまれる中、2001年9月11日を迎えました。翌週に卒業試験を控えた不出来な一学生は、またしてもその光景に自らを重ねることになりました。しかしながら、なんとか無事にそれら関門をクリアし、解剖学の教育と研究を始めることになりました。

解剖学は、ご遺体を観察することから始まり、その進歩は観察手段の進歩とともにありました。顕微鏡によって、生物が細胞の集まりであることが明らかになりました。電子顕微鏡によって、細胞の中の小器官(部品)が調べられるようになり、近年では、その小器官を作るタンパク質や、タンパク質の設計図である遺伝子が、研究の主流になっています。私は、最先端の研究にはついていけないだろうと考え、あえて「肉眼での観察」を専門としてきました。「時代遅れ」な分野を選んだつもりでしたが、入ってみれば、それは決して過去の学問ではありませんでした。

解剖学は、天文学と少し似ています。満天の星空を見上げるだけの時代から、望遠鏡へ電波望遠鏡へ「はやぶさ」へと技術は進み、私達は一つの星を事細かく調べられるようになりました。しかし、満天の星々は一つひとつ皆違います。どこに望遠鏡を向ければ、どんな星が見えるのか?星一つだけで分かるはずがありません。

満天の星々のように、ご遺体は一人ひとり皆違っていました。何年経っても何例やっても、私の教育と研究は、常にご遺体と共にあり、いつも『始めて』であふれていました。

医学の始まりは、昔も今も診察です。どんなにありふれた病気でも、医師はまず患者を診察します。病気が同じであっても、患者は一人ひとり皆違うからです。何年経っても何人診ても、医師にとって患者を診ることは、常に『始めて』の経験です。

解剖学の教育と研究は、だから常にご遺体と共にあり、これからも『始めて』であふれていなければなりません。解剖学実習室をそのような場にして頂いております、献体登録者の皆様とそこご家族に、この場をお借りして、改めて篤く御礼申し上げます。ありがとうございます。そして、これからも何卒宜しく願い申し上げます。

追伸

これを認めている今日（4月30日）も、新型コロナウイルス感染の勢いは止む気配がなく、多くの大学で解剖学実習の中止やご遺体の受け入れ停止が相次いでいます。本当に心が痛みます。本学は今のところ、なんとか献体の受け入れを継続しておりますが、今後については、何もお約束ができない状況にあります。皆様にはご心配ご迷惑をおかけしますことをお詫びいたしますとともに、ご理解ご寛容を賜りますよう、伏しお願い申し上げます。

末筆ながら、皆様に一層のご自愛をお願いいたしますとともに、ご健康を心よりお祈り申し上げます。

（著者希望で原文のまま掲載）

略歴

平成14年5月 東京医科大学 助手 解剖学第1講座
平成16年4月 東京医科大学 助手 人体構造学講座(組織名変更)
平成19年4月 東京医科大学 助教 人体構造学講座(法改正による)
平成19年5月 愛知医科大学 講師 医学部 医学教育センター
平成21年9月 愛知医科大学 講師(兼務) 解剖学講座
平成25年4月 東京医科大学 講師 人体構造学分野
平成26年6月 東京医科大学 准教授 人体構造学分野
平成29年4月 国際医療福祉大学 准教授 医学部 解剖学
平成29年4月 国際医療福祉大学 准教授(兼任) 医学部 医学教育統括センター
令和2年4月 東海大学 教授 医学部医学科 基礎医学系生体構造機能学
現在に至る

医学部教授退官挨拶

～くすりと共に43年間～



前香川大学医学部附属病院 教授・薬剤部長
芳地 一

讃樹會の皆様には15年間お世話になりました。心より感謝を申し上げます。

平成17年から教授・薬剤部長を拝命いたしました。赴任当初は薬剤師18名と事務員1名の計19名でした。現在では、薬剤師48名と事務および補佐員8名の計56名となっています。このことは病院における薬剤師の重要性を認識して頂けていると思っています。大きく変わったことは、各病棟へ薬剤師を配置したことです。「薬あるところに薬剤師有り」が重要と思っています。しかし、現状では各病棟へ日勤の1名配置が限界となっています。2名配置ができると、医師や看護師の医薬品業務に、より大きく貢献できると考えます。

本号は令和2年9月号と伺っています。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は9月にはどのようなになっているのでしょうか。新型コロナウイルス感染症に対して非常事態宣言解除の直後に本稿を執筆しています。マスク姿が急激に減ってきています。第2波や第3波が来ないことを祈ります。中国武漢から始まった新型コロナ感染は、2月3日に横浜港へ入港したクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」の感染問題で大きな話題となりました。その後、日本も含めて全世界で感染が蔓延していました。ゴールデンウィーク中のステイホームは、絶大な効果が有りました。強制的なロックダウンを行わないで、新型コロナ感染を抑えたのは世界的にも称賛に値するでしょう。他人に迷惑をかけない行動は、さすが日本人と言うべきです。本号が発刊された時には、新型コロナ感染が落ち着いていることを期待申し上げます。

薬剤師になって43年が過ぎました。この43年間で感じてきたことは「ヒトはウイルスに殺される」でした。今回の新型コロナ感染症蔓延の遙か前から機会があるごとにお伝えをしてきました。それは、この40年間で抗ウイルス剤ほど開発が遅れた分野は無いからです。細菌の話为例にしましょう。抗菌剤にサルファ剤があります。サルファ剤は静菌作用を有しています。その後、殺菌作用のある抗生剤が開発されました。では、抗ウイルス剤についてはいかがでしょうか。HCVに

対するように除ウイルス作用を有する医薬品も開発されましたが、インフルエンザウイルスやHBVなどは「殺（除）」の言葉を使うには厳しい現状です。「静」ウイルス剤と呼ぶべきでしょう。一般的には殺ウイルス剤がほとんど無いが故にワクチン開発へと進んでいます。基本的に、ワクチンは一つのウイルスに対して1ワクチンです。つまり、ウイルスの数だけワクチンが必要になります。非効率ですね。新型コロナウイルス感染症に関しては、アフリカや南米からの第2・3波を考えると、早いワクチン開発が今後の鍵となるでしょう。

他方、医薬品の開発が大きく進んだ分野の例として、糖尿病治療薬が挙げられるでしょう。糖尿病専門医がSU剤やインスリンを駆使していた時代が長く続きました。インクレチン関連薬の登場は治療方針を一変しました。それは、DPP4阻害剤を代表とするインクレチン関連薬が低血糖症状を起しにくいと報告されたからです。これは、糖尿病専門医でなくても糖尿病を治療できる可能性を示唆しています。今話題にしたいことは、糖尿病という病名です。糖尿病の発見が「患者の尿の糖を求めて蟻が群がったこと」に始まると言われています。つまり、「糖尿病」は読んで字のごとく「尿」に「糖」が出ることから命名された病名です。最近では、SGLT2阻害剤が開発されました。これは、糖を体外に尿を通じて排出する薬剤です。言葉の意味からするとSGLT2阻害剤は糖尿病を発症する薬と勘違いされますね。つまり今や「糖尿病」は「高血糖症」と呼ぶべきではないでしょうか。

現在、私は徳島文理大学香川薬学部教授として第2の人生を頂いております。

讃樹會の先生方には大変お世話になりました。薬剤師でありながら、讃樹會のメンバーに加えて頂いたことにも心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

新任教授就任挨拶

教授就任にあたって

～皮膚のことで皆さんの期待に応えます～



香川大学医学部 皮膚科学 教授
大日 輝記

令和2年(2020年)4月1日付で香川大学医学部皮膚科学教室の教授を拝命いたしました。

本教室は昭和57年(1982年)4月、岡山大学皮膚科学教室から着任された高岩堯初代教授が香川医科大学皮膚科学教室として開講されました。高岩教授は教室の礎を築き、17年の任期中に現在の香川医療圏の皮膚科学を支える多くの人材を輩出し、香川医科大学副学長、附属病院長などの要職を歴任されました。高岩教授の退官の後、平成11年(1999年)4月、第2代教授として窪田泰夫前教授が東京大学皮膚科学教室から着任され、今春までの21年間にわたり教室を主宰されました。平成15年(2003年)、旧香川医科大学と旧香川大学の統合に伴い、香川大学医学部の教室となり現在に至っています。

私は徳島市立高等学校の出身です。平成8年(1996年)に徳島大学を卒業してすぐ姫野國祐教授が主宰する寄生虫学教室に進学し、感染免疫を学びました。学位取得後、姫野教授の勧めで平成13年(2001年)、古江増隆教授が主宰する九州大学皮膚科に入局したのが皮膚科学との出会いです。長崎県対馬での2年間の離島診療をはさんで平成19年(2007年)、古江教授の推薦を受けて橋本隆教授が主宰する久留米大学皮膚科に講師として着任し、サブスペシャリティとして水疱症を学びました。平成21年(2009年)、米国コロンビア大学医学部微生物学免疫学講座のSankar Ghosh教授の下に博士研究員として研究留学し、細胞内シグナル伝達の研究に携わりました。平成25年(2013年)、宮地良樹教授、後に梶島健治教授が主宰する京都大学皮膚科学教室に縁あってお誘いを受けました。表皮と炎症の研究、また水疱症、脱毛症の経験を積む機会を得て7年余を過ごしました。

このように、香川大学に着任するまでに五つの異なる大学に所属し、たくさんの指導者や同僚、後輩に育てられてきました。

香川大学医学部は、香川大学事業報告書によりますと、世界に通ずる教育と研究を推進し、人間性豊かな医療人、未来を担う研究者を養成するとともに、領域の進歩、地域医療の発展に寄与することを目的としています。徳島出身の私にとって縁深いこの地で、皮膚科学、皮膚科診療の進歩と発展に寄与して参りたいと思います。

臨床面では、職員や学生が家族に誇れる皮膚科診療を附属病院で提供したいと思います。特定機能病院としての質の高い専門医療の提供とともに、顔の見える院内連携、薬疹やがん診療など横断領域での協力、新た

な地域連携の樹立を進めます。さらに、これまでに築いた全国のネットワークを稀少疾患の診療に活かします。

教育面では学部教育、卒後臨床教育、大学院教育を担当します。香川での取り組みは世界につながっていることを示しつつ、将来の目標に応じたキャリア形成の機会を提供していきたいと思います。

研究面ではこれまで、そのつど環境は変わっても、さまざまな角度から表皮をめぐる研究を進めてきました。慢性炎症との関わりにおいて選択的治療の開発に貢献することで、臨床と研究のハブとなる教室をつくりたいと考えています。

新しい教室は小さいけれど夢と可能性に満ちています。医師の働き方が大きく変わりゆくなか、未来を支える仲間を迎え、生活や家族を大切にしつつプロフェッショナルとして成長できる場をともに用意して、魅力あふれる皮膚科医を内外に送り出し続けたいと思います。

本邦では皮膚科は全診療科のなかで女性医師比率が飛び抜けて高く、その配偶者の8割が医師です。全国の大学病院や拠点病院の皮膚科は1医師や診療科だけの取り組みでは解決が難しい課題に直面しており、診療科が存亡の危機にさらされる事態は決して特別なことではありません。ワークライフバランスや男女共同参画の推進において先進的な取り組みを続けている香川大学ならば、医師の働き方改革の機に臨んで、部署の垣根を越え一丸となった取り組みで、働き方の多様な医師が活躍し続けられる新たなモデル教室として育てていただくことも十分に可能と考えています。

教室も私もまだ未熟ですが、大学、病院、地域とともに成長し続けたいと思います。香川大学職員、学生、同窓生の皆さまのご支援に深く感謝申し上げますとともに、新しい環境で仲間に加わり、一緒に成長してくれる方々の参加を心から歓迎します。

略歴

平成8年	徳島大学医学部医学科卒業
平成11年	日本学術振興会特別研究員
平成13年	徳島大学大学院医学研究科修了(寄生虫学) 九州大学医学部附属病院皮膚科 医員
平成14年	国家公務員共済組合連合会浜の町病院皮膚科 医員
平成15年	長崎県離島医療圏組合中対馬病院皮膚科 副医長
平成18年	九州大学病院皮膚科 助手
平成19年	久留米大学医学部皮膚科学 講師
平成21年	コロンビア大学医学部微生物学免疫学講座 博士研究員
平成25年	京都大学大学院医学研究科皮膚科学 講師
平成31年	京都大学大学院医学研究科皮膚科学 准教授
令和2年	香川大学医学部皮膚科学 教授

ニュースの窓

令和2年卒業第35期生が選んだベストティーチャー賞は、岩間久和先生

毎年3月24日に実施されてきた卒業式が今年は中止となりました。2月あたりからじわじわと拡大の様相を見せてきた新型コロナウイルス感染拡大を防止するためです。

卒業式の夜に行われる謝恩会は、第35期生謝恩会実行委員有志によって、医師国家試験の受験勉強の合間を縫って案内を発送するなど準備が進められてきましたが、3密を避ける必要から、やむなく中止を決断しました。

卒業証書は各自が医学部を訪れて受け取る方式となり、同窓会からの卒業記念品であるネームペンは、例年ならば謝恩会で贈呈していましたが、個別に同窓会事務局まで受け取りに来てもらい、全員に渡しました。

謝恩会のイベントのひとつであるベストティーチャー賞（正式名称はOutstanding Teacher of the Year）は、毎年、6年生の投票で決定されるものです。35期生は総合生命科学研究センター遺伝子研究部門 岩間久和先生をベストティーチャーに決定し、謝恩会で表彰を



予定していましたが開催中止となったため、代わりに3月17日に実行委員長の鈴木陸さんが正装した姿で岩間先生の大学の研究室を訪れ、第35期卒業生を代表して表彰状とトロフィーの贈呈を行いました。

岩間先生から、第35期卒業生の皆様へメッセージをいただいております。

卒業おめでとうございます。
ご父兄の方々も、お喜びの事と、お祝い申し上げます。
この度は、ベストティーチャーに選んでいただき有り難うございました。
若い人に評価してもらえるのは、とても自信になりますし、励みにもなります。
みなさんは、前途40年に亘り、長い職業人生を送ることになります。
何より無理をせず、ご自身の長を生かして、ご活躍されることを願っています。

岩間 久和
香川大学 総合生命科学研究センター
遺伝子研究部門

寄稿

『竹中生昌氏 瑞宝中綬章受章記念祝賀会』参加報告

讃樹會名誉会長 濱本龍七郎

香川大学医学部（旧香川医科大学）泌尿器科学初代教授、香川大学名誉教授の竹中生昌先生が、令和元年秋の叙勲において、長年にわたる教育研究と学術振興の発展に寄与されたご功績で瑞宝中綬章を受章されました。

令和2年2月8日(土)午後3時、J R ホテルクレメント高松飛天の間において開催されました祝賀会にお招きいただきましたのでご報告申し上げます。

司会の常森寛行泌尿器科医局長により開会が宣言され、開会にあたって、腎・泌尿器科にとみ医院國富公人院長が、香川大学医学部泌尿器科学同門会会長として、叙勲の祝辞を述べられました。次に、広島大学名誉教授碓井 亜先生が、広島大学の先輩である竹中先生への尊敬の思いを述べられ祝辞とされました。

続く来賓挨拶の笈善行先生は、2001年から16年間、2代目泌尿器科学教授を務められた後に現在、香川大学学長をしておられます。泌尿器科学教室は1983年4月に竹中教授、中津先生、安川先生、國富先生の4人でスタートし、その時、笈学長は京都大学大学院生、3代目教授の杉元幹史先生はまだ医学部2年生、私濱本は4年生でした。笈学長からは、竹中先生は鳥取大学で講師、助教授を歴任された後、香川医科大学の教授に就任されたこと、鳥取大学でも少人数からの開始であり、教室を立ち上げる人生を歩まれており、竹中先生が築かれたベースがあったからこそ、スムーズな教室運営ができたことを感謝し、同門会讃起会の命名の由来紹介も交えて、叙勲のお祝いの挨拶がありました。



左より 杉元教授、笈学長、竹中名誉教授、濱本

乾杯は三代目杉元幹史教授がグラスを掲げられ、初代教授への感謝の思いを述べました。

祝宴が始まりしばらくの歓談後、来賓からの祝辞がありました。上田夏生医学部長が、何もないところから基礎作りをしていただいたことを感謝し、今後も大学を見守っていただきたいと述べられました。阪本病院阪本一樹理事長は、竹中先生には現在、阪本病院の顧問をお引き受けいただいて更に診療にも来ていただいております。大変お元氣でご活躍であるということでした。

次に香川大学医学部医学科同窓会讃樹會名誉会長、私濱本が「『スタッフを充足させ、若きウロロジストを育成し、地域医療に貢献し、基礎研究もやりたい』を目標に掲げて教室をスタートされました。当時、私は4年生であり、わかりやすく簡潔な講義、神業のようなジキターが印象に残っています。2代目教授が学長を務め、3代目教授に母校出身者が就任し、竹中先生のエポックのおかげであると思います。」とお祝いのご挨拶を申し上げます。

記念品と花束の贈呈を受け、竹中先生からこれまでのご履歴や今回の叙勲のお話を交えて謝辞がありました。

最後は國富先生による三三七拍子の賑やかな中締めで幕となりました。

竹中先生、叙勲おめでとうございます。
心よりお祝い申し上げます。



理事会議事録

令和2年度第1回理事会（定期総会に代えて） 令和2年8月4日（火）20：00～21：00

新型コロナウイルス感染拡大を防ぐため、5月9日（土）に予定されていた第16回定期総会が中止され、通常の理事会が総会代行を兼ねて開催された。尚、総会のために提出された委任状は550名であり、正会員（3390名）の10分の1以上を満たしていることを記録として残す。

1. 議長選出 現理事長の大西宏明先生が議長を務める。

2. 会長選挙及び理事選挙開票結果報告

選挙管理委員長植村信久先生（昭和61年卒）から、総会開催予定日に小規模に実施した公開開票の結果報告があった。（選挙管理委員長植村信久先生、平川栄一郎先生、事務局の3名による立ち合い開票）

●会長選挙

立候補が平川栄一郎先生（昭和61年卒）のみであるため、信任投票を実施し、5月7日の投票締切日までに届いた郵便投票を5月9日の公開開票にて集計し、平川栄一郎先生が信任556票を獲得し同窓会会長に就任された。

◆全投票数 571票

有効票 569票、無効票 2票 ※無記名は無効。

有効票のうち、信任 556票、不信任 1票、白票 12票

●理事選挙

信任投票の結果、有効投票数の過半数以上の信任があり、会則※に基づき、理事が決定した。

◆全投票数 569票

有効票 528票、無効票 1票 ※無記名は無効。

有効票のうち、信任票 527票、不信任票 1票

※第5章第25条「理事選出は各卒年同窓の推薦にて理事候補となり、会員の有効投票数の過半数を得て、信任と承認されたものが理事となる。」

3. 会長所信表明並びに新執行部人事の発表

信任された平川栄一郎新会長（昭和61年卒・1期生）による所信表明が行われ、新年度の執行部役員が発表された。

4. 理事長並びに常任委員会委員長選出

事前に新年度理事に行ったアンケートで推薦が一番多かった大西宏明先生に、理事会の承認と本人の承諾をもって、今年度も引き続き理事長に就任いただくことが決定した。

次に、希望アンケートに基づいて、4つの常任委員会への理事配置案が事務局から提示され、承認された。引き続き、各委員会の最年長の卒年の先生が委員長に就任いただくという通例に従って、監査委員会（西田智子先生）、選挙管理委員会（河井信行先生）、懲罰委員会（植村信久先生）、定款委員会（上枝宏和先生）をお願いすることとなった。

5. 平成30年度・令和元年度事業報告

平川会長から、平成30年度・令和元年度の事業報告が行われた。

6. 令和元年度決算報告及び監査報告

出口一志事業局長より、令和元年度（平成31年4月1日から令和2年3月31日）の決算報告があった。監査委員会並びに二見・岩村会計事務所の監査報告書も資料とされた。

7. 令和2年度予算案承認

出口事業局長より、令和2年度の予算案の説明が行われた。理事から、コロナ禍にある今年度は従来と違って、留学、国際交流の学生援助費や、講演会が延期・中止となる可能性が高いため、それに代わってコロナに関連した項目に予算を考えてはどうかという意見が挙がった。

これに対して平川会長から、コロナ関連の追加予算として、①今後のためにWEB会議システムを取り入れるための10万円、②学生のPCRプーリング検査体制構築の支援として50万円の2点の提案があった。学生のプーリング検査体制構築支援については薬理学西山成教授、耳鼻咽喉科学星川広史教授から以下の提案説明があった。コロナ禍でポリクリの学生が病院実習を受けることができない状態が続いており、その打開策として、7月28日にアメリカのFDA（アメリカ食品医薬品局）で承認されたプーリング検査の体制作りを香川大学医学部で進め、学生の陰性確認を一斉に行うことで臨床実習の再開を後押ししたい。しかしながら、そのための資金が現状では大学に望めず、讃樹會に支援をお願いしたいというものである。

理事から、「臨床実習は医学部教育の一つで本来は大学が費用を出して行うべきであり、仮に陰性確認ができて臨床実習を大学が再開するという確約はないため、検査が無駄になる可能性もあるのでは」との質問に、西山成先生から「讃樹會は在校生の立場にたち、コロナ禍の中で何ができるかという時に、この検査というのは一つの手助けになるものではないかと思う。」と回答があった。

コロナに関する2点の追加予算が承認され、他の項目との最終調整は執行部で再度行うこととなった。

8. 令和2年度研究助成金及び研究奨励金の審査・決定

西内崇将学術局長より、選考過程についての説明があった。研究助成金4件、研究奨励金2件の申請があり、学外評価委員16名の採点を集計した審査結果が資料とされた。その結果、評価委員による最高点を獲得した研究助成金部門の人見浩史先生（H8年卒）と研究奨励金部門の藤井喬之先生（H22年卒）が、満場一致で受賞者に決定した。

9. 令和2年度第1回国外留学助成金審査・決定

西内学術局長より、申請2件について、学術局長に

よる第一次審査の通過と会費完納の報告があり、福長健作先生（H21年卒）と岡崎智哉先生（H23年卒）それぞれに満額の25万円が交付されることが全会一致で決定した。ただし、現在のコロナ禍においては、留学が保留されているため、執行年度に関してはフレキシブルに対応して、実施が確定となってから助成金の交付が行われることとなった。

10. 名誉会員承認

秦 利之先生（周産期学婦人科学 2019年3月定年退官）、芳地 一先生（薬剤学 2020年3月定年退官）、窪田泰夫先生（皮膚科学2020年3月定年退官）の3名の特別会員（教授）が定年退官を迎えられたため、名誉会員にご就任いただくことについて、承認された。

11. 讃樹會シンボルフラッグデザイン決定

平成29年度第1回理事会で発案され、平成30年度定期総会でフラッグ作成と予算10万円が決定した。それを受けて平成30年度第2回理事会で業者デザイン案複数提示されたが決定に至らず、令和2年定期総会に持ち越された。総会での最終決定のための資料として事前アンケートで、デザインの人気順位をまとめた。

しかし、コロナ禍により令和2年定期総会が中止となったため、総会の代行を兼ねた今回の理事会で最終決定を行う予定であったが、①やはり総会で人数が集まったところで決めた方がいい、②主として国際交流

に利用する目的で発案されたものであるが、コロナ禍で国際交流も止まっている現状では、慌てなくてもよい、という理由から、次回の総会で人数の多い状態で決めることとなった。

12. 香川大学支援基金（修学支援奨学金事業）への対応

平川会長から経緯と校友会理事会における緊急学生支援金の現状について報告があった。

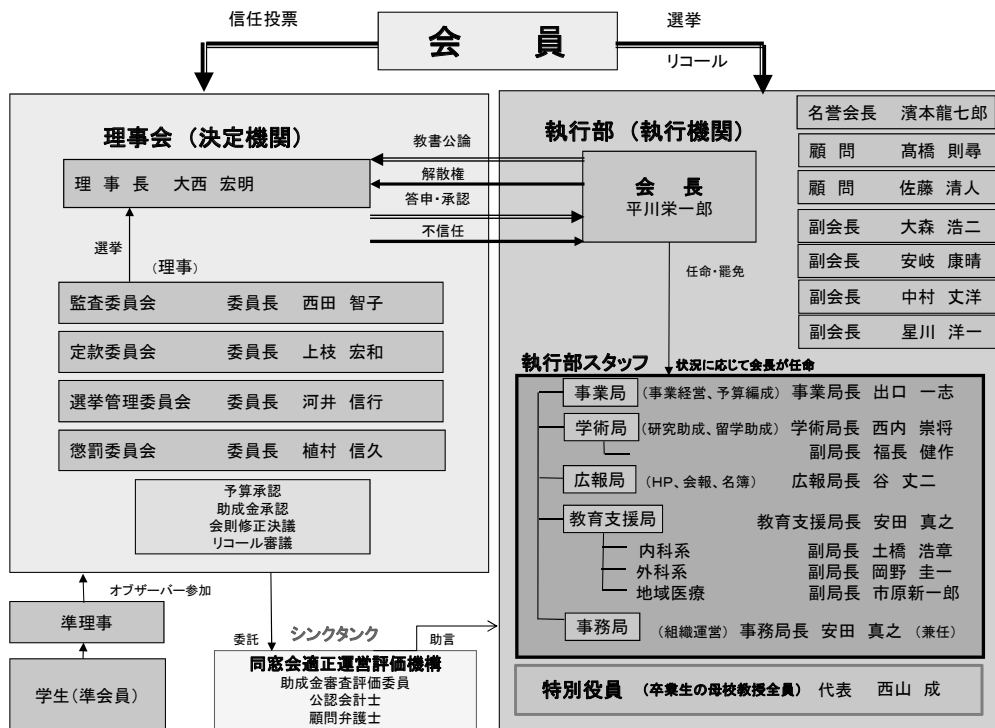
讃樹會としては、緊急学生支援金に関する現状説明を受けて、今回の寄附は見送り、今後第2波、第3波が来て更に学生の緊急支援が必要になり再度要請があった時、寄附を検討する。また、讃樹會の各会員に対しての寄附の依頼については、9月発行の会報に箕善行学長からの依頼文と振込用紙を同封することで対処することとなった。

また理事から、今後、要請があった際には、理事会は執行部に寄附の有無と金額を一任するので遅滞なく対処してほしいという意見があり、承認された。

最後に、大西宏明理事長から、学生のアルバイトが減っている件に関して、医療行為はできないにしても人手不足で困っている医療機関も多くあると思えるので、香川大学を通して、学生のアルバイト先として相互の情報提供することはできないだろうか、執行部から香川大学に声掛けしてもらえないかという意見があった。

令和2・3年度 組織図／理事一覧

組織図



理事一覧

	卒年	氏名	所属
1	S61年	植村 信久	キナシ大林病院 腎臓病外来
2		大西 宏明	高松赤十字病院 血液内科
3	S62年	形見 智彦	形見医院
4		河井 信行	かがわ総合リハビリテーション病院
5	S63年	西田 智子	香川大学 教育学部特別支援教育講座
6		横井 徹	横井内科医院
7	H元年	上枝 宏和	うえだ眼科
8		北条 聡子	北條クリニック
9	H2年	羽場 礼次	香川大学 病理診断科・病理部
10		吉田 智子	さくらづか吉田クリニック
11	H3年	中條 浩介	香川大学 麻酔学
12		坂東 修二	香川大学 医学教育学
13	H4年	田井 祐爾	田井メディカルクリニック
14		政田 哲也	こくぶ脳外科・内科クリニック
15	H5年	川西 正彦	香川大学 脳神経外科
16		三宅 啓介	香川大学 脳神経外科
17	H6年	浅賀 健彦	香川大学 集中治療部
18	H7年	井町 仁美	香川大学 内分泌代謝・先端医療・臨床検査医学
19		高尾 努	たかお整形外科医院
20	H8年	野間 貴久	香川大学 循環器・腎臓・脳卒中内科
21		村田 晶子	白神眼科医院
22	H9年	上田 修史	香川大学 泌尿器・副腎・腎移植外科
23		村上 和司	香川大学 医療安全管理部
24	H10年	岡内 正信	香川大学 脳神経外科
25		金地 伸拓	香川大学 呼吸器内科
26	H11年	安藤 延男	香川大学 地域連携精神医学
27	H12年	亀田 智広	香川大学 膠原病・リウマチ内科
28	H13年	泉川 美晴	玉藻クリニック
29		中村 修	香川大学 整形外科

	卒年	氏名	所属
30	H14年	佐野 愛	香川大学 麻酔・ペインクリニック科
31		森 照茂	香川大学 耳鼻咽喉科
32	H15年	門田 球一	香川大学 病理診断科・病理部
33	H16年	大島 稔	香川大学 消化器外科
34		小谷野耕佑	香川大学 総合周産期母子医療センター
35	H17年	今井 秀記	香川大学 精神科神経科
36		築瀬 賢	香川大学 麻酔学
37	H18年	篠原奈都代	香川大学 救命救急センター
38	H19年	石川 一郎	香川大学 精神科神経科
39	H20年	中野 裕貴	香川大学 眼科
40	H21年	木戸 瑞江	香川大学 精神科神経科
41	H22年	尾崎 洋基	KKR高松病院 内科・リウマチ科
42		千代 大翔	香川大学 消化器内科
43	H23年	野口 勝宏	香川大学 地域連携精神医学
44	H24年	小林 俊博	香川大学 検査部
45		松井 崇矩	香川大学 消化器・神経内科
46	H25年	水田 志	馬場病院
47		内田 俊平	香川大学 血液・免疫・呼吸器内科
48	H26年	形見 祐人	香川大学 小児外科
49	H27年	小瀧 洋和	香川大学 眼科
50		合田衣里奈	香川県立中央病院 眼科
51	H28年	佐伯 岳信	高松赤十字病院 内分泌代謝内科
52		濱田 康宏	坂出市立病院 内科
53	H29年	綾井 健太	KKR高松病院
54	H30年	佐藤 雄大	坂出市立病院 内科
55		村岡 拓	香川大学 精神科神経科
56	H31年	岡本 夏海	香川大学 卒後臨床研修センター
57		木村 駿吾	香川大学 卒後臨床研修センター
58	大学院H8	小川 尊明	香川大学 歯科口腔外科

事業報告 —平成30年・令和元年度—

◆教授就任祝賀の報告(令和2年4月1日まで含みます。)

- ・H30年7月1日 杉元幹史先生(昭和63年卒3期生)
香川大学医学部医学科 泌尿器科学
- ・H31年4月1日 金西賢治先生(平成5年卒8期生)
香川大学医学部医学科 周産期学婦人科学
- ・H31年4月1日 松田陽子先生(平成10年卒13期生)
香川大学医学部医学科 腫瘍病理学
- ・R2年4月1日 小坂信二先生(平成25年大学院修了)
香川大学医学部医学科 薬剤学
- ・R2年4月1日 林 省吾先生(平成14年卒17期生)
東海大学医学部 基礎医学系生体構造機能学領域

令和2年4月1日現在、53名が教授に就任されています。

◆平成30、31年度(令和元年度)事業報告 学術局

●研究助成金事業

平成30年度(第14回)

- 研究助成金 立石 健祐(平成13年卒)
- 研究奨励金 尾崎 太郎(平成21年卒)

令和元年度(第15回)

- 研究助成金 中村 信嗣(平成16年卒)
- 研究奨励金 守時 政宏(平成19年卒)

●国外留学助成金事業

- 平成30年度 橋本 一輝(平成21年卒)
- 令和元年度 高橋 耕治(平成18年卒)

●講演会事業

平成30年度 第9回市民公開講座(12月)

講師 香川大学 精神神経医学講座
中村 祐教授

令和元年度 第10回市民公開講座(11月)

講師 香川大学 臨床腫瘍学
辻 晃仁教授

●学会助成金事業

平成30年度

- 第21回日本光脳機能イメージング学会(香川大学 小児科)
- 第30回腎とフリーラジカル研究会(香川大学 薬理学)

令和元年度

- IPOKRa TES JAPAN2019(香川大学 小児科)
- 第31回日本肝胆膵外科学会(香川大学 消化器外科)
- 超音波医学会第29回四国地方会(四国地方会会長 大森浩二)
- 第55回高血圧関連疾患モデル学会合同学会(香川大学 薬理学)

教育研修支援局

●研修医支援

在学生対象研修プログラム説明会・指導医養成講習会・病院見学者支援等、香川大学医学部附属病院研修医獲得への協力費用の支援。

研修オリエンテーション、研修医室設置のコーヒーマーカーやウォーターサーバーへの補充等、本院研修医への支援。

●専門医研修支援(医師キャリア支援センター)

JMECC講習会、専門研修説明会への協力費用の支援。

●学生援助

①大学間国際交流協定締結校への学生の短期留学に対する助成。H30年度11名、R元年度10名。2年間で計21名。

②競争的資金 H30年度5件、R元年度3件

広報局

●会報発刊 2年間で計4号(56号～59号)を発刊

事務局

●医師賠償責任保険取り扱い事業：加入者総数932名。讃樹會が契約者となる団体保険。500名以上加入により保険料は団体割引最高率20%が適用されている。事務手数料の収入がある。

●後援協賛事業

医学部祭、謝恩会への寄附。卒業生に記念品(ネームペン)贈呈。謝恩会イベント「Outstanding Teacher of the Year」への協賛。(令和元年度謝恩会はコロナ禍のため中止となったが、表彰は実施)

尚、毎年、寄付を行ってきた新入生歓迎行事は、H30年度(H31年入学者に対する歓迎行事)は主催側学生の希望によって歓迎行事を縮小したため、同窓会へ寄付の申請がなかった。また、令和元年度(令和2年入学者に対する歓迎行事)はコロナ禍のため、行事が中止となり、同窓会への寄付の申請がなかった。

●総会・支部・同期会助成

開催のための事務的協力と懇親会事業援助金を助成。

H30年～R元年開催：「第15回定期総会」、「剣道部杉元教授就任祝賀会」、「岡山讃樹會第1回、第2回」、「関東支部会第17回、第18回」、「3期生同窓会」、「13期生教授就任祝賀会」、「1995年入学生同窓会」、「ニューキャッスル留学生同窓会」

●地域連携協力事業

平成30年度 香川大学医学部附属病院と讃樹會本部懇親会(9月27日)

令和元年度 香川大学医学部附属病院関係医療機関及び讃樹會合同懇親会(8月22日)

看護科同窓会「木蓮会」支援事業

委託契約を結び、通常同窓会業務の事務的補助を行っており、木蓮会事務局として事務局内の一部スペースを提供している。(契約は毎年、自動更新)

◆その他の会務報告

香川大学校友会

香川大学創立70周年を機に、香川大学同窓会連合会に代わり、令和元年11月に全学的同窓会組織として香川大学校友会が設立。構成員は卒業生・修了生のみならず、在学生、現職教職員、退職教職員まで含み、香川大学及び、卒業生・修了生、在学生、教職員への支援・連携のための事業を行う。

理事会

理事会の開催

平成30年度 第1回8/10、第2回12/4

令和元年度 第1回8/5、第2回 R2年1/14

事務局

同窓会が実施する事業の他、会員のデータ管理、HP管理、公式Facebook管理、会費の徴収と会計管理などの業務全般

令和元年度会計報告

令和元年度収支計算報告書

平成31年4月1日から令和2年3月31日まで

事業活動収支の部

単位：円

科目	予算 A)	決算 B)	差額 B) - A)
1. 事業活動収入			
①会費・入会金収入	8,500,000	9,930,000	1,430,000
②寄付金・広告収入	850,000	810,000	- 40,000
③委託手数料収入	2,490,000	2,551,567	61,567
④雑収入	0	1,483	1,483
事業活動収入計	11,840,000	13,293,050	1,453,050
2. 事業活動支出			A) - B)
①事業費支出			
会報制作費	1,000,000	983,255	16,745
後援協賛事業費	550,000	451,715	98,285
支部・同期会費	250,000	196,069	53,931
学術助成金事業費	1,650,000	1,624,520	25,480
国外留学助成金事業費	750,000	250,000	500,000
学生援助費	800,000	560,000	240,000
国際交流協力費	150,000	0	150,000
研修医協力費	1,000,000	398,392	601,608
講演会費	450,000	391,398	58,602
学会助成金事業費	420,000	380,000	40,000
事業費支出小計	7,020,000	5,235,349	1,784,651
②管理費支出			
事務人件費	2,220,000	2,143,650	76,350
事務局・各委員会運営費	1,200,000	1,322,532	- 122,532
事務局設備投資費	350,000	342,628	7,372
ホームページ管理費	50,000	55,000	- 5,000
通信費	830,000	945,571	- 115,571
慶弔費	100,000	81,600	18,400
雑費	80,000	95,695	- 15,695
香川大学同窓会連合会費	100,000	100,000	0
管理費支出小計	4,930,000	5,086,676	- 156,676
事業活動支出計	11,950,000	10,322,025	1,627,975
当期事業活動収支差額	- 110,000	2,971,025	
前期繰越収支差額	38,394,338	38,394,338	
次期繰越収支差額	38,284,338	41,365,363	

貸借対照表

令和2年3月31日現在

単位：円

資産の部	金額	負債及び 正味財産の部	金額
資産		負債	
1. 流動資産	(41,365,363)	1. 固定負債	(16,000,000)
現金・預金	41,365,363	同窓会館建設引当金	16,000,000
2. 固定資産	(16,209,147)		
一括償却資産	209,147		
同窓会館建設引当預金	16,000,000	正味財産	41,574,510
合計	57,574,510	合計	57,574,510

財産目録

令和2年3月31日

単位：円

資産の部			
1. 流動資産			
(1) 現金・預金			
イ) 手許現金		108,127	
ロ) 普通預金	百十四銀行三木支店	1,739,450	
ハ) 郵便貯金	郵便振替貯金事務センター	28,241,267	
ニ) 定期預金	香川銀行本店営業部	10,195,250	
	百十四銀行医大前出張所	1,081,269	
	流動資産合計	41,365,363	
2. 固定資産			
(1) 有形固定資産	一括償却資産	209,147	
(2) 特定目的資産	同窓会館建設引当預金	16,000,000	
	固定資産合計	16,209,147	
	資産合計	57,574,510	

固定資産の内訳

(令和2年3月31日現在)

資産の名称	数量	取得年月	取得価額	償却方法	耐用年数	償却率	当期償却額	未償却残高
事務局パソコン	2	R1.10	313,720	一括償却	3	0.333	104,573	209,147
			313,720				104,573	209,147

監査報告書

令和2年4月30日

香川大学医学部医学科同窓会
 讃樹會 会長 佐藤 浩 人 殿

公認会計士 岩村 浩二 


私は、香川大学医学部医学科同窓会讃樹會の平成31年4月1日から令和2年3月31日に関する令和元年度決算報告書の監査を実施した結果、収支状況及び財政状態を適正に表示されているものと認めます。

以上

監査報告書

令和2年5月25日

香川大学医学部医学科同窓会
 讃樹會 会長 平川栄一郎 殿

監査委員長 形見 智彦 

讃樹會監査委員会は、平成31年4月1日から令和2年3月31日に関する令和元年度決算報告書の監査を実施した結果、適正妥当に表示されているものと認めます。

以上

令和2年度予算

令和2年度予算

令和2年4月1日から令和3年3月31日まで

事業活動収支の部

単位：円

	令和2年度予算	令和元年度予算	令和元年度決算
1. 事業活動収入			
①会費・入会金収入	8,500,000	8,500,000	9,930,000
②寄付金・広告収入	800,000	850,000	810,000
③委託手数料収入	2,755,000	2,490,000	2,551,567
④雑収入	0	0	1,483
事業活動収入計	12,055,000	11,840,000	13,293,050
2. 事業活動支出			
①事業費支出			
会報制作費	1,100,000	1,000,000	983,255
後援協賛事業費	400,000	550,000	451,715
支部・同期会費	200,000	250,000	196,069
学術助成金事業費	1,650,000	1,650,000	1,624,520
国外留学助成金事業費	1,000,000	750,000	250,000
学生援助費	400,000	800,000	560,000
国際交流協力費	150,000	150,000	0
研修医協力費	700,000	1,000,000	398,392
講演会費	450,000	450,000	391,398
学会助成金事業費	160,000	420,000	380,000
新型コロナウイルス対策支援事業費	500,000		
事業費支出小計	6,710,000	7,020,000	5,235,349
②管理費支出			
事務人件費	2,220,000	2,220,000	2,143,650
事務局・各委員会運営費	1,400,000	1,200,000	1,322,532
事務局設備投資費	300,000	350,000	342,628
ホームページ管理費	55,000	50,000	55,000
通信費	1,000,000	830,000	945,571
慶弔費	200,000	100,000	81,600
雑費	100,000	80,000	95,695
香川大学同窓会連合会費	0	100,000	100,000
管理費支出小計	5,275,000	4,930,000	5,086,676
事業活動支出計 (①+②)	11,985,000	11,950,000	10,322,025
当期事業活動収支差額	70,000	-110,000	2,971,025
前期繰越収支差額	41,365,363	38,394,338	38,394,338
次期繰越収支差額	41,435,363	38,284,338	41,365,363

令和2年度 讃樹會研究助成金／研究奨励金 選考結果

速報

部門	受賞者	研究題目
研究助成金	人見 浩史 (平成8年卒) 関西医科大学 iPS・幹細胞再生医学講座	iPS細胞を用いた内分泌疾患に対する生理的補充療法の開発
研究奨励金	藤井 喬之 (平成22年卒) 香川大学医学部 小児外科学	水素による腸内細菌叢の是正に基づいた腸管不全合併肝障害の予防法の開発

◆選考過程のご報告◆

第16回(令和2年度)讃樹會研究助成者及び研究奨励者について選考を行いました。研究助成金部門は4件、研究奨励金部門2件の全6件の申請があり、学外評価委員によって評価を受けました。

評価に当たって、学外評価委員が正当に評価できないと判断した申請書に対しては、採点しなくてもよいこととしております。採点無しというケースを可能な限り少なくするべく、提出された申請内容に鑑み、専門に近い学外評価委員5名を選定し、具体的には学外評価委員一人につき、1～2件の採点をお願いしました。

採点は六つの項目(1.研究課題の学術的重要性・妥当性、2.研究計画・方法の妥当性、3.研究課題の独創性・革新性、4.研究課題の波及性、5.研究の実現性、6.研究の学術的優先度)に対して、それぞれ5段階評価(5点:極めて高い、4点:高い、3点:やや高い、2点:やや低い、1点:低い)を行って頂き、合計点を平均しました。

以上の厳正なる審査の結果、獲得点数は、研究助成金部門では人見浩史先生の「iPS細胞を用いた内分泌疾患に対する生理的補充療法の開発」(4.40点/5点満点)が第一位となりました。研究奨励金部門では藤井喬之先生の「水素による腸内細菌叢の是正に基づいた腸管不全合併肝障害の予防法の開発」(3.30点/5点満点)が第一位となりました。

また、今年度の全体平均点は3.8点/5点満点でした。

学外評価を基に8月4日開催の令和2年度第1回理事会において、人見浩史先生に金壱百万円、藤井喬之先生に金五十万円を授与することを正式に決定しました。

両先生には、心よりお喜び申し上げるとともに、研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。

学外評価委員の先生方におかれましては、大変お忙しい中、無償でご協力頂きましたことを誌上からではございますが、心から感謝申し上げます。

讃樹會研究助成 学外評価委員

臨床科

	氏名	
1	伊藤 進	香川大学 名誉教授
2	今井 裕一	愛知医科大学 名誉教授/多治見市民病院 病院長
3	香美 祥二	徳島大学病院病院長 / 徳島大学医学部医学科発生発達医学講座小児医学 教授
4	千田 彰一	香川大学 名誉教授
5	成瀬 光栄	国立病院機構京都医療センター 臨床研究センター 臨床研究企画運営部 特別研究員/医療法人医仁会武田総合病院内 分沁センター長
6	原 量宏	香川大学瀬戸内圏研究センター 特任教授
7	水野 博司	順天堂大学医学部形成外科学講座 教授
8	吉栖 正生	広島大学大学院医系科学研究科心臓血管生理医学教授

基礎科

1	梶谷 文彦	川崎医科大学名誉教授/川崎医療福祉大学客員教授/岡山大学特命教授 /AMED医療機器開発推進研究事業プログラムスーパーバイザー
2	小林 良二	香川大学 名誉教授
3	阪本 晴彦	香川大学 名誉教授
4	田畑 泰彦	京都大学ウイルス・再生医科学研究所 再生組織構築研究部門 生体材料学分野 教授
5	徳光 浩	岡山大学大学院自然科学研究科生命医用工学専攻 細胞機能設計学 教授
6	西堀 正洋	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 生体制御科学専攻 生体薬物制御学講座 薬理学分野 教授
7	藤田 守	久留米大学医学部客員教授/長崎大学医学部客員研究員 /産業医科大学医学部非常勤講師
8	森田 啓之	岐阜大学大学院医学系研究科 神経統御学講座生理学分野 教授

(敬称略)

特集1 対・新型コロナウイルス

当院における新型コロナウイルス感染症への取り組み

香川大学医学部 血液・免疫・呼吸器内科学 教授
香川大学医学部附属病院 感染制御部 部長
門脇 則光

新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るい、とどまるところを知りません。思えば今年に入って早々からコロナウイルスが現れ、昨年まで想像だにできなかった状況が世界中を覆っています。私自身は今年の4月、この絶妙のタイミングで感染制御部長を拝命し、日々勉強し模索しながら、病院のスタッフとともにコロナ対策を進めています。

香川大学医学部附属病院は感染症指定医療機関ではありませんが、高度医療を担う県内の中心的医療機関として、コロナウイルス感染症の重症患者や妊婦・小児の感染者を積極的に受け入れる役割を香川県から求められ、私たちもそのように自覚して体制を整えています。

当院では、田宮病院長のリーダーシップのもと、週1回、感染対策に関係する各部門のコアメンバーが集まって情報を共有するとともに、病院としての対策を練り、絶えず修正を図っています。さらに、2週間に1回のペースで、病院執行部を含めた40～50名のメンバーが集まり、「附属病院新型コロナウイルス感染症対策本部会議」を開いて、病院の方針を院内全体に周知するとともに、各部門の意見を聞き対策の改善に役



立てています。このような情報共有を進めることにより、コロナ対策を早期から着々と進めてきました。

病院にとってまず重要なこととして、知らないうちにコロナウイルスが持ち込まれ院内感染が発生することを徹底的に回避する必要があります。外来玄関の風除室に赤外線サーモメーターを設置するとともに（写真1）複数の職員を配置し、外来患者の体温チェックと問診を行っています。そして、陽性項目がある場合は、患者さんをコロナ専用の外来に誘導して対応し、医師が総合的に判断してコロナを疑えばPCR検査を行います。入院患者の場合は、可能な限り前日までにPCR検査を行うことを徹底しています。検体採取は外来正面に設置した陰圧テント内で行います（写真2）。

コロナ患者用病棟としては、外来でPCR検査が必要と判断され、かつ病状から入院が必要なコロナ疑い患者を受け入れる病棟として東1階病棟を開放し、PCRの結果が判明するまでの一時入院場所としています。また、第1波のときにはコロナ確定患者の受け入れ病棟として東7階病棟を開放していました。第1波が落ち着いた後は東7階病棟を通常病棟に戻し、東1階のみをコロナ病棟にしています。コロナ患者の実



際の入院は、香川県の感染者が比較的少ないこと、当院が感染症指定医療機関でないことから、7月までの時点では無症状感染者2名の受け入れのみです。しかし、今後第2波が拡大すれば、再び陽性患者を受け入れる事態が予想されます。

こうしたコロナ診療で院内感染を発生させないためには、診療スタッフの教育も重要で、感染制御部が必要に応じて个人防护具の正しい着脱方法を指導するなどの対策を講じています。また、図のような曝露リスクのわかりやすい表を看護部と感染制御部で作成して、感染確定者を診療する場合どうすれば就業制限を回避できるかを周知し、スタッフの安心感を高めるようにしています。

さらに、検査部での院内PCR検査体制の充実、手術部での感染対策など、コロナに対応するためのさまざまな医療体制を構築していますが、そのためには各部門の協力と情報共有が重要で、これには前記のような頻繁で定期的な会合が役立っています。

こうしたさまざまな対策はすぐに整ったわけではなく、誰も経験したことのないコロナ禍に直面して、皆が知恵を出し合い、試行錯誤し、絶えず微修正を繰り返しながら整えてきました。この闘いは現在進行形で、今も微修正を繰り返しており、おそらく1か月後、2か月後にはかなりの部分を変更されているでしょう。

このような未曾有の感染症の勃発に対応するために

は、充実した感染制御部門が中心的な役割を果たします。しかし、当院の感染制御部の体制は、さまざまな事情により、高度先進医療を担う大学病院として、残念ながらあまりに脆弱な状態にとどまっています。現在感染制御部の専従医療スタッフは間嶋由美子師長ただ一人で、彼女の有能さと獅子奮迅の活躍に支えられているというのが実情です。かつては感染症診療のエキスパートである本学出身の横田恭子先生が常勤として当院の感染症診療のレベルを格段に引き上げられ、香川県立中央病院に異動されてからも非常勤としてご指導くださっていますが、本拠が当院ではないため、エフォートが制限されることは避けられません。このたびコロナ禍のさなかに感染制御部長を拝命した立場として、高度医療を支え、コロナ禍のような新興感染症に十分対応できる感染制御部を当院に作る事が喫緊の課題と考えています。

今後コロナ禍がどう展開するか、誰にも読めません。ワクチンが広まるのが最重要と思われませんが、その時期と真の効果も不透明です。このような不安定な状況の中、やはり重要なのは基本的な飛沫感染・接触感染対策です。感染が広まるのはそれが不徹底だからです。規律正しい日本人は基本的な感染対策を日常生活に取り入れるのに長けているはずで、このことがウィズ・コロナの時代をうまく乗り切る鍵を握っているのではないかと思います。



図

コロナ共存世界における消化器系がん診療の再開・維持に向けて、 香川県の消化器診療水準を保つために

～新型コロナ感染防御のための消化器内視鏡及び腹部超音波手技下の患者シールド法の開発～

香川大学医学部消化器神経内科

谷 丈二、小原 英幹、多田 尚矢、正木 勉

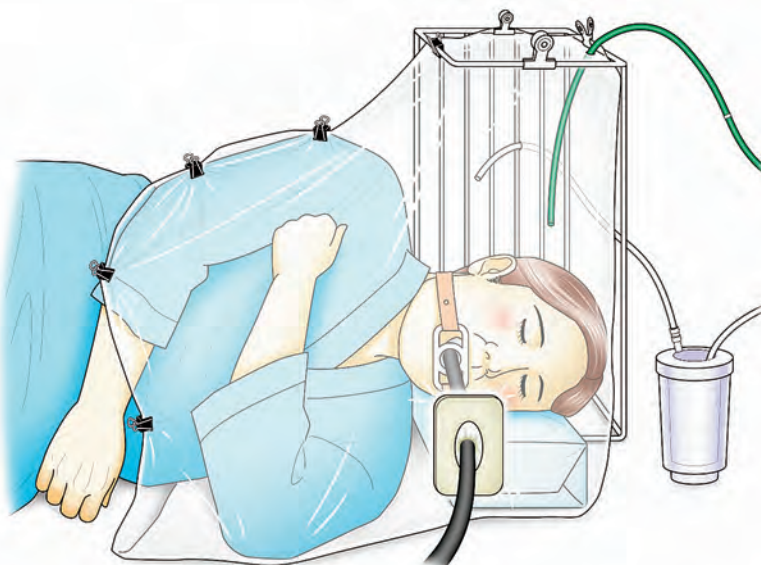
いま現在、新型コロナCOVID-19が日本のみならず世界で蔓延し、収束の気配なく、医療を取り巻く環境が激変しています。消化器系手技は、患者－術者間の距離が近似的であるため、咳嗽誘発リスクのある胃内視鏡、ウイルスが便中に含まれる大腸内視鏡および時間を要する腹部超音波ガイド下治療手技では、SARS-CoV-2のエアロゾル・飛沫による医療従事者への伝播感染が危惧されます。そのため、パンデミックの状況下では不要不急の消化器系がん検診が延期される一方で、吐血や肝胆道感染症に対する救命のための緊急治療は少なからず必要となっているのが現状です。収束期においても、潜在性感染者が存在しうるコロナ共存世界では、がん診療の通常再開には、何らかの感染予防対策が求められているものの医療従事者の悩みとなっています。今もなお、がん検診による早期発見・早期治療の機会が失われ、守れる‘いのち’も助けられない状況になっています。なによりも医療資源の源となる医療従事者の保守は、緊喫の課題であり、その

感染予防対策として標準的な個人用保護具、陰圧室の使用が推奨されているものの、消化器系手技下での患者から排出されるエアロゾル飛散を遮断する方法が未開発のままでした。飛散を抑えるために最も重要なことは、対象をボックス化し、陰圧化すること。そこで、今回、医療資源が限られるなかで、身近にある有効資源を活用し、ウイルスの飛散、室内でのエアロゾル充満を最小限に防ぐコンセプトモデルを開発し、滞っている消化器系手技の診断・治療を安全に行うために安価・簡便で、どの施設においても導入可能な新型コロナ感染防御システムの開発をしました。香川大学にてプレスリリースされ、四国新聞、ネット系医療ジャーナルに取り上げていただき、現在産学連携にて汎用性・普遍性・簡便性を追求した商品化を急務的に実行しています。

香川県は、7月現在は他都道府県と比較しコロナの蔓延は落ち着いていますが、今回の機器開発が全国と同窓生の一助になればと寄稿させていただきました。

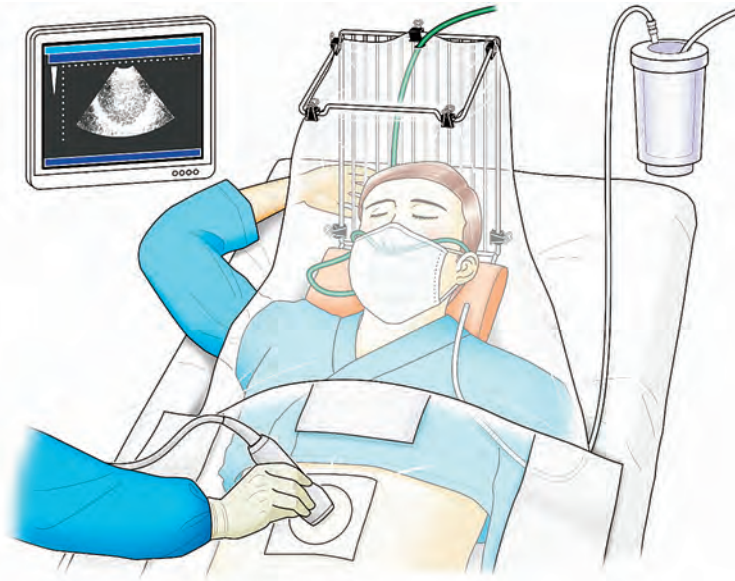
- 1) 胃内視鏡と腹部超音波手技においては、同一のコンセプトでエアロゾル持続吸引による使い捨てビニールボックスを用いた患者被覆法を考案し、ボックス内に持続吸引チューブを挿入しておくことでボックスの陰圧化に成功したことが画期的な点である。

●胃内視鏡&腹部超音波:エアロゾル持続吸引による陰圧化ビニールボックスを用いた患者シールド法



(研究業績 1 : Kobara H, Nishiyama N, Masaki T. Digestive Endoscopy 2020; April in press.)

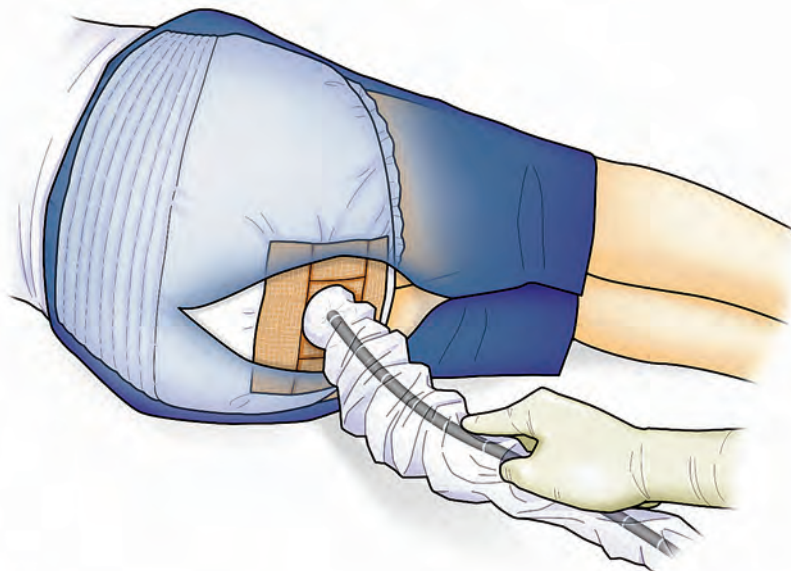
患者の頭部から上半身を覆うビニールボックス型密閉シールドを作成し、そのボックス内に挿入された持続吸引チューブによりボックス内が陰圧化され、エアロゾルの飛散を防ぐことが可能となる。同時に挿入された酸素吸入チューブにより患者呼吸が維持される。持続吸引チューブによるボックス内陰圧化は、本法の最大の特徴である。



(研究業績2 : Tani J, Kobara H, Nishiyama N, Masaki T. Digestive and Liver Disease 2020; May in press.)

- 2) おむつパンツと腹部超音波用のプローブカバーを利用した飛散シールド法：便汁は液体吸収性の高いおむつにより吸収され、肛門から出るエアロゾルは、内視鏡を被覆したプローブカバーにより密封化される。これらは、すべて外部に漏れなく簡単に一包化し破棄できることも大きなメリットである。

●大腸内視鏡：おむつパンツと腹部超音波用のプローブカバーを利用した飛散シールド法



(研究業績3 : Nishiyama N, Kobara H, Masaki T, et al. Endoscopy 2020; May in press.)

特集 2



卒業記念に思う

香川大学医学部の前身である香川医科大学は昭和55年（1980年）4月に開講しました。その3年後の1983年10月に香川医科大学附属病院が開院しました。香川医科大学1期生が卒業を迎え、同時に同窓会が設立したのが、昭和61年（1986年）です。

医学部図書館の周囲半分は芝生庭園に囲まれています。図書館西側には、初代学長砂田輝武先生の石碑が静かに佇んで、正門からの来学者を迎えています。刻まれた文字は「感謝の心」です。砂田学長の碑につながるかのように、図書館南側は、毎年贈呈された卒業記念の石碑が一行に並び、植樹された染井吉野が大きく枝を空に広げています。石碑の列は、6期生までで、7期生からは記念樹として染井吉野の植樹だけとなりました。植樹の場所も、講義棟西側が記念植樹の庭となりました。染井吉野の植樹は20期生まで続き、以降は植樹用敷地の確保が難しいためか、時計やベンチなどの物品の贈呈品となり、現在に至っています。

この度、卒業記念品について振り返り、テキストとしても残しておくことになりました。号をまたいで連続企画でお届けします。時の経過と共に不明なことが多く、各卒年の情報提供、ご寄稿をお待ちしています。

「讃岐の丘で君を待つ」

かがわ総合リハビリテーション病院 副院長
河井 信行 (昭和62年卒・2期生)

香川医科大学および香川大学医学部卒業生の皆様、令和2年度の前半はコロナウイルス対策で大変ご苦労されたことと存じます。何人かの同窓生は、香川大学や他大学の教授としてご活躍され、また香川県内の医師会のメンバーを見てみますと同窓の先生が名を連ねておられ、地域医療における同窓生のご活躍は近年目覚ましいものがあります。昭和62年に第2期生として卒業した同窓生を代表して当時を少し思い出してみます。

我々2期生が入学した当時は、医学部には基礎臨床研究棟も附属病院もなく、ただ講義棟と実習棟が建っているだけで到底医学部とは思えないところでした。食堂もなく、昼食は講義棟の更衣室でお弁当を買って食べていました。附属病院が建っている場所は草原で、体育の運動中に何度か蛇を見かけました。そうこうするうちに真っ白い基礎臨床研究棟が建って、やっと医学部らしい体裁が整ってきました。第1期生が病院実習を開始する前年から東病棟の建設が開始され、基礎臨床研究棟からはクレーンがどんどん鉄筋を運んでいるのが目の前に見え、2年後からの病院実習を期待に胸を膨らませていました。出来上がった附属病院は、今では想像できないほど真っ白で崇高とっていいほどの建物でした。廊下も滑りそうなほど輝いていました。そこを教授回診について回ったことがついこの前のことのように思い出します。今振り返ってみると医学部の6年間は、本当にあっという間に過ぎ去りました。卒業式も今の様に全学で盛大に行うのではなく、体育館でこじんまりとしたものでした。卒業式の後で植樹した木が、図書館の南側にあります。我々が植え



植樹から32年。令和2年7月のソメイヨシノ

たときは確か背丈ほどの高さでしたが、今では図書館の屋上をはるかに超えるまで成長しています。おそらく植えて30数年経過した今が、最も元気な時ではないでしょうか。大学を訪問する折、この木の横を通るときは必ず立ち止まります。青空に映える木を見上げ、この木に負けずに医師として成長できたか、何か社会に残したものがあるか、今も卒業したころの情熱を持っているか、30数年間の医師としての道のりを振り返ると、もうひと頑張りとの木が励ましてくれます。同窓生の皆様、疲れたとき、何か困難にぶつかったとき、不安にかられたとき、我々が植えたこの木を見に来てはいかがでしょう。この木は、今では自分たちがここで学んだ唯一の証です。キャンパスからみる高松市街の眺めは、30数年前とほとんど変わっていません。我々の木は、讃岐の丘で立派に成長し、いつでも皆様の訪問を待っています。



◀ 2期生卒業アルバムより

邂逅し 開眼す

弘前大学大学院医学研究科病理診断学講座
弘前大学医学部附属病院病理診断科 教授
黒瀬 顕 (昭和63年卒・3期生)

「人生 邂逅し 開眼し 瞑目す」亀井勝一郎の言。

高校時代のこと、姉の現代国語大学入試問題集に載っていた「微笑について」をたまたま読んで感動し亀井の名を知った。「大和古寺風物誌」の中の中宮寺如意輪観音についての短文である。岡山の山中、田舎の高校だが図書室に亀井勝一郎全集が置いてあり一時読み耽った。「職業の秘密」など今でも記憶に残る。「微笑について」は爾来僕のバイブルとなり、香川医大入試発表を自分で見に行ったときは平静のため道中の連絡船や琴電でこの文章を繰り返し読んでいた。入学後訪れた丸亀町の宮脇書店に亀井勝一郎全集が置いてあった。毎月一冊ずつ買おうと決めたが四冊買ったところで書架からなくなった。未だに本棚にはこの四冊のみ並んでいる。

大学何年の時だったか、学生通信に一期生の山崎さん(だったと思う。山崎さんはとても魅力的だった。学生通信に某教授を批難する匿名投書が載った時に、それを実名で叱責し「だせえんだよ」と述べていたの



は格好良くて今も記憶に鮮明だ)が自転車旅行で函館の亀井勝一郎生家跡を訪れて撮影した亀井自身の墨書「人生 邂逅し 開眼し 瞑目す」の写真が掲載されているのを見てこの言葉を知った。僕も自転車旅行で北海道を周っていたので余計親近感を覚えた。生の意味をなんと明解に衝いていることか。卒業時、なぜかは記憶にないが記念碑の揮毫の担当となり碑文も任せられ、迷うことなく亀井の言葉から標題の語を選んだ。卒業式の後、皆で石碑のところ集まった際にこの語を選んだ理由を説明した。字は癖字で汗顔の至りだが、石は同級の田中宏和さんの和歌山のご実家への依頼でこぢんまりして雰囲気が良いと思う。

人を開眼させてくれる出会いを邂逅という。人とは限らない。我々の世代は耳順に近いが我が身を振り返るに二十歳の頃からちっとも成長したと思えない。しかし邂逅は幾度とあり、それらは身体の中に染み込んでしまったようである。自分の小ささ、未熟さを明確に自覚させられ、普遍的で、美しく、微動だにしないものの前に素直に頭を垂れる清々しさが邂逅にはある。……ならばやがて瞑目する人生には、何かに邂逅すること、邂逅し続ける事が必要ではないか。邂逅とは瞬間的なものではない。出会いは瞬間であっても、その出会いを生かす事はその後の努力によっても可能であると、この頃強く感じている。

以下思い出すままに。同じSGの黒河内さんは読書家で医大前食堂の部屋は本であふれていて亀井の話もよくしてくれた。高見さんは亀井の「大和古寺風物誌」



夏、目に涼しいソメイヨシノ。春の満開が待ち遠しい。

を読みながら奈良の寺を巡ったと言う。香川医大入試の折、受験番号が隣で頼みもしないのに播州弁を教えてやると煩く話しかけてきた清元。こいつとは一緒になりたくないと思って合格発表を見に行ったら僕の隣にしっかり清元秀泰の名が。その後SGが一緒、国試勉強も一緒、さらに同じ東北で仕事することになったが今や姫路市長として多能な手腕を発揮している。合格発表の時ロイド眼鏡の痩せた学生が俯き加減で帰って行った。こいつは落ちたなと思ったら合格していて今や泌尿器科教授の杉元。杉元は優秀だが唯一、一年の時の村上先生生物を落とした（その後卒業まで再試一切なし）。僕らの学年で本当の天才は川田である。同じSGの青森出身佐々木さん。「青森さん」と呼んでいた僕が青森県民になった。津軽に赴いてから太宰に填まってファンの一人となり、亀井と太宰が親友だったことを知る。両者取り合わせが奇妙だが三鷹の住居が近かったせいで親しくなり太宰の影響で亀井は酒が飲めるようになった。

さて、佐々木さんの青森高校の同級のT先生は岡大に進学した。同じグループに香川医大一外科田中聡教

授のお嬢さんが居て親しかったそうだ。田中教授は僕らのSG担当で岡山のお宅にお邪魔した際、「ドボルザークを聞きたいからレコードを出してくれ」と黒河内さんが頼まれ出してみるとジャケットに「愛する妻へ ニューヨークより 聡」とのサインが。田中教授はこのジャケットを見せたかったのだろう。T先生も岡大の学生時代に田中教授のお嬢さんの家に遊びに行った。その時田中教授が貸してくれたレコードにこのサインを見付けて感激しコピーまで取っていた。そのT先生とは弘前大に赴任した後初めて知り合い、話している内に田中教授の話題になってお互い同じ体験をしていたことに驚いた。そしてジャケットのコピーを見せてくれ三十余年前の出来事がありありと甦った。巡り会いの奇を感ぜずにはおれなかった。田中教授は僕と郷里が近く、僕の入試面接の試験官だった。人は鬼籍に入ってなお、生者と生者を結びつけ喜びを与えてくれる。

今までの、人との出会いに心から感謝します。

◎ 卒業記念一覧 ◎

期	卒年	卒業記念品	期	卒年	卒業記念品
第1期	S61	石碑、染井吉野	第22期	H19	集会用テント1張 収納袋3つ 樹木(ハナミズキ・赤)
第2期	S62	染井吉野	第23期	H20	集会用テント1張 収納袋3つ
第3期	S63	石碑、染井吉野	第24期	H21	時計 2台
第4期	H1	石碑、染井吉野	第25期	H22	時計 1台
第5期	H2	石碑、染井吉野	第26期	H23	クリアミラー3台
第6期	H3	石碑、染井吉野	第27期	H24	レセプションチェア
第7期	H4	染井吉野	第28期	H25	ロビーチェア2人がけ、3人がけ 各1台
第8期	H5	染井吉野	第29期	H26	傘立て3つ、カーテン1式
第9期	H6	染井吉野	第30期	H27	事務用椅子2つ、三方幕1つ
第10期	H7	染井吉野	第31期	H28	アルミベンチ NAB-1 2脚
第11期	H8	染井吉野	第32期	H29	便座除菌クリーナーピュアレットS 63個(ディスペンサー5個)
第12期	H9	染井吉野	第33期	H30	便座除菌クリーナーピュアレットS 31個(ディスペンサー18個)
第13期	H10	染井吉野	第34期	H31	折り畳み椅子10脚、運搬車1台
第14期	H11	染井吉野	第35期	R2	ラウンジに長机1、椅子3脚、ガラス窓目隠し
第15期	H12	染井吉野			
第16期	H13	染井吉野			
第17期	H14	染井吉野			
第18期	H15	染井吉野			
第19期	H16	☆情報求			
第20期	H17	染井吉野			
第21期	H18	☆情報求			



初代学長 砂田輝武先生の碑文“感謝の心”

讃岐の丘に吹く風は今も変わらず

聖マリアンナ医科大学 神経精神科学教室 特任教授

東京慈恵会医科大学 精神医学講座 客員教授

小野 和哉 (平成2年卒・5期生)

1990年に我々は卒業した。30年の時を経て、多くの同級生の方々は人として医師としての人生の円熟の日々を迎えているのではないだろうか。我々は医師になってからまず、阪神・淡路大震災を1995年に遭遇し、その後、東日本大震災を2011年に経験し、今年2020年はコロナ肺炎の流行を経験した。こうした数々の未曾有の事態において、我が学年の石碑にある「背私向公」の思いで真摯に医療に取り組んできたように思う。香川では我々の学生時代から屋島や栗林公園、金比羅山の観光地としての姿は薄れて行き、瓦町の賑わいも減っていったように思われる。2004年に屋島ケーブルが廃線となったのはそれを象徴しているように感じたものである。賑わいを失いながらも、讃岐の穏やかな風土と美しい自然は変わらず、時に訪れると深い喜びと安心を与えてくれる。

医学生の始まりを思い出すと、まず体育で絞られた。走り、泳ぎ、医者とは体力と教えられた。ドイツ語は覚えられず、解剖も覚えられず、生化学の代謝経路は覚えられず、P450という言葉だけが残っている気がする。売店に行くと、誰かがいつもコピーしていた。進級するには、良いノートのコピーする必要がある、丁寧に見やすいノートを取っている人と親しくなりたいと思っていたが、利己的な自分に嫌悪もした。夜になると真っ暗な三木町では人恋しく友人の下宿を訪ねた。

車の免許を取るのに苦労した様に思っていたが、当時は高速や車線変更はあまり経験できなく、いまだに都会では白バイに年に一度はバス専用レーンに入ったと違反をとられる。試験の時、パジャマで来た人や、血尿が出た人もいて、卒業できるのかいつも不安だった。小さな学校なのに妙に学園祭には熱が入っていた。食べ物は皆、うどんが主食のようだった。依存性があり、東京に戻って関東のうどんが食べられない身体になっていたが、丸亀製麺が向こうからやってきた。国試は大イベントで、ホテルに届く怪しい事前情報に惑わされた。合格発表を見に行く勇気がなかなか出なかったが、さして勉強していないように見えた友人が合格したとの報で、やっと見に行った。色々なことがあったが、自分では輝く青春の時を過ごした忘れえない日々であった。



5期生植樹のソメイヨシノと石碑

医師になり、30年大学人として生活し、相変わらず授業や回診、研究などで、大学構内を走り回っている。決して平坦でない道を歩んできたように思うが、自分なりの歩き方をしてきたように思う。年を取れば言いたいことを言える時が来ると思っていたが、空気を読み過ぎて、勝手な学説以外、未だにあまり言いたいことが言えない。

同級生には、終生変わらぬ付き合いをお願いしたい。まだまだ、何度も香川に来たい。昔と同じように、かずら橋を走って渡り、屋島に上って大声で叫びたい。我々の医学生としての青春の時がここには残っているから。

7期のサクラ

香川大学医学部心臓血管外科 准教授
山下 洋一（平成4年卒・7期生）

入学式後のオリエンテーションは確か大B講義室で行われたと思います。SGごとに教壇に上がって自己紹介をしていましたが、アイスブレイクどころかそれが悉く面白くて終盤に回ってくる自分もウケを狙わなくては、とプレッシャーが大変でした。結果、小笑い程度に終わりましたが。その後の6年間も事あるごとにイベントがあり、良くも悪くもノリのいい学年でした。

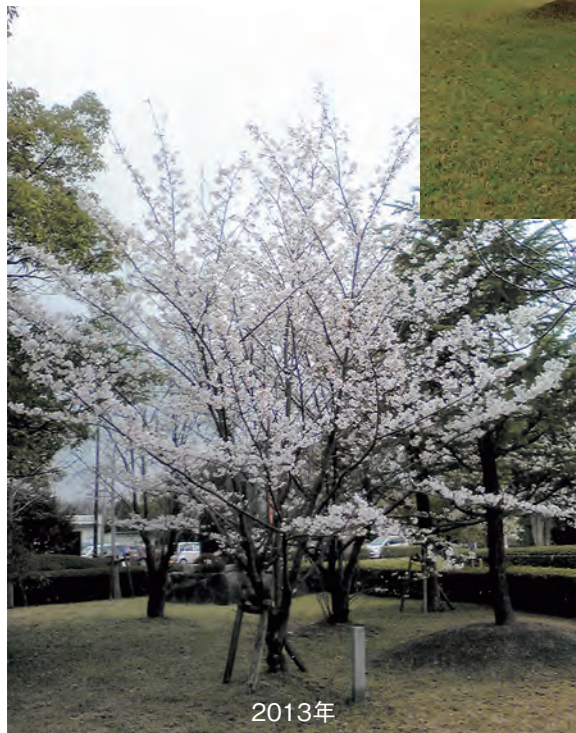
卒業式後の事務連絡も同じ大Bだったと記憶しています。ひとしきり連絡が終わり、さて植樹をしに中庭に出ようかという時、“山下、前へ”と、当時の学年代表に呼ばれ、壇上で感謝状をいただきました。国試対策委員としてゴソゴソしていたからでしょう。それはどの学年でも誰かがやる当たり前のことなのですが、その当たり前をもちよとしたサプライズに仕立て上げる7期生のノリには最後まで感動させられました。卒業証書以上に嬉しかったのは言うまでもありません（ちょっと盛りすぎ?）。そんなことをしていただいたからというわけではありませんが、前後の学年を見渡してみてもやっぱり自分は7期



2019年



2017年



2013年

生でよかったな、と今でもつくづく思います。私的な思い出で申し訳ありません。

皆で植樹したサクラもすくすくと育ち、駐車場から医局へ向かう途中で横目に見ながら色々なことを思い出しては元気もらっています。讃樹會会誌に時折掲載される同期の活躍ぶりも頼もしい限りです（恥ずかしながら会費を長年滞納していたので会誌が届き始めたのは最近ですが）。2020年現在、大学には岡野、木下、土橋、山下が残っています。近くに来ることがあればまた御連絡ください。

2022年は早いもので卒後30年の節目です。7期生のノリで、コロナで弱りはてた経済を回すようなイベントしましょうか!?



1992年

卒業記念碑「鴻鵠の志」に想う

香川大学医学部神経機能形態学 教授
三木 崇範 (平成3年卒・6期生)

香川医科大学6期生は、昭和60年に入学しました。文字通り私達の入学で6学年が揃ったわけです。先生方や先輩たちには、待ちに待った6期生という眼差しで見られていたようですが当の私たちには入学してすぐに実感はできませんでした。しかし、徐々にその思いや期待が伝わってきたことを記憶しています。基礎医学の実習中らしき先輩たち、白衣に聴診器を身につけたポリクリ中の先輩たち、卒業試験・国家試験の勉強中らしき険しく真剣な眼差しの先輩たちを見かけると、私たちが香川医科大学の6年間で成長していく未来予想図を見ているようでした。不安と期待が交錯しながらも医師を目指して学んでいく覚悟を決めたことをつい昨日のように思い出します。

キャンパスは、講義棟や体育館、図書館に加え、学食、大学会館、武道館、プール、グラウンドも完備されていたと記憶しています。現在のキャンパスがほぼ出来上がっていました。一方、教官は一般教養・基礎系・臨床系すべてのスタッフが揃い、まさに香川医科大学という新しい船が、満帆の追い風を受けて出航しようとするときに、乗組員として最後に乗り込んだのが6期生でした。今、思い起こすと当時の教官・職員・学生は一丸となって高みを目指して努力していたように思います。特に、先生方の情熱は学生の私たちの心を掴み、とにかく前向きに高く羽ばたくことの重要性を刷り込まれ、以来私たちはそれをひたすら実践してきたように思います。

全国に数ある医学部の中から香川医科大学を選んで受験し、昭和60年に合格して新入生となった私たちは、偶然の積み重ねで同期生となりました。しかし、この偶然は必然であったように思えるほど私たちの絆は強いものでした。試験や実習は皆で協力し合って乗り越えたのは勿論、医大祭・新歓行事等の大学行事にも積極的に企画・参加しました。バスケットボール大会を学年で企画したこともありました。個性豊かでバラエティーに富んだ学生揃いであったからこそ、全体としての強さがあったのかも知れません。今から約10年前



卒後20年目の同窓会



今にも声がこぼれてきそうな一幕
(左から日下隆先生、諸井隆一先生、山田勇先生)

に卒後20年の同窓会を高松で開催した折には、全国から駆け付けてくれ約半数の同窓の出席がありました(集合写真とスナップ写真)。これも絆の強さの現れと云えるでしょう。

卒業記念碑「鴻鵠の志」これは、6期生の総意として碑に刻みました。「燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや」、ご存じの通り、燕や雀のような小さい鳥には鳳凰のような大鳥の志がどうして分かるうか。分かるはずもないという意味です。新設大学の中でも後発で開学された香川医科大学ですが、全卒業生が上昇志向で医師や医学研究者として活躍することを願い、また6期生は卒業するにあたり「鴻鵠の志」をもって大きく空高く悠々と羽ばたき多方面で活躍すること、そして生涯に亘る愛校心と親交を誓いました。卒業式当

日の記念碑の除幕式（写真）がつい先日のような気がしますが、約30年前のことです。もし可能なら、この日にタイムスリップしたいと思います。6期生がそれぞれの分野で、医療や研究の第一線で活躍していることを思うと、卒業時「鴻鵠の志」の誓いは今でも固く守られていることに嬉しくなります。また、私たちは卒業記念樹として桜の木を植樹しました。卒業式当時の木の幹の太さからは想像もできない程成長して、記念碑を大きく覆うほどになっています。毎年春には、花を満開にして記念碑に彩を添えています（写真）。もう立派な桜の樹となっています。私たちもこの桜の樹のように、大地に大きく根を張るように成長して、押しも押されぬ存在となるべくこれからも精進することを改めて誓います。

昨年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から卒業式・謝恩会が中止になったと聞いています。開学来初めてのことと思います。卒業式は、医学を修めはじめの式であるばかりでなく同窓生の行く先を確認し合って生涯に亘るネットワークと親交を確立す



るという一面もあります。これが十分に叶わなかった卒業生の皆様にあっても香川大学医学部で学んだ同窓としての誇りと絆を胸に精進されることを祈念しています。

最後に、香川医科大学6期生は、令和3年には卒業30年を迎えます。高松にて同窓会を開催する予定です。どうか楽しみにしておいてください。



1991年 卒業式当日の除幕式と植樹



寄稿 恩師から貴方へ

医学部教育40年の回顧

数学担当 上原 正宏

私の大学教育50年、医学部教育40年の節目を過ぎ、大学での教育生活は2020年3月末に終了した。定年退官後も従来の居室の使用ができたこの40年間の医学部での教育人生を振り返るとする。

最初の10年間は医科大学の黎明期であった。教職員、学生共々、新しい大学の創設に夫々の分野で貢献していた。授業にも部活にも大学全体に活気が漲っていた。医科大学としての基本的な方向が確立した時期であった。この中、悲しいことが昭和の最後に生じた。朋友樋渡敦夫先生が長い闘病の末に41歳の若さで亡くなった。彼との思い出は今も忘れられない。博識で、面倒見がよく、森昌子のファンクラブにも入会していたお茶目な一面をも持つ有能な先生であった。後年、仙台での学会の際に樋渡家の菩提寺に墓参りをした。この頃に数学教室に出入りしていた学生達は意志が強く、将来をきちっと見据えた人が多く、今も忘れ得ない印象的な面々である。

次の10年は、実りの多い時期であった。私は主に馬術部と将棋部の顧問をしていた。両方の部に有能な部員が入部し、非常に活気があった。将棋部では、中四国大会での活躍があり、また、両手に余るほどのプロ棋士に指導を受け、一般人に向けた将棋大会も体育館で開催した。個人としては、週刊誌上での桐山清澄九段との対局ができた。二枚落ちの対局ではあったが望外の結果で、今もその棋譜は大切に残している。香川大学との統合で潰れてしまったが、馬術部にも多くの学生が入り活発に活動した。馬術の指導、厩舎の提供など市井の人に大きく助けられたことが忘れられない。当時にお世話になった方々に改めて御礼を申し上げます。

次の10年は国際交流の始まりの期間であったように思える。米国、Delaware大学での国際学会 (ISSAC) での講演にあたり、かの地では当時 National Institutes of Healthに留学していた富田修平君に面倒をかけた。講演の後、数学最大の論文雑誌 Mathematical Reviewの査読員に推薦され、10年余り専門分野の論文の査読をした。また、沼原利彦君から「形」の学会での特別講演を頼まれ、当時の学生のレポートである等角写像の絵図を紹介したところ、その学会誌の表紙にその図が使用されたこともあった。これ以後は、第二代英語学教授芝田征二先生と共に多くのことができた期間で

ある。教養特別講義を開設し、元東大総長有馬朗人氏、大相撲の高見山大五郎氏、曙太郎氏、女流将棋名人清水市代氏、日銀高松市店長、短歌俳句作家、落語家など多くの著名人に講演を依頼し、医学部生の教養向上に寄与したと思っている。また、東大の神野志隆光先生の集中講義「万葉集」は論理的な非常に面白い授業であった。幸町キャンパスでの元国連事務次長の明石康先生の講演を手伝ったことも貴重な経験となった。統合前後には将来を見据え、日下隆君に声をかけ、一緒にBruneiとの国際交流を始めた。英国やMalawi等にも出向き、国際交流の礎を構築してゆく様を実感し、そのあり方について大いに学ぶ事が出来た。Dr. Rafidah夫妻はBruneiから香川大学医学部への最初のゲストであり、Dr. Suwarniは薬理学研究室に学位取得のため留学をした初のBrunei人である。彼らとは今も親戚同様の付き合いをしている。これまで香川、Bruneiの双方から夫々学生、教職員を含む100名を超える人の交流がある。現在では、この国際交流は医学部にとって必要不可欠な重要行事となっている。私的にはBrunei大学 (UBD) 理学部で二度の函数論の海外講演を行い、彼の地で三度もの結婚式に参加したことは特筆に値する。多くのBruneiの人々との交流が私のそれまでの思考過程、宗教観、価値観、人生観を大きく変えたのは確かである。この国際交流が今後も大いに拡充され、益々発展することを切に希望する。

数学教育は開学当初の時間数からすると徐々に減り始め、香川大学との統合前後あたりからその講義時間数は約6割くらいの時間になった。そのため数学での



Dr. Anita, UBD Vice Chancellor, Dr. Suwarni, IHSUBD, Deputy Deanと共に

ゆとり教育が叶わず、残念ながら統計学の理解のための必要最低限の話に終始していたように思う。教材の作成に多くの時間を費やし、第20期生ごろまでの授業内容とは違った内容になってしまったのは痛恨の極みである。大学統合により私が実質的に医学部に籍を置かなくなった結果であろう。

最後の10年余りで気付いたのは、卒業生の子供達が何人もこの医学部に入学していることである。親子二代に渡り医学部で私の数学の授業を受講しているのだ。実に愉快的話ではないか。ともあれ、香川医科大学の第1期生以来4000人有余の学生に出会えた。非常に闊達で、個性的、独創的な面白い学生達に巡り会えたのは実に楽しく有意義であった。最近は何人の卒業生に健康管理を委ねる日々を過ごしているが、現在の目標は、椿花を愛で果物や野菜を栽培する晴耕雨読、悠々自適の日常である。香川医科大学、香川大学医学部への全入学生には感謝しかありません。謹んでお礼を申

します。長い間、本当にありがとう。また何処かでお目にかかりましょう。

新型コロナウイルス（COVID-19）の終息を祈念しつつ……。



ブルネイ建国の父である Pengiran Yusuf 氏と共に

////// 第7回 ////

関 連 病 院

紹 介

～香川大学医学部讃樹會同窓会名誉会長による関連病院訪問記～

香川大学医学部医学科卒業生は3300名を超え、約1000名が県内で医療に貢献しています。一期生卒業後30年以上が経過し、関連病院も数多くなりました。そのうち基幹病院にも医師が多く派遣され中心的な役割を担っています。

当企画は、基幹病院を中心に、その病院の特色、あるいは病院長の医療に対するお考えを、濱本が直接病院長を訪問しインタビューを行うものです。今回は、2020年7月22日11:30からおよそ1時間、香川県済生会病院にお伺いし、若林久男院長にお会いして、卒業生の進路等に役立つお話を詳しくご紹介いただきました。

名誉会長 濱本龍七郎

香川県済生会病院の紹介

香川県済生会病院 院長 若林 久男



図1

当院の歴史と概要

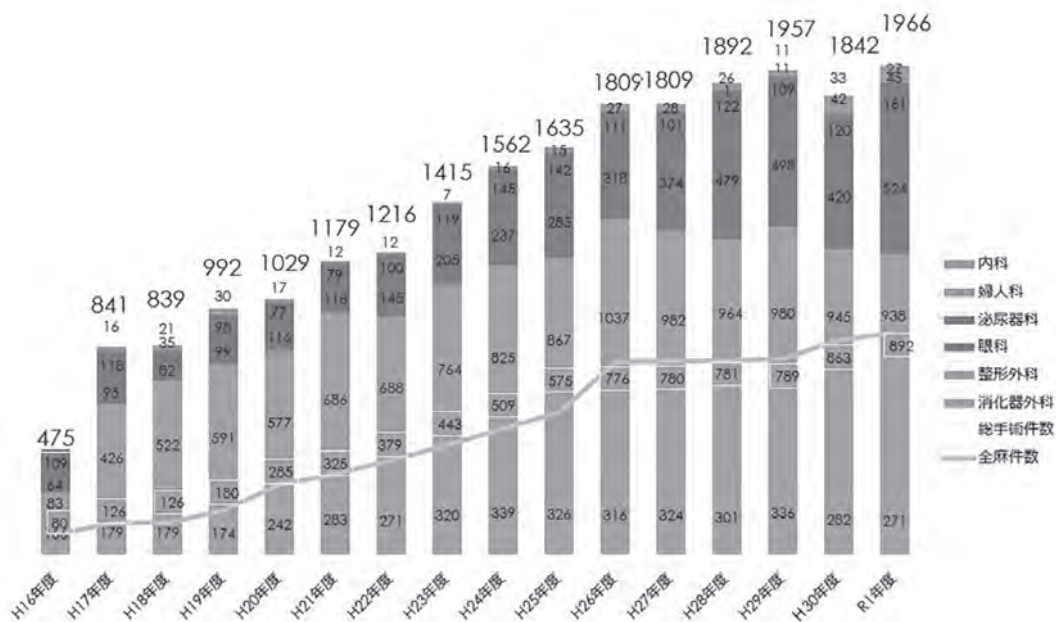
恩賜財団済生会は、明治44年、明治天皇によって「十分に医療が受けられない人たちに施薬救療し、済生の道を広める」ために設立されました。「済生」というのは中国が語源の言葉で、命を救うという意味だそうです。当初の組織は、内閣総理大臣桂太郎が中心となって作り、初代総裁は皇族の伏見宮貞愛親王殿下、そして理事として桂太郎や、大熊重信、板垣退助、渋沢栄一など、当時の政財界のそうそうたる人物、そして初代の医務主幹として北里柴三郎を迎え発足しました。今年で創立109年を迎え、現在では全国40都道府県に支部があり、全国で82病院と381医療介護福祉施設を有する日本で最大の医療社会福祉法人です。本部は東京タワーのすぐ近くにあります。

私たち香川県済生会支部の歴史では、明治44年ごろから、県西の方、現在の善通寺あたりでの活動の記録

があるようなのですが、当時の資料が散逸しはつきりしません。もし資料が見つければ、香川県支部は済生会の中で有数に歴史の古い由緒ある支部である可能性があるのですが。明確なのは、前所在地であった桜町での診療所開設が昭和18年4月で、ここを持って当院の起源とし、現在創立77年としています。

その後平成16年4月に桜町の旧病院から、現在の多肥地区に新築移転しました(図1)。旧病院の頃は、近くの栗林病院の陰に隠れた、どちらかと言えば慢性期系の病院であったかもしれませんが、この多肥地区に移転後は、特に整形外科、外科の急性期志向の若い医師たちが香川大学から赴任し、急速に急性期機能を中心とした病院に成長してきました。図2に当院の手術数の推移を示します。ほぼ一貫して右肩上がりでの手術症例数・全身麻酔件数の増加を重ねてきました。私はこの1枚の図が、当院のこれまでの歩みや特色を

図2 香川県済生会病院 手術件数推移



よく表していると思います。当院の紹介をするときによく提示させていただいています。さらにその後、消化器内科を中心とした内科と循環器内科も香川大学のそれぞれの医局から精鋭の先生方を迎え、内科系も救急機能や急性期医療志向として大変活発となり、現在ではほとんどの診療科が香川大学医局と関連を持つ、市内の大学関連中核病院となりました。現在19の診療科目で高松市南部地域を中心とした救急・急性期機能病院として地域の医療を支えています。

私たちの病院は、病床数198床と、規模の上では決して大きな病院ではありませんが、地域の皆様を紹介状なしに気軽に受診できる地域一般急性期病院で、しかしその一方、各診療科の特定の専門分野では、大学や県中など大きな病院にも決して引けは取らない専門的高度医療の提供ができる能力があるのが特徴だと思っています。整形外科の年間手術件数は年間900件を超え、肩や手の手術では県外遠方からも患者さんが訪れています。また、眼科では白内障の手術が多いのですが、斜視については専門領域です。外科は、消化器外科で、消化器癌のほか、胆石、ヘルニア、虫垂炎等の良性疾患の腹腔鏡手術に多く対応しています。また、内科は消化器内科が中心で、年間4000件を超える内視鏡検査と治療を行い、特に超音波内視鏡は得意で、大学医局の協力を得て、臍臓に特化した外来も開始しています。循環器内科はカテーテル治療を得意としてきました。各診療科とも、大学の医局と連携し、疾患の分野等で大学の診療の補完的機能が担えるような診療を目指していきました。

済生会病院の中核的事業の1つに、生活困窮者への無料低額診療制度があります。これは、「恵まれない人たちに施薬救療」というもとの創立の理念である、済生会のDNAのような使命的事業であります。要するに、金銭的に余裕のない患者さんたちに、個人負担分医療費を減免、もしくは全額免除する制度で、生保患者以外に、非課税世帯や低所得の方を対象とし

たものです。当院でものべ患者数の10%以上はそういった減免患者の診療をするように本部から指示があります。当院では現在この無料低額診療適用患者さんは12-14%程度の実績です。この個人負担減免部分は、病院負担であり、年間約1700万円程度は、こうした負担を担っています。

また、それ以外に全国済生会病院では、地域によってホームレスの健診など、いわゆる社会奉仕的な医療活動を行っており、当院でも年に2回、精神障がい者施設を訪問し、健診活動を行っています。

また、当院の特徴のもう一つ大きな柱に済生丸事業があります。済生丸(図3)は、日本で唯一の診療船であり、これ以外に日本で公式に診療機能を持つ船舶はありません。したがって新聞雑誌などのメディアや行政関係者・医療関係者等、本当に多くの方が見学に来られます。この事業は、済生会創立50周年を記念して船が建造され、当初は本部事業でしたが、現在は岡山・広島・愛媛・香川の瀬戸内4県の共同事業となっています。所属は岡山県済生会支部ですが、母港は高松港で、船舶事務所は香川県支部にあります。瀬戸内海の島嶼部の巡回健診機能が主な職務であり、瀬戸内



図3

4県をずっと廻っており、香川県には月に1週間程度来ます。香川県に来ると香川県済生会のスタッフが乗り込んで香川県の島嶼部の健診に行きます。例えばその翌週は岡山県に行く、そうすれば岡山県済生会のスタッフが乗り込んで岡山県の島嶼部を健診に回る、そして次は広島に、というように4県で常時運行しています。

しかし、この済生丸事業も、現在大きな転換期を迎えています。それは瀬戸内海の島嶼部では過疎化・高齢化が顕著で、済生丸の健診受診者も減少しています。島嶼部は過疎化先進地域と言われており、今後この事業の継続については再考せざるを得ない時期に来ていると実感しています。しかし、今後地域の医療を担っていく研修医を含めた若い先生方には、こうした僻地医療や前述の社会奉仕的な医療提供例など、ぜひ経験してもらいたいという思いがあります。私たちの病院では、幸い大学のプログラムに参加した多くの研修医の先生方をお迎えしています。当院での研修中にこうした臨床もぜひ経験してもらいたいと思っています。

今後の地域の中での当院の役割と存在感

私たちの病院は、前記のような歴史をたどりながら、現在の病院の特性は、小規模ながら高松市南部地域での地域一般救急・急性期医療を支える機能で、重症度や疾患によっては高度急性期病院へ紹介し、また逆に地域包括ケア病棟や療養病棟で、回復期・慢性期の患者の受け皿となる機能の病院です。現在、地域医療構

想という名のもとに、行政の積極的介入（厚労省はそうは言っていないが）による地域での病床数等のコントロールが行われようとしています。具体的には、2025年に向けて急性期病床を中心とした病床数の削減です。その議論の中では、自分たちの病院の機能は何なのか、急性期なのか、今後人口が減少する地方の中でどう立っていくのか、といった事が問われています。私たちは、例えば同じ急性期機能でも、小規模病院には担うべき地域一般急性期機能があり、大規模病院には担うべき高度先進急性期機能がある。それぞれ担うべき役割があり、同じ急性期でも地域の中で役割分担と連携が必要であると考えています。

また、大学医局の関連の強い病院として、大学の医局と専門性や疾患群、例えば大学では経験が難しい良性疾患や一般的日常疾患、一般的救急患者等の診療など、大学の臨床経験とは補完的な診療経験ができるような、市内近隣の教育関連施設としての責務を担いたいと考えています。教育面では、初期研修医や後期研修医の皆さんが、当院で指導医のもと、実際に患者さんに触れ、チームリーダーとして指示を出し、自身で検査を実施し、術者として手術をする。実地臨床経験を積んで、地域医療を支える医師としての自覚を持って、大学に入局をする。入局後にまた当院に赴任し研修医を指導する。そういったサイクルが回ればと思っています。讃樹會の皆様、今後とも当院をよろしくお願いたします。（図4）



後列 中央 副院長 尾立 磨琴

左から順番に 研修医 森田 莉絵(H31)、樋口 雅大(H31)、木村 駿吾(H31)

消化器内科部長 河野 知樹(H17)、消化器内科医員 赤井 開(H30)、小松 暁(H29) (敬称略)

国外留学助成金 留学レポート

心臓病センター榊原病院 循環器内科
森川 喬生 (平成23年卒・26期生)

留学期間：2017年6月-2019年5月

留学先：Smidt Heart Institute, Cedars Sinai Medical Center, Los Angeles, CA, USA

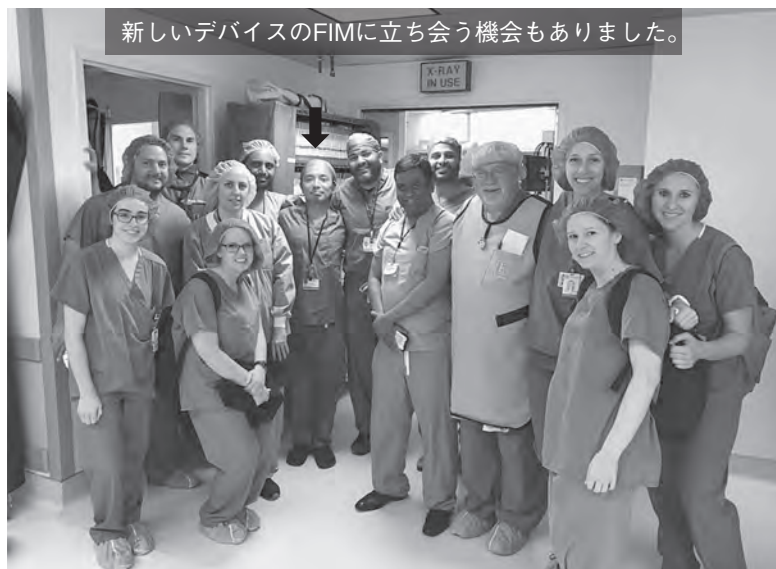
はじめに、この度は讃樹會国外留学助成金のご支援を賜りましたことを改めて感謝申し上げます。私は米国、カリフォルニア州ロサンゼルスにありますCedars Sinai Medical CenterのInterventional Cardiology部門に、visiting scientistとして一年間、visiting fellowとして一年間の計二年間留学し、構造的心疾患（SHD）と呼ばれる弁膜症に対するカテーテル治療を学んできました。本稿の筆を取るにあたり、過去の諸先輩方のレポートを拝見させて頂きました所、基礎研究でご留学された先生が中心の印象でした。私は留学中カテーテル室で過ごす時間が多く、やや毛色の異なる留學生活を送りましたので、留学を検討されておられる先生方にもこのような形の留学もあると参考になれば幸いです。

留学まで：

私は初期研修修了後に循環器内科を選択し、日本国内ではハイボリュームセンターである心臓病センター榊原病院でトレーニングを受けました。ひとくちに循環器内科と言っても、サブスペシャリティに分かれており、その中でも内科医でありながら積極的に治療介入できるInterventional Cardiology（いわゆるカテ屋さん）に魅力を感じその道に進むことを決めました。当時はカテーテルといえば治療対象は狭心症や心筋梗塞など冠動脈疾患がほとんどでした。治療自体も面白く、特に心筋梗塞への治療などはやりがいもあったのですが、治療対象となる冠動脈疾患の大半は狭心症に対するカテーテル治療（PCI）に関しては、治療によ

る予後改善のエビデンスに乏しく、それどころかネガティブデータがどんどん出てくるようになりました。そのような中、日本にTAVI（経カテーテル的大動脈弁置換術）が入ってきました。これはカテーテルを用いて大動脈弁置換術を行う手技で、多くは大腿動脈からの穿刺のみで治

療を完遂することが可能な治療です。当初は外科手術ができない患者さんへの代替治療と思っていたのですが、現在では外科的手術よりも高い治療成績が証明され、まさにgame changerと言える治療の出現に衝撃を受けました。調べてみると、SHDインターベンションというジャンルが欧米で大きく盛り上がり、大動脈弁のみならず僧帽弁・三尖弁など多くの弁膜症がカテーテルで治療されていること、しかし日本ではPMDAの高いハードルのためかdevice lagがあり、欧米より10年ほど遅れていることを知りました。新しい物好きな性格もあって、このような治療を学びたいと考えるようになり、TAVIの日本導入の際もフランスやイタリアなどで治療を学んだ先生が中心となっていたことから、私も留学を考えるようになりました。留学先に関しては、せっかくなのでヨーロッパの日本人が誰も行った事ない施設に行きたいと考えていたのですが、このような形の留学も二番煎じ・三番煎じであり新規性に価値は少ないと考え、日本人の受け入れ実績が豊富で、米国では最も症例数の多いCedars Sinaiを選択しました。実際これは正解でした。留学に際して学会で留学先のボスであるDr. Karを出待ちをして直談判という作戦をとりましたが（東京、シンガポール、ローマと三回もやりました）、最終的には向こうにおられる日本人の先生が色々とお動いて下さったのが留学できた最大の要因だと思っています。



留学中・仕事編：

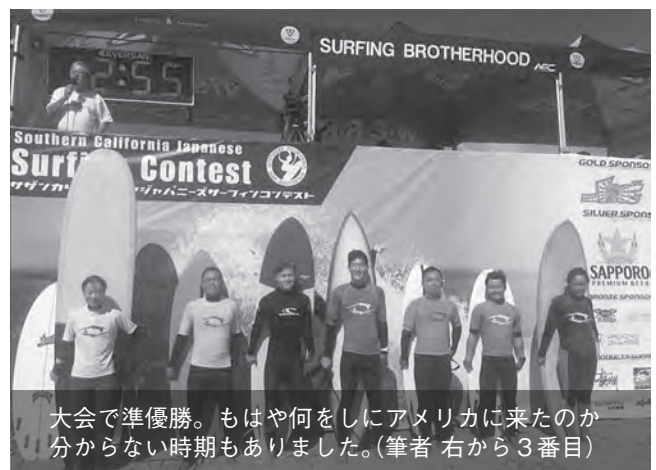
留学中、最初の1年はカテーテル治療の見学とレジストロリーデータの打ち込みを行い、2年目は実際にスクラブして治療に参加し、その他の時間は研究という形でした。実際に行ってみると、想像していたよりも遥かに刺激的な日々でした。主にカテーテルでの僧帽弁形成術(MitraClip)の技術を習得したいと考えていたのですが、それ以外にも三尖弁形成術(Triluminate, Trilign)、僧帽弁置換術(TMVR)、脳梗塞の原因となる血栓ができる左心耳のカテーテル的閉鎖術(Watchman)、奇異性脳塞栓症の原因となる卵円孔のカテーテル閉鎖術(PFO)など日本未導入の治療で、多くの症例を経験することができました。また研究に関しては、お恥ずかしながらいくつか取り組んだうち形になったのは一編のみでしたが、Interventional Cardiology領域のトップジャーナルであるJACC interv.に原著論文がアクセプトされました。(J Am Coll Cardiol Intv 2020; 13: 1544-53) MitraClipは大腿静脈からカテーテルを挿入し、心房中隔穿孔を行い左心房に到達し治療を行うのですが、術後に医原性心房中隔欠損症が残存します。心機能が悪い患者さんに行う治療であるがゆえに、先天性心房中隔欠損症におけるEigenmenger症候群のように、稀に右左シャントを生じることがあり、低酸素血症となるため、重大な合併症になります。この現象についてメカニズム、予測因子を検討しました。発生した場合は経カテーテル的に閉鎖をすれば問題ないのですが、欧米と異なり、日本においては全てのMitraClip施設において閉鎖ができるわけではないという現実がありました。しかしながら、日本においては全く知られていない合併症でもありました。こうやって形にすることで、「新規治療の日本への安全な導入の一助になる」という私の留学のpublic missionを一つ達成できたのではないかと考えています。

留学中・プライベート編：

一日の流れは、毎朝7時15分に一例目の患者さんが入室してきますが、日本と異なりオペレーターは全身麻酔がかかってドレープが掛かってから入室すればいいので、8時頃からスタートでした。そこから多い日はMitraClip 3件、三尖弁の治療1件と行った形で、大体夕方には手技が終わりました。私の立場はただカテに入っていればそれ以外は誰も何も言わないというものでしたので、夕方は明るいうちから家に帰り、家族と食事をして子供とお風呂に入ることもできました。また、カリフォルニアはサーフィンの本場でもあります。留学当初、時間を持って余して試しに行ってみたらドブプリとハマってしまい、毎朝4時に起きて海に入ってからカテ室に向かう、という生活を送っていました。また、オンコールなどのdutyもなかったもので、週末は土日丸々フリーで、家族で色々なところに旅行することができました。



モーニングルーティンだった波乗り。

**総括：**

私にとって留学の目玉の一つであったMitraClipは、これまで外科的治療でも介入の優位性を証明できなかった、機能性僧帽弁逆流（僧帽弁逆流は大きく分けて、弁自体の異常である器質性僧帽弁逆流と、心機能の低下に伴う機能性僧帽弁逆流があります）に対する予後改善効果が証明されるという臨床に大きな影響を与える報告を留学中にサンディエゴで行われたTCT2018で聴く機会がありました。（その後結果はNEJMに掲載されました）また、帰国後は心臓病センター榊原病院に戻り、医師9年目と若輩者ながら香川大学の先輩である吉鷹先生のご厚意もあり、中心メンバーとしてカテーテルインターベンションに携わる事が出来ており、この領域の可能性に賭けて留学という一大決心をした私の選択が間違いではなかったと考えています。また、人種、文化、価値観、医療システムなど全く異なる環境で働くということで、月並みながら私の社会人としての価値観に大きな影響を与えてくれました。最後に、この領域において日本未導入の治療も多く、日本はまだまだ欧米から遅れております。そのため、今後も新しい治療の日本への安全な導入に、「Think globally, Act locally（讃岐の丘から世界へ）」の精神で臨床、研究ともに引き続き貢献していければと思っております。



人生は一局の将棋



Vol.4

社会福祉法人恩賜財団 済生会今治病院 病理診断科
坂東 健次 (平成17年卒・20期生)

【はじめに】

令和2年5月某日、趣味の将棋について文章を書きませんか?との依頼を受けました。自分より将棋の強い方や自分より熱心な将棋ファンの方などもいらっしゃるので恐縮ですが、書いてみることにしました。

【将棋の説明】

将棋は2人で対戦するボードゲームで、 $9 \times 9 = 81$ マスの盤上で王(玉)、飛、角、金、銀、桂、香、歩の8種類、各自20枚の駒を使って1手ずつ交互に駒を動かし、先に相手の王を捕まえたら勝利、というルールです。王と玉は同じ駒で、元々は玉でしたがいつの頃からか片方が王となり、現在に至ります。1回の対局は、多くの場合は100手前後で終わりますが、ときには200手を超えるような大熱戦もあります。

古代インドのチャトランガというゲームが起源で、形を変えながら世界中に拡散(西洋のチェス、中国のシャンチーなど)したとされていますが、日本の将棋には独特の「持ち駒」というルールがあり、相手から取った駒をストックし、好きなタイミングで自分の駒として利用(盤上の空いているマスに打つ)できます。最後まで駒数が減らないため、ゲームがより複雑になっています。なお、持ち駒を使うことを「持ち駒を打つ」と表現するためか間違われがちですが、将棋の対局を行うことは将棋を「打つ」ではなく「指す」と言います。

将棋の効能としては、集中力や忍耐力の向上、論理的な思考力が身につく、相手の立場になって考えられるようになる、など様々な利点が挙げられます。

【将棋歴・初期(小学生～中学生)】

小学3年頃に父からルールを教わりましたが、中学卒業まではたまに家族や友人と指す程度でした。ただ、将棋の本は時々読んでいて、攻撃や守備の陣形を覚えたり問題を解いたりしていました。「この問題を解いたら2級」のような棋力(将棋の実力)判定付の問題集が楽しかったです。

【将棋歴・中期(高校生～大学生)】

高校で囲碁将棋部に入部したことで、将棋を指す機

会がかなり増えました。昼休みや放課後に部員や顧問と練習対局し、年数回ある高校将棋大会に参加しました。2年時には個人戦、3年時には団体戦(3人1組、2人勝ったチームが勝利)で県大会を制し、全国大会では個人戦は1回戦負け、団体戦はベスト16でした。

大学でも囲碁将棋部に入部しました。部員同士で(ときには部員以外も)練習対局したり、近所の将棋道場(水田将棋会館)や香川大学将棋部(入学時は香川医科大学と香川大学は別で、5年生の時に合併)へ行ったりしました。顧問の上原正宏先生(数学)がお招きしたプロ棋士に指導対局していただいたこともありました。また、香川県内のアマチュア将棋大会や年2回ある中四国の大学将棋大会に参加しました。団体戦は高校と違って7人1組(4人勝ったチームが勝利)で、当時は香川「医科」大学(単科大学で部員が少ない)だったので大変でした。総合大学は部員が多いので10人前後でチームを組み、個々の調子や相手との相性などをふまえてオーダーを組み替えたりしますが、単科大学は7人集めるだけでも大変で、部員じゃない方々に助っ人で来てもらったり、4～5人で参加(3～2人分は不戦敗)したりしました。

【将棋歴・後期(大学卒業後)】

大学卒業後も何度かは香川県のアマチュア大会に出場しましたが、将棋を指す機会は激減しました。ただ、将棋から離れたわけではなく「詰将棋」を主体に細々と続けています。

【詰将棋(つめしょうぎ)の説明】

詰将棋は、相手の王を追いかけて捕まえる、という問題です。王を捕まえた状態を「詰み」と言うため、詰将棋と呼ばれます。実際の将棋の対局に出てきそうな物も多数あり、棋力を高めるトレーニングとして解かれますが、実戦とはかけ離れたパズル的な作品、絶妙な手順で見る者を感動させる芸術的な作品など多種多様で、手数も一桁から1000手以上の超大作まであり、実戦とは違う魅力があります。自分には長編は難しいので20手未満の短編をよく解きます。また、たまには自分で詰将棋を作ったりもします。

【詰将棋（解く）歴】

小学6年頃「一人で遊べる詰将棋（著：佐瀬勇次名誉九段）」を買いました。3～9手詰の本で、当時の自分には9手詰は難しかったです。その後も色々な本を買いましたが、「1手3手の詰将棋（著：米長邦雄永世棋聖）」は医師国家試験の試験会場に持参しました。簡単な詰将棋をリズム良く解くことで、試験前の緊張感が和らぎました。

現在は「果し状（著：伊藤果八段）」を解いています。伊藤八段（プロ棋士で、詰将棋作家としても有名）の詰将棋創作50周年を機に発売されました。簡単には解けない難問揃いで、数年前から少しずつ解いています。悩んだ末に解けた時の爽快感は格別です。

【詰将棋（創作）歴】

高校時代に簡単な短編を1個作り、その後も断続的に創作しています。当初は知人に見せるだけでしたが、やがて雑誌に投稿し始めました。月刊の将棋雑誌「近代将棋（現在は休刊）」や「将棋世界」に創作詰将棋を募集するコーナーがあり、また一冊まるごと詰将棋の「詰将棋パラダイス」という雑誌もあります。大学5年時、近代将棋に入選（図1）した後、約3年に1回ペースで将棋世界に入選（図2、3）、その後は長らく駄目でしたが、約10年の沈黙を経て今年3月、詰将棋パラダイスに入選（図4）しました。

簡単に詰むと面白くないので解答者の意表を突く罠を仕掛けるのですが、巧妙な罠をさりげなく仕込むのは容易ではありません。「簡単すぎ」「狙いが見え見え」と酷評されることもあります。良い詰将棋が出来て解答者に「難しかった」「面白かった」「感動した」などと言ってもらえると嬉しくなります。作品集を出版するような優秀な詰将棋作家のように好作を量産する能力はありませんが、マイペースで不定期に少しずつ創作しています。

【おわりに】

表題は香川県出身の小説家、菊池寛の言葉「人生は一局の棋（将棋）なり、指し直す能わず」から拝借しました。将棋は「待った（元に戻す）」ができない点、いくつかの選択肢がある中での決断の連続である点など、人生とも、また病理診断とも似ており、将棋の経験が仕事に活かされているように思います。



図1：近代将棋2004年2月号
詰将棋シアター



図2：将棋世界2006年11月号
詰将棋サロン



図3：将棋世界2010年3月号
詰将棋サロン



図4：詰将棋パラダイス2020年3月号
新人コンクール

追悼

前田昌純先生を偲ぶ

- 気道形成(Tracheobronchoplasty)の先駆者 -



高知県・高知市病院企業団立高知医療センター呼吸器外科
岡本 卓 (平成7年卒・10期生)

香川医科大学名誉教授 (Emeritus Professor) で、現在の香川大学医学部呼吸器・乳腺内分泌外科 (旧香川医科大学医学部第二外科) の初代教授 (First Professor) 前田昌純先生が、令和2年2月5日 (享年85歳) にお亡くなりになりました。医学者であり外科医であり、そして音楽家でございました。生前にお世話になりました私が、同窓会の一員としてこのような形で哀悼の意を表するのは荷が重いと感じております。けれども先生に教わったこと、お傍で見せて頂いた先生のご苦勞などを整理していく過程で、先生のMEMORIAL REVIEW ARTICLE¹⁾ のように一つひとつの出来事を整理し、後の世代に少しでも何かを伝えることができればと思いはじめました。先生が生きてこられた人生を、若輩者の記憶や先輩の諸先生方の記録等を頼りに数頁で伝えるのは本当に難しく、心の動揺もありました。つたない文章になるかもしれませんが、ご容赦頂きますとともに、同窓の方々には先生のご冥福をお祈りいただければと思います。

前田先生は昭和9年2月7日のお生まれで、86歳の誕生日目前の2月5日に生涯を閉じられました。昭和34年に大阪大学医学部をご卒業され、昭和41年に同第一外科助手、昭和52年に同講師、昭和55年に同助教授に就任、昭和56年に香川医科大学第二外科教授に47歳で着任されました。ナンバー外科である第二外科教授として、平成11年3月の定年退官まで18年間の責務を全うされました。現在の心臓移植、肺移植、および心肺同時移植実施施設である大阪大学在任中は、人望が厚く選挙で選ばれた名医局長と評されておられたようです。香川の地におかれましても、7年に及ぶ医局長のご経験が、大先輩の接待方法、やんちゃな若い医者への扱い方、医局の運営等に役に立ち、得難い財産であったと時折呟かれておられました。退官後は公的業務や管理業務から退かれるとのことで、一地方病院にお務めで学術的なこととお会いすることはございせんでした。国立大学名誉教授ですので、ご逝去に際し叙勲の対象になります。しかしながら家族葬とのことでしたので、訃報が伝わりましたのも逝去後かなり日数が経ってからでございました。周囲の方々、ご家族、ご親族の方々に申請をとの動きもあつたようにお聞きしております。けれども、生前に「退官後公的なことから一切退く」ということを強くおっしゃられておりましたので、先生のご意思が尊重されたのかもしれませんが。

香川医科大学1期生の入学が昭和55年、医学部附属

病院の診療開始が昭和58年です。臨床講座の教授として、1期生が臨床医学を学び始める時期に、大阪大学と香川医科大学準備室などを行き来され、着任されたようにお聞きしております。当時は、本四連絡橋が開通していない時期です。大阪の自宅と香川の往復に、自家用車とフェリーを利用されておられたようです。開学当初は、教授の出身大学の系列が、当時のナンバー講座によく表れておりました (1は岡山大学関連、2は大阪大学関連など)。母体となるいくつかの大学系列群から教官を派遣いただくことで、講座はもとより医学部全体としても一定のまとまりを持ち、ガバナンスを保持しながら医学教育が開始されていたように思います。現在の病床の約半分 (331床) の附属病院開院に尽力され、外科診療を立ち上げられました。記録では、開院当初は旧第一外科、第二外科が同じ病棟で診療をされていたようです。附属病院は昭和60年より600床での運用開始ですので、この時期から単一病棟での外科診療が開始されたと思われます。当時の第二外科は、呼吸器外科、内分泌・乳腺外科、消化器外科の教育、研究、診療を担当しておりました。大学紛争のご経験のある先生は、大学紛争で到達したコンセンサスとして、教育の重要性をしばしば呟かれておられました。先生のご専門は呼吸器外科で、とくに気道形成をご専門にされ、米国・ハーバード大学 (Grillo HC先生に師事) にも留学経験がお有りでした。当時まだ黎明期であった本邦の形成術の普及に、大きな責任感を持たれてお仕事をされました。Grillo先生の記された著書・教科書²⁾ には、前田先生の写真 (Figure 1) も掲載され、留学でのご活躍が記されております。

日本呼吸器外科学会ホームページに、「日本胸部外科学会の中で、呼吸器外科を専門とする先生方が、社会的認知、専門性の認知という点で手弁当での活動の末、日本呼吸器外科学会を立ち上げられ、日本医学会への加盟を認められた」という内容の記載があります (少し改訂しております)。先生のお名前も出てきますが、学会創設・設立時の世話人のお一人でした。平成7年には、第12回日本呼吸器外科学会総会 (高松市) 会長をお務めになりました。

私は平成7年に香川医科大学を卒業いたしました。先生に直接お会いしたのは、5年生の臨床実習・ポリクリでした。4年生から外科の講義がありましたが、背広の襟元に固定できる小型のマイク、いわゆるピン型のマイクをあえて指先でお持ちになるスタイルでの



FIGURE 9 Mazazumi Maeda, MD, pictured in his research laboratory. In 1970 and 1971, he worked as a Research Fellow in Surgery at Massachusetts General Hospital with Dr. Grillo, precisely describing healing of the juvenile trachea after resection. From the University of Osaka, he went to Shikoku, as Professor of Surgery and Chief of Surgery at Kagawa University. He was a leader in introducing tracheal and bronchial surgery in Japan.

Figure 1 Grillo先生の著書「Surgery of the TRACHEA and Bronchi.²⁾」より引用。お若い頃の前田先生が26ページに記されている。

講義でした。この頃には、一学生と教官の接点はありませんでした。定年退官が平成11年3月と決まっておりましたので、時間軸でみますと私の学年が大学院の身分で勉強させていただける最終学年でした。たまたま臨床実習で当たった患者さんが、気管支形成を受けた方でかつ後輩の学生さんのお爺さまという不思議な縁もあり、先生との距離が短くなり卒業後にお世話になることになりました。

形成術は臓器でいくと再建に行き着きますが、当時の第二外科では心臓血管外科を除くほぼすべての外科手術がなされており、呼吸器に興味も持ちつつも他の臓器も勉強できる環境でした。別の一面もあり、当時の第二外科は病院一過酷と評される診療科でもありました。先生は「うちは道場みたいなもの」とコメントされ、日本全体でも拡大手術の多い時期の責任者を務められました。時代背景からいきましても、昭和60年～平成3年のバブル時代、「24時間戦えますか」というコマーシャルが平成元年の流行語になるような時代、そして1本目の本四連絡橋が開通した頃（昭和63年）のリーダーでございました。拡大手術が多くあることは、裏を返すと手術および病棟業務が多忙になるということです。呼吸器外科領域ですと、PCPS（経皮的

心肺補助、いわゆる部分体外循環・人工心肺、ECMOが同義語）やHFJV（一般にはジェットベンチレーション）の導入、猛威を振るったMRSAへの院内感染予防や汚染創の浄化など、業務は多岐にわたりました。そのような時期ですので、ピリピリとした雰囲気をもつ上級医が多くおられ、各領域の上級医を統括する形で先生がおられました。また、先生を始めすべての上級医の糸結びが速く正確で、最低ラインに達するまではコッヘルやミクリツ鉗子で手袋越しの指導がありました。大血管の再建、気管・気管支の再建（形成）、消化管の再建に代表される吻合・縫合という手技は、針糸で結び繋いでいく作業でございます。縫合不全は、大血管であれば大出血、気道の場合は感染、呼吸不全、消化管の場合は腹膜炎、感染になります。縫合不全は基本的に漏れ・leakをさし、ひとたび漏れると蜂の巣をつついたような忙しさになり、そして患者さんが生死に直結する状態になります。縫合、吻合作業を行う医師には、大きな責任と重圧がかかります。

先生は気管や気管支吻合に際しては、運針は「針の刺入と同時に針を離し、出来るだけ刺入時間を短く」、糸結びは「指先の感覚を重視して両手結びで行う」ものでした。前者は針による組織の挫滅を最小限に防ぎ（こじらない）、後者は緩からず強からずというバランスの取れた結紮になります。吻合に使用するモノフィラメント糸は、よくすべります。結ぶスピードが不安定で、力の掛け方や方向が悪いとすぐ緩みます。後述しますが、先生は私生活ではヴァイオリン奏者という一面がおありで、指先の感覚に重きを置かれておられました。大きな気道ですと、10～20数本ある糸をもつれないように裁かれ、連続縫合ではなくすべて結節縫合をされました。血管縫合は鉗子で調節しながら出血しない最小の強さで結ぶけれど、気管・気管支は切り足せる長さも少なく、結び直しのチャンスが少ないとおっしゃられていました。どこの領域にもいろいろな理由でご法度というものがあると思いますが、先生の形成手術では片手結びがご法度でした。

形成術に関しては、びっくりするようなめぐり合わせもございました。先生が昭和の時代に手術された方に会いました。患者さんは当時22歳の看護学生さんで、結核で肺の切除と気管分岐部にかかる部位までの気管・気管支の形成術（当時も現在も高難度手術）を受けておられました。その方が術後30年前後を経て、晩期の気道狭窄で来院されました。患者さんは、前田先生のことをよく覚えておられました。先生が、形成術を行った患者さんのことをしっかり記憶・記録されておられるのは聞いておりました。退官後でしたが、お手紙で問い合わせしたところ、その方は〇〇先生が症例報告を書いていることなどのご返事を頂きました。昭和58年の症例報告の考察³⁾には、「まだ若い看護学生で、将来の看護婦としての激務を考えると、一側肺全摘を行うか左上葉を残すかは、将来の生活方針を左右する重大な事柄であり、どうしても一側肺全摘を行いたくなかった」と記載されています。晩期の気道狭窄も改善し、現在も看護業務をこなしておられる患者さんを重ね合わせると、目頭が熱くなりました。

研究面では、臨床系講座では分子生物学的手法がま

だ一般的でなく、臓器移植・人工臓器などを時代背景にして、臓器灌流・保存、呼吸生理、放射線科との伸展肺固定での研究といったマクロ的なものが多かったようです。先生は、実験系確立のための工程を大事にされておられました。当たり前ですが、「基本となる実験系・測定系に、10%以上のバラツキがあるようでは実験を進めるに値しない」ということからです。もっともなことなのですが、このバラツキ即ち変異係数（今は変動係数をいうことが多いようです）10%がなかなか切れず、実験系の確立は容易ではありませんでした。大きな動物や臓器からのデータの特性、少ないN数の実験系におけるRandomizedの大切さ、安定した実験系の確立の困難さを学ばせて頂きました。そのようなことから、推計学の大切さも強くおっしゃられておりました。日本語論文の中で「統計学的検定」という言葉が使われますが、推計学を早くに取り入れられており、推計検定という言葉を選んで使われておられました。時代とともに言葉も変わりますが、統計学はどちらかというところ全体から得られるデータを要約・考察していくこと、推計学は限られた集団のデータから全体の特徴を推測していくということになるかと思えます。大きな動物、生体などの実験系では、推計学のほうが理にかなった表現だということで、このような点もしっかり指導いただけたかと思っています。当時の私は、残念ながらそこまでの理解はしていませんでした。パソコンもまだそうない時代からの推計学ですので、先生は手書きの筆算で計算もされておられました。先生の御言葉のいくつかがございます。「理論のない医学は祈祷」、「推計処理のない論文は随筆」等、Resultsを重視したIMRAD方式の論文の書き方や医学研究のやり方を教えていただきました。

学会では専門の気管・気管支形成のセッションの司会、演者が多く、どちらかという強い口調で全体を引っ張るという感じではなく、控えめに大局をみながら静かに説得力のあるトーンでのコメントが多かったように思います。決して大きな声ではなかったのですが、発言がはじまると周りが一度静まってから聞き入るという光景だったかと思えます。かばん持ちで同行させて頂いた時も、他施設の同世代の経験豊富な先生方からのコメントを、会場の外のフロアで聞かせていただく時間も頂きました。

最後になりますが、先生はプライベートでは先述の通り音楽家でもあり、長くヴァイオリンをされておられました。辻久子さんのお父様に師事されていたのは他の先生の記録もありました。記録によりますと、香川医科大学着任後も学会の前夜祭での演奏、医局旅行での演奏などをされておられました。大阪大学の先輩で名古屋市立大学の名誉教授、かつ世界の呼吸器外科医に名の知れた胸腺上皮性腫瘍の正岡分類を提唱された故正岡昭先生を慕っておられました。正岡先生はオペラの制作や指揮者として大阪大学交響楽団を率いておられ、名古屋市立大学の退官後もオペラの制作もされていたとお聞きしています。下記の記事（Table 1）が、ネット上にございます。大阪時代の呼吸器外科では、正岡先生がライター、前田先生がサブライターというご関係でしたが、音楽では指揮者が

Table 1 演奏会記録

大阪大学交響楽団 第5回定期演奏会
1957.7.1 大阪朝日会館
カバレフスキー／組曲「道化師」
ヴィヴァルディ／ヴァイオリン協奏曲集「四季」
モーツァルト／交響曲第41番ハ長調「ジュピター」
指揮：正岡昭 ヴァイオリン：前田昌純

正岡先生、コンサートマスターが前田先生という形でご活躍されたようです。

ヴァイオリンを弾かれている指先の動きと、吻合時の指先の繊細な動きが一部の方々には重なってみえたことだと思えます。

前田先生を中心にはじまった呼吸器外科の流れは引き継がれ、現在の横見瀬教授も第32回日本呼吸器外科学会総会（高松市）会長をお務めになられました。先生から始まった第二外科は、教育、研究、臨床の3本柱で社会貢献しております。

前田先生、ありがとうございました。

ごゆっくりお休みください。

令和2年7月10日 岡本 卓

参考文献

1. Maeda M. Tracheobronchoplasty in Japan. Gen Thorac Cardiovasc Surg. 2012; 60: 709–723.
2. Grillo HC. Surgery of the TRACHEA and Bronchi. Hamilton・London: BC Decker Inc; 2004.
3. 永井 勲, 清水英範, 宝道 勝, 木村 茂, 前田昌純. 結核性気管支狭窄に対する気管・左上葉気管支側端吻合の1手術例. 気管支日胸外会誌. 1983; 31: 107–111.



Figure 2 第16回国際移植学会学術集会 1996年バルセロナにて。右：前田昌純先生 左：中元賢武先生（元第二外科助教授、現周南記念病院理事長）

飴野 清先生を偲んで

香川大学医学部人間社会環境医学講座 法医学
木下 博之 (平成4年卒・7期生)

人間社会環境医学講座 法医学の前准教授、飴野清先生は令和2年3月18日に逝去されました。享年73歳でした。

飴野先生は石川県のご出身で、昭和47年に金沢大学理学部をご卒業後、金沢大学医学部助手、岡山大学医学部助手、同講師を経て、昭和59年4月に法医学講座が開設された、当時の香川医科大学にご着任されました。文部省長期在外研究員としての10ヵ月の英国留学期間以外は、平成26年3月に定年を迎えられるまで約30年にわたり、法医学の研究、実務、学生教育に尽力されました。また、学生生活委員会委員、医学部学務委員など多数の委員を歴任され、学生生活の向上と学生教育に尽力されました。少しユニークな講義や実習の様子については、印象に残っておられる方も少なからずいらっしゃるのではないのでしょうか。

昭和60年の日航機墜落事故を受け、大規模災害に対応するため香川県下の警察嘱託医を中心に「香川県警察医会」が昭和61年に組織され、事務局が法医学講座に置かれました。飴野先生は長年、この会の幹事を務められ、毎年の研修会などの運営に大きく貢献されま

した。また研究室には海上保安部からの研修生を受け入れていますが、彼ら研修生に対しても熱心に指導をしていただきました。これらのご功績に対し、平成14年11月には香川県警察本部長感謝状、平成22年5月には香川県知事表彰（法医功劳）、平成24年10月には高松海上保安部長感謝状、平成26年2月に警察協力章、平成26年3月に第六管区海上保安本部長感謝状を受けられました。

飴野先生は、だれにでも気さくに話しかけられ、研究室前の廊下や学生食堂などでも学生さんによく声をかけていました。また、学生さんからのいろんな相談に親身になって対応されていました。長い学生生活においては皆それぞれに様々な悩みや問題を抱えており、相談してスッキリして帰って行く学生さんを見たことは一度や二度ではありません。また研究者としても、学内外からの分析依頼や研究の相談など、様々な依頼に気軽に応じておられました。

私事になりますが、大学院に入学以降、文字通り手取り足取りで研究指導を受けました。ガスクロマトグラフィーの操作やデータの解析、統計処理など、山本五十六の言葉「やってみせ、言って聞かせて……」そのままの指導でした。生まれて初めて海外に出たオーストラリア・ゴールドコーストでの国際アルコール医学生物学会議も、飴野先生のカバン持ちで参加させていただきましたが、アカデミアにおける自分の立ち位置を実感できた良い機会となりました。それ以降、海外の国際学会にご一緒することはありませんでしたが、敷居が高いと思わず国際学会に参加できるのは、あのときの経験のおかげだと思います。その後の留学や異動に際しても、若干躊躇していた小生の背中を何度も押していただきました。また、再び香川大学で仕事をする機会を得てからも、少人数での教室運営を支えていただきました。現在のスタイルで小生が法医学の領域で仕事を続けられているのも、飴野先生のご指導のおかげと感謝しております。謹んで飴野先生のご冥福をお祈り申し上げます。合掌



飴野 清 先生



中根秀之君との対話

浦和医師会 医療法人 彩 理事長
森口 正人 (昭和63年卒・3期生)



グラバー園から望んだ稲佐山と長崎湾(2018.6.3)

を行っている」と、まるで担当患者の病状説明の様に淡々と話す電話越しの彼の言葉が穏やかすぎて受け止めきれず、すぐに長崎で会う約束をしました。

学生時代のいろいろな思い出、卒業してからの交流、彼のとなりや業績などを、まとまりよく紹介することが追悼文として正しいのかもしれませんが、今の私にはできません。心の距離感が近すぎるせいかもしれません。この追悼文では、2018年5月から10月まで彼とやりとりしたemailの一部を紹介させていただき、彼の深い優しさや穏やかさ、医師としての秀でた平常心を感じていただけたらと思います。そして何よりも同世代を失う悲しみに共感いただけたら幸いです。

2018.5.28

お疲れ様です。6/3のランチの予定を考えています。①長崎駅周辺で②自宅でその他、ご希望があればお聞きします。お会いできるのを楽しみにしています。よろしくお願いします。 中根

■■■■■■■■■■

いろいろかえって気を使って頂いたようで恐縮です。ご自宅にお伺いしては、ご家族にご迷惑ではありませんか？ご家族のご負担にならないような形でお願いします。お会いできることを楽しみにしています。

森口

■■■■■■■■■■

遠路はるばる来ていただくことに感謝します。では、長崎駅隣にあるホテルのロビーで待ち合わせをしましょう。時間は、12時ごろで良いですか。もう少し早くても結構ですよ。和食と中華はどちらが良いですか？ご希望に合わせますので、教えてください。体調は、抗がん剤治療後の4-6日はちょっと身体がきつくなりますが、今は大丈夫です。職場にも半日ですが出ています。いろいろと気遣い、ありがとうございます。 中根

■■■■■■■■■■

了解しました。会えるのを楽しみにしています。

森口

■■■■■■■■■■

2018.6.3

今日はありがとう。もっともっと話したかったことがあったはずなのに。懐かしいこと、思い出したこと、いいこともよくないことも、でも意外に言葉に出来ないものですね。ホテルのロビーで、奥様の少し辛そう

私たち3期生が卒業30年を迎えた2018年9月に、初めての同窓会が高松で開催されました。学年理事の横井 徹君から同窓会開催の話聞いたのは同年の4月でしたが、私はこの頃になって中根秀之君が病気療養中だということを知りました。中根君がFacebookに「同窓会に参加したいが体調次第」という様なことを書いていたのを見て、とても気になりすぐに彼に連絡をしました。「少し前から進行期肺がんの化学療法

な顔を見て今日私がここにきて良かったのかなと思ったのです、最初ね。君は本当にちゃんとしていて凄いなあと思いました。奥様への心遣いもお嬢様への愛情も。仕事への情熱も。兄弟やご両親への心遣いも。そして医学者の横顔も眩しかったです。あのあとグラバー園と大浦天主堂に行ってきました。とても素晴らしかった。200年信仰を守った村のこと。幕末のスコットランド人と幕末の志士の邂逅。……また必ず会おうね。 森口

■■■■■■■■■■

2018.6.4

忙しい中、はるばる長崎まで来てくれて、どうもありがとう。おかげさまで楽しい時間を過ごすことができました。昔のことから最近のことまでいろいろと話すことができ、本当に良かったと思います。ICD-11βの精神科部分だけなんですけど送ります。どうも10.1の Bodily distress disorder 身体的苦痛症に統一されるのかな。痛みについての診断は、……(中略)。無事、グラバー園には無事行けたようですね。今度はご家族で長崎にいらしてください。歓迎しますよ。 中根

■■■■■■■■■■

2018.8.31

その後いかがお過ごしですか？まもなく同窓会ですね。ちょうど9/6が化学療法の予定で、参っている時期になるので欠席することになっています。みなさんに会えないのは、残念ですが仕方ないでしょう。楽しい会になるといいですね。先週は、家族で湯布院へ出かけました。湯布院は、以前に比べて随分開けた感じで、海外からの旅行者も多く、にぎやかでした。い

い旅館も多く、食事もおいしいのでお勧めです。夏はどこかに出かけましたか？まだ暑い日が続きます。どうぞご自愛ください。 中根

メールありがとうございます。先日お訪ねしてからすっかりご無沙汰をしていて申し訳ありません。同窓会は残念ですがまたの機会にお会いしましょう。くれぐれもお体にお気をつけ下さい。昔まだ子供ができる前に妻と湯布院を旅行したことを思い出しました。その時は九州自動車道で長崎の方まで足を伸ばした記憶があります。九州には素敵なお店がいっぱいありますね。またゆっくり旅行したいです。 森口

私自身のBlogから (2018.9.9)

今日9月9日に30年目にして初めての同期生の同窓会が高松であり、参加してきました。卒後すぐに母校を離れた私にとって、殆どの人とは30年ぶりの再会で、最初は誰かわからない人が多かったのです。ただ宴も進んで会の終わりに近づくと名前や当時の姿のままに記憶が戻ってくるのが不思議でした。30年経つと亡くなった同窓もいれば難病と闘っている友人もいます。近況を聞くことは懐かしさと悲しさの入り混じったなんとも言えない感覚でした。一次会がおわり、そこで多くの人が去り、二次会でも時間を追うごとに一人去り、二人去り。人生の舞台の退場もおそらくこのようなことなのかと思ひながら、私自身も帰りの飛行機の時間に合わせて途中退席させて頂きました。握手という挨拶のありがたさ。「またいつか」という言葉のありがたさ。後に残る友人の場が雨の夕刻に、なお湿りを増す気配も感じながら……

2018.10.12

猛暑と台風のシーズンが過ぎてやっと過ごしやすくなってきました。

今が辛い時期にあたってなければいいのですが。

同窓会は懐かしさ半分恥ずかしさ半分。

私のことなども覚えていてくれて有り難いと感謝しつつ、同時に微妙な居心地の悪さも感じながらの数時間でした。横井君は本当に面倒見がよく、せっせと動いていました。

これから気候が良くなって美味しいものをたくさん食べられるといいですね。

それではまた。 森口

同窓会の写真は、懐かしく眺めておりました。皆楽しそうで何よりでした。私は、次の抗がん剤治療のため1-2週間の予定で入院しています。来週からTS-1を使う予定です。さすがに随分針を刺されてきたので、今回内服なのでちょっと気が楽です。入院前には、久しぶりにおいしいお寿司を食べました。このところ急に涼しくなってきたような感じですね。風邪などひかぬようどうぞご自愛ください。まずはインフルエンザ予防接種でしょうか。 中根



改修工事中の大浦天主堂(2018.6.3)

結局私は約束を守れませんでした。その後彼と会うことはなく長崎で家族旅行の案内を頼むことはできませんでした。2018年のあのよく晴れた6月に、あの稲佐山をレストランの窓越しに彼と眺めながら中華料理を食べたことが最後の思い出になりました。今年の3月3日横井君からemailで中根君の悲報に接した直後には涙が押し寄せてきて狼狽しましたが、その後数ヶ月が経ち少し落ち着いてみると、これまでと同様、あるいはそれ以上に彼と静かに対話ができることに気づきました。もちろん私自身の中の「彼」ではありますが。中根君はそこでも生前同様、人の苦悩を受け止める類稀なる聞き上手です。私は学生時代には自分自身の苦痛を、医者になってからは患者の心の苦悩を持って余した時などに何度か彼に相談してきました。そして彼はその度にいつも穏やかで、余計なことは何も言わないパーフェクトなセラピストだったと確信しています。これからも私は事あるごとにきっと私の中の中根君に頼り続けるでしょう。

この追悼文の執筆をお受けしたことで、今まですっかり忘れてしまっていた中根君との大切な記憶のいくつかを思い出すことができました。80年代の私たちの風景がいつとき色鮮やかに戻ったことは大変な喜びでした。同窓会報への執筆の機会を与えていただいた讃樹會広報局の方々に深く感謝いたします。また故人のご冥福をお祈りするとともに、ご家族の皆様方の心の平安を心よりお祈り申し上げます。





教室便り

令和2年7月入稿

神経機能形態学

スタッフは、三木崇範（教授）、鈴木辰吾（准教授）、太田健一（助教）の3名です。マクロ解剖学を教育し、神経科学を研究しています。いわゆる「I解」です。同窓の先生方には、鳥田教授、竹内教授のお名前が懐かしいのではないのでしょうか。「変わらない人体構造と進歩する解剖学」という一瞬矛盾するような課題に取り組んでいます。学生教育では、形の意味について思いを巡らせ、局所ではなく全体を俯瞰する眼で、解剖学を学んで貰うことを宗としています。

近年、マクロ解剖学に興味を持つ学生が一定数いることに気づきました。そのような学生には、どんどん解剖の機会を供し、その経験から変わらない人体の構造の中にあるものを基として、頭の中で整理していく過程で、問題解決能力を身に付けて貰いたいと願っています。一方、研究に興味のある学生も想像以上に多いことにも気づきました。入学後早い時期に、研究室を訪ねてきて実際に手を動かして研究する学生がいます。彼らの知的好奇心には感服するばかりです。このような学生が多くいる香川大学医学部の将来は明るいものと確信しています。（三木 記）

組織細胞生物学

組織細胞生物学では、荒木教授、川合助教、江上（講師）の教員3名、解剖技術職員1名、事務補助員1名の5名体制で教育と研究に取り組んでいます。教育では、医学科の「解剖学Ⅱ（骨学、組織学）」、臨床心理学科の「解剖学入門」、全学共通科目の「文系学生のための解剖学」を担当しています。研究面では、蛍光タンパク質を用いたバイオイメージング技術やオプトジェネティクス（光遺伝学）によるタンパク質の機能制御技術を駆使し、エンドサイトーシスの分子メカニズムの解明を行っています。エンドサイトーシス経路の中でも、特に、液相性の取り込み様式であるmacropinocytosisや食作用（phagocytosis）に焦点を当てて研究を進めています。当教室は少人数のラボですが、研究者各々の自由な発想に基づき、共同研究者と精力的に研究に取り組んでいます。また、学部学生も出入りし、日々、研究や学問に打ち込んでおります。アットホームな雰囲気の研究室ですので、卒業生の皆さんも気軽にいらして下さい。（江上 記）

分子神経生物学

2013年8月に山本が着任し、名称が脳神経生物学から分子神経生物学に変わって7年目を迎えています。現在ス

タッフ2名が、2名の大学院生と外国人研究者および徳島文理大からの卒研究生とともに、医局の先生方との共同研究を進めながら、教育・研究に取り組んでいます。

当研究室では自閉スペクトラム症・統合失調症などの精神神経疾患や、アルツハイマー病などの神経変性疾患の分子病態の解明を主目的に、我々自身が世界に先駆けて見出し、その機能を明らかにしてきた因子群の解析を中心に、研究を進めております。昨年度は、シナプス形成抑制因子の欠失による統合失調症様の表現型とその機序の解析により、大学院生が学位を取得しました。また、高速軸索輸送において顕著な特質を有する因子の解析から、これが複数の神経変性疾患の発症に関与していることを見出し、その結果の一部を発表しております。

小さな研究室ですが、オリジナリティーに立脚したアイデアを抛り所に、基礎・臨床の先生方との共同研究も発展させつつ、教育・研究を進めています。（山本 記）

自律機能生理学

自律機能生理学では、昨年10月に新たに1名の研究員が加わり、教授1名、准教授1名、助教2名、事務補佐員1名と合わせて、6名体制で生理学の研究教育に取り組んでいます。昨年度から研究活動に参画した学生も引き続き活動を続けています。

教室では、生理学の根幹をなす課題をテーマにし、教科書を書き換える研究成果をあげることを目標にしつつ、得られた成果の臨床応用も視野に入れた“トランスレーショナル生理学”を進めています。現在の大きな研究テーマは、血液凝固系の新たな生理作用の研究、肺高血圧症の分子病態解明と新たな治療法の開発、ミトコンドリア蛋白質などの構造生物学です。詳しくは教室ホームページをご覧ください。今年毎月ごとに季節の写真をトップページに掲載しています。

医学教育においては生理学Ⅱ（医学科2年次）と生理・薬理実習（医学科3年次）が主担当科目です。昨年度から過去の試験問題を公開するようにし、3回の試験全てを選択式問題に変更しました。選択式であっても工夫次第で知識のみならず思考を問うことができることを実感しています。さらに、早期医学実習Ⅰ・Ⅱ、課題実習、医学実習Ⅱにおける研究室配属で学生の科学的素養の育成に励んでいます。実習最終日には、実習内容を発表させ、その後、実験方法の原理や得られた結果の論理的解釈についてじっくりと諮問し、医療プロフェッショナルとして必須の科学的態度の基本を叩き込んでいます。学生実習においては、発表会後の情報交換会で学生と歓談することが何よりの楽しみですが、今年は新型コロナウイルス感染症の流行によ

りこの楽しみがなくなり、また、対面での講義も制限され、学生との直の交流に制限があることを残念に思っています。

(平野 記)

薬理学

同窓の皆さまにおかれましては、平素より大変お世話になっております。薬理学教室の2020年度・活動状況を簡単に説明申し上げます。

昨年までは、西山 成(教授)、中野大介(准教授)、ラフマン・アサダ(助教)、欠員1名の教員体制でしたが、4月より欠員が補充されました。新メンバーの北田研人(助教)は、当教室で博士号を取得後、東大、米国、シンガポールに約5年間留学し、筆頭著者としてNature Medicine誌やJournal of Clinical Investigation誌などに論文発表するまで成長し、この度、香川に戻ってきてくれました。今後は、香川大学を先導する研究者になってくれるものと期待しております。教員以外としては、日本人研究員2名、外国人研究員3名、大学院生(日本人1名、中国人3名、バングラデシュ人1名)、実験補佐員3名、医学部の学生4名に加え、米国カリフォルニア大学とタイ・タマサート大学からの留学生数名、秘書3名のメンバーで活動を続けております(現在、コロナのため、来日延期中)。

研究活動につきましては、基盤Bを始めとする六つの科研費、JSPS、AMED、JAXAなどからの外部資金を受け、社会貢献につながる世界最先端研究を目指して、皆で力を合わせて進めております。教育活動としては、本年度は全てを遠隔で実施するシステムを構築し、その一部は完全英語で実施しております。また、当教室は社会活動も重要視していますが、新型コロナウイルスに対しては、いち早く学生へのマスクの無償提供(400枚)、募金活動、感染者ホテル隔離活動のサポートなどを実施してまいりました。また、国内外の学会・学術活動につきましても、引き続き教員一体となり、進めております。

以上、薬理学教室は、少数精鋭で懸命に活動を続けております。具体的な活動内容につきましては、是非、ホームページ(<http://www.kms.ac.jp/%7Eyakuri/>)をご覧ください。できれば幸いです。常に社会への貢献を念頭に置き、日々精進して研究・教育・社会活動を進めて参る所存ですので、引き続き何卒宜しくお願い申し上げます。(西山 記)

生化学

生化学研究室では2期目の医学部長を併任している上田夏生教授を始め、大西平准教授、宇山徹助教(学内講師)の計3名の教員が中心になって教育と研究を実施しています。研究室は国際色豊かであり、2名の外国人研究者(バングラデシュ出身)と4名の大学院生(日本人1名、バングラデシュ出身2名および中国出身1名)が在籍しています。また最近、これまでの事務員の退職に伴い新しい事務員が加わりました。外国人の比率が高まるにつれて英語の必要性が高まり、研究セミナー等もすべて英語で行っています。学部学生に対する講義の一部も、外国人によって英語で行うなどの新しい試みを始め、生化学分野のテクニカルタームを日本語・英語の両方で学べるよう工夫しています。

年初から始まったコロナ禍の影響からも徐々に解放され、教育や研究活動も正常に戻りつつあります。研究面では、長年取り組んできた生理活性脂質N-アシルエタノールアミンの代謝機構の全貌がほぼ解明されたこともあり、代謝経路に含まれる各酵素の遺伝子を欠損させたノックアウトマウスの機能解析を進めています。病態時における興味深い知見が観察されつつあり、これらの酵素の新しい生理機能の発見に挑戦しています。

また、令和2年11月14日(土)に公益社団法人日本ビタミン学会が主催し、香川大学が後援する市民公開講座を、上田教授が実行委員長としてかがわ国際会議場で開催することとなりました。「人生100年時代のビタミン学」をテーマに3名の著名なビタミン学の専門家の講演を予定しています。参加費は無料ですので、ご興味のある方は是非ご参加下さいますようお願い申し上げます。(宇山 記)

医用化学

医用化学教室では、和田教授、栗原助教に加えて、総合生命科学研究センターの中北慎一准教授の協力を得て、医用化学Iおよび医用化学II、自然科学実習(化学)(令和2年度後期から医用化学Iに統合)、大学院科目の教育を進めています。ご存知のように、今年の春はCovid-19流行のために対面での講義が困難となりましたが、なんとか例年通りの教育内容を維持するため、教員全員が努力と工夫を重ねて対応しています。

研究面について、和田は引き続き医薬品原料合成に有効な新しい触媒の開発と、分光イメージング法の活用を中心として研究を進めており、栗原助教はドラッグデリバリーシステムや分子プローブの開発を進めています。2019年8月から11月まで、ブルネイダルサラーム大学との交流による留学生1名を受け入れ、栗原助教が中心となって研究指導を行いました。また、この春には修士課程学生1名が無事修了し、現在は少人数ながら国際色豊かなメンバーで研究に励んでいます。

一方、和田は引き続き国際交流委員会委員長を仰せつかっておりますが、今年の2月以降、学生の海外留学や留学生の受け入れが相次いで中止となる等、Covid-19の影響を顕著に受けています。まだ先が見通せませんが、皆が力を合わせ、心をつなげてこの難局を乗り切って行きたいと考えております。(和田 記)

分子細胞機能学

分子細胞機能学では、中村隆範教授、小川崇助教、野中康宏助教の3名の教員と、大学院生1名、事務職員1名の計5名が在籍しております。所属員数は少ないですが和やかな雰囲気の下、日々の教育・研究活動に従事しております。教育面では主として内分泌学講義・実習を担当しています。加えて昨年度は全学共通科目「からだの仕組みと機能の調節」も担当しました。しかし今年度は感染症対策のため、内分泌学講義をオンライン中心で行っており、さらに実習はレポート提出を課すのみとなりました。如何にして教育効果や学生とのコミュニケーションを維持するか、悩ましい日々が続いております。

研究内容としては細胞生理活性物質の探索と解析、そして免疫調節タンパク質の一種であるガレクチンの機能・構造解析を主として行っております。私自身はガレクチン等の蛋白質の立体構造解析を中心に研究を進めています。昨年度はつくば市にある高エネルギー加速器研究機構の大型放射光施設を利用し、良好なデータを得ることに成功しました。これからも面白い研究を志向し、成果を積極的に発信できるよう精進していく所存です。今後も引き続きどうぞよろしくお願いたします。(野中 記)

腫瘍病理学

腫瘍病理学教室は、松田陽子教授が着任し2年目を迎えています。新体制では、『研究』、『診断』、『教育』の3本柱について、すでに大きな改善が見られています。

研究面では、肺癌研究、老化に関する研究に加え、肺発癌、毒性病理学の研究を継続しています。昨年度はブルネイの留学生、Nisaさんを迎え、一緒に研究に取り組みました。また、葉娟娟さんが研究生として加わり、研究推進の大きな力となっています。成澤助教は科研費を取得し、横平准教授は食品安全委員会に尽力しています。松田教授は多数のAMED研究費を獲得し、今後の研究活動の一層の飛躍が期待されます。

病理診断業務では、複数の近隣中核病院の診断、本学附属病院や他病院の病理解剖業務を担当しており、主治医の先生とのコミュニケーションおよび教室内での症例検討会を大切にしながら、丁寧に細やかな診断を心がけています。

教育面では、各学年の学生研究員を多数迎え、病理診断や研究の指導を行っています。医学科6年のパラマ君は日本病理学会中四国支部集会(スライドカンファレンス)で症例発表を行いました。学生実習では、バーチャルスライドによる実習を取り入れ、質の向上を図りました。引き続き、大学院生、研究生を募集しています。ご興味のある方は是非当教室にご連絡ください。(横平 記)

炎症病理学

炎症病理学教室は、現在、千葉陽一講師と村上龍太助教と上野との3人で教室運営を行っています。さらに、阪本晴彦先生と松本晃一先生が研究と教育と診療で助けてくださっています。今年からは、大学院生の若松君も加わりました。一方、他の教室から若い先生を受け入れ、麻酔学の植村先生と築瀬先生、小児外科学の藤井先生と形見先生、脳神経内科の野中先生、精神神経医学の木戸先生、整形外科の根ヶ山先生と吉竹先生、小児科のインモン先生と中村信嗣先生が研究に従事しています。研究テーマに関しては、個々の主体性を重んじながらも、認知症や様々な脳障害の病態解明とその予防と治療に関する研究を重点課題としています。最近、ブドウ糖輸送体のSGLT2の阻害薬が糖尿病治療薬として使われだしていますが、そのSGLT2が脳内脈絡叢上皮細胞に発現していることを見出し、報告いたしました。糖化による脳障害やある種の認知症の治療に応用できるのではないかと考えています。讃岐の丘から世界に向けて研究成果を発信し続けるよう、教室員一同努力していきます。(上野 記)

免疫学

免疫学講座がスタートして9年度目となりました。教授1名、助教2名、技能補佐員1名、事務補佐員1名のスタッフで、研究・教育を進めています。歯科口腔外科の宮崎先生は、これまでの研究成果を論文に発表し、令和2年6月に学位を取得し、博士課程を修了しました。彼は本講座で初めての学位取得者です。また、大学院生の高尾先生は、希少糖を用いる研究を進めています。令和元年度の課題実習では医学科3年生1名、早期医学実習Ⅱでは2年生1名、早期医学実習Ⅰでは1年生2名が本講座を選択しました。学生に免疫学を講義するだけでなく、研究を魅力的にアピールするよう努力を続けております。研究の特色としては、①樹状細胞の活性化メカニズムの解明、②希少糖による免疫機能の調節、③遺伝子改変マウスの作成による疾患モデルシステムの作成が挙げられます。香川大学発の新しい研究に向けて、成果を積み上げていく所存です。今後ともよろしくお願いたします。(星野 記)

国際医動物学

国際医動物学教室は昨年度末に長年貢献した喜岡が退職し、准教授、助教、派遣会社からの事務補佐員が各1名で、希少糖によるマラリア撲滅の可能性を評価しております。

昨年度、3年生3名が課題実習を、2年生2名と1年生1名が早期医学実習を修了されました。本年度は、2年生が1名、早期医学実習に参加されています。しかしながら、新型コロナウイルスの影響で実習の開始が遅れ、また、接触を減らすために実習内容はオンラインでの英語論文講読のみとしております。昨年度課題実習に参加された3年生のうち1名が研究を継続することを希望されていますが、残念ながら実施できていないのが現状です。

大学が主体となって週2回の定期的なPCR検査を行う、陽性となった学生へのサポート体勢を確立するなど、安心して実習ができる状況になるのを期待しております。回復後も後遺症のような症状が報告されていますので、皆様も、くれぐれも感染にはお気をつけ下さい。(田中 記)

分子微生物学

分子微生物学教室は教員3名、事務補佐員1名、技能補佐員2名で微生物学の教育研究を行っています。大学院生は3名(1名はバングラデシュからの留学生)所属しています。教育面では3年生の微生物学の講義および実習、4年生の統合講義「感染症ユニット」を担当しています。臨床心理学科2年生の「微生物学・医動物学概説」の講義も担当しています。将来、感染症診療に当たる際に必要となる微生物の基礎知識や臨床的な重要項目を着実に習得できるよう教材の改良などに努めています。研究面では腸内フローラの破綻と健康維持に関する研究を行っています。次世代シーケンズによる腸内フローラの解析が容易になったことで、腸内フローラと疾病との関連についての研究が活発に行われています。当教室でも新しい解析技術を取り入れ、腸内フローラ研究をさらに推進し、社会に還元できるような研究成果を発信していきたいと考えています。(桑原 記)

衛生学

衛生学教室は准教授・宮武と助教・鈴木の二人で構成しています。今年度は新たに大学院生一人が加わり、4名の大学院生と共に一緒に楽しく活動しています。宮武先生の温かな指導の下、昨年度は24本の論文が国内外の学術誌に掲載されました。

教室の研究は、メタボ、2型糖尿病、慢性腎臓病の生活習慣改善支援、熱中症に加え、行政と協同で子どものネット依存対策・ネット利用適正化推進事業や子育て支援事業を行っています。また、小児科とミャンマーにおける国際協力事業、国際教育部と医療従事者向けの英語学習プログラムの作成に関する研究も行っています。衛生学の枠を超えて、他科や多職種と協力することで研究や社会貢献の幅を広げています。

さらに、地域、職域、学校を対象に、生活習慣改善支援のための健康教室、教職員や保護者向けの子育てセミナーを県内外各地で実施しています。昨年度は、あわせて85回4,200名余の方に参加していただきました。

今後も引き続き、教育、研究、社会貢献等を積極的に進めていきたいと思っています。(鈴木 記)

公衆衛生学

4月より准教授としてNgatu R Nlandu (ガツ ランドゥ)先生が加わりました。コンゴ民主共和国の出身で国際保健、生活習慣病が専門です。医学部における教育、研究のみならず、より広い国際協力活動の推進が期待されます。久々に教員3名が揃いましたが、それぞれ、高齢者、外国人、女性と、現代日本の多様性を代表していると言えます。大学院生は7名(2名は麻醉科より出向)で、こちらも老若男女、留学生と、様々なバックグラウンドを持つ者が研鑽を積んでいます。

教育では、4年前よりe-learningを導入しており、今年のコロナ禍に対してスムーズに対応できました。また、香川県と共同で、行政医師、社会医学系医師確保策として、医師、医学生に対する懇談会、香川県庁での実務演習、社会医学セミナーへの参加助成等を行っています。公衆衛生医師を志す人が一人でも増えるよう頑張っています。学術活動としては、香川県小児生活習慣病、香川県民健康栄養調査をはじめとする地元密着型の研究、ウイルス性肝炎等各種疾病の医療経済評価、終末期における死の質の評価、高齢者の体力推移と維持、緩和ケアにおける鍼灸治療の効果に関する研究などに取り組んでいます。(平尾 記)

法医学

2019年度の学術活動は、国内では1月の国際分子法医病理シンポジウム(和歌山)で木下が、6月の第103次日本法医学会学術全国集会(仙台)で田中、ジャーナル、伊藤が、9月の第2回日本法医病理学会(鹿児島)では木下が、法医学会学術中四国地方集会(米子)ではジャーナル、木下が、12月の中毒学会中四国地方会(岡山)では田中がそれぞれ発表しました。海外では、5月のトルコおよび6月の韓国の学会で木下が、12月のインド太平洋法医学会でジャーナ

ルが発表しました。また、12月には共同研究のため、ティラナ大学法医学研究所(アルバニア)を訪問しました。

教育に関しては、8月末~10月半ばの系統講義以外にも、警察学校での講義や日本医師会の検案研修会の実施に協力しています。警察大学の法医専門研究科から、春期と秋期に各3週間、合計7名の研修生を受け入れました。人事面では、2020年4月より永田健さんが大学院生として加わりました。剖検実務・検査に関しては、教室員全員で協力して行っています。今後とも、讃樹會の先生方には一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。(木下 記)

医学教育学

医学教育学講座の近況をご報告申し上げます。

医学教育学講座は2018年11月に受診した医学教育分野別評価の結果を受け、新たな教育改革に取り組んでいます。現在取り組んでいる内容の一部をご紹介しますと、卒業時アウトカムの下位領域コンピテンシーの設定、1、2年次の基礎科目における過密スケジュール解消のためのカリキュラム改正、学生の研究マインドの涵養と臨床実習におけるEBM活用の推進、低学年から患者と接する教育プログラムの開発、教育関連病院との卒前・卒後教育におけるさらなる連携の推進、教員の研修や教育能力開発のためのFD・ワークショップの開催、臨床実習における十分な患者数の確保と指導体制の強化、学生の電子カルテシステムの活用促進など、一朝一夕に解決しない難しい課題もありますが、改革のためのロードマップに沿って、時間をかけて着実に成果を上げていきたいと考えております。

2020年はコロナウイルス感染症により、大学においては長期間に亘って対面授業が出来ず、多くの講義が遠隔授業となりました。幸いにも医学部においては「講義自動収録システム」が各教室に備え付けられていたため、学生は自宅から自動収録された講義を見ることが出来、大きな混乱は見られませんでした。また、岡田宏基教授が以前に導入された「WebClass」というe-ポートフォリオシステムが力を発揮し、自宅にいる学生への課題提示、レポートの提出・評価、採点等が問題なく進んだことは特筆すべき事で、今回の様な「社会的な緊急事態においても教育を継続できるシステム」の構築ということも医学教育学講座の重要な役割だと感じた次第です。

以上、今後とも讃樹會の皆様の一層のご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。(坂東 記)

血液・免疫・呼吸器内科学

讃樹會のみなさまにおかれましては、この災禍にあつてご苦労も多いかと拝察申し上げます。血液・免疫・呼吸器内科学教室の近況をご報告申し上げます。

門脇則光教授が講座を主宰され6年目となりました。引き続き学内外の数多くの重要な業務を精力的にこなされています。教室ならびに診療科の運営はもちろんですが、感染制御部長としてコロナ対策を含め、附属病院の要職を担っておられます。本年度の教室新入局は4名で、本当に頼もしく嬉しい限りです。すべからく人事異動が発生し、呼吸器内科診療科長を全力で務められた石井知也講師が4

月より滝宮総合病院内科部長に赴任されるなど関連病院人事が活性化して参りました。研究は教授のライフワークである癌免疫療法が3人の大学院生を中心に進んでいます。外来診療は、血液内科5名、呼吸器内科4名、膠原病・リウマチ内科6名で担当しております。県内外の讃樹會会員の皆様のご支援により、3診療科で4,200名（内紹介患者：500名）、入院患者519名を診療させて頂いております。

さて、来る2020年8月22日(土)～23日(日)に『第15回 血液内科研修医サマーセミナー』をホテルクレメント高松にて門脇教授が開催いたします。血液内科を目指す学生・研修医は参加費・交通費・宿泊費が無料です。是非ご参加ください。また2021年3月13日(土)には『第60回日本血液学会中国四国地方会』をサンポート高松・香川国際会議場にて開催いたします。良い学会となるよう教室員一同全力で準備を進めております。ご興味がおありの先生は是非お運びくださいますようお願い申し上げます。

以上近況報告をさせて頂きました。讃樹會の一層のご支援を賜りますよう教室員一同心よりお願い申し上げます。コロナ疲れがあると存じますが、くれぐれもご自愛ください。(土橋 記)

循環器・腎臓・脳卒中内科学

南野哲男教授が講座を主宰され、5年目に入りました。教室・診療科の運営に加えて副病院長・臨床教育研修支援部部長と病院の要職を務められています。大学勤務の医局員は現在27名ですが、今年度は5名の新しい先生方が教室に加入されました（循環器グループ 溝渕雅彦先生・溝渕朝子先生・守家聖二先生・外山和季先生、腎臓グループ 眞鍋雅人先生）。心臓グループ、腎臓グループ、抗加齢血管（脳卒中）グループが緊密な連携を取りながら全人的な医療を提供しています。また、循環器ホットラインや救命救急センターとの連携にて地域医療を支えるとともに、重症心不全患者や腎移植患者に対する高度先進医療を実施し、地域の皆様に高度で最新の医療を提供いたします。新たに重症心不全患者に対する左室補助人工心臓（LVAD）の管理施設にも認定され、さらに特定機能病院としての役割を担っていく所存です。

今後も、「地域と歩み、ひとを育む」をポリシーとし、香川県の地域医療を支える人材の育成や循環器系救急医療ならびに安心・安全の標準療法の実践を目標に教室員が丸となって取り組む所存ですので、今後とも讃樹會会員の皆様におかれましては、一層のご支援を賜りますよう、よろしくようお願い申し上げます。(祖父江 記)

皮膚科学

讃樹會の皆様に皮膚科学講座の近況をご報告申し上げます。

当科は2020年4月に大日輝記教授が就任し、香川県内の皮膚科医療の再構築を目標とする新体制を発足いたしました。まずは地域や院内において当科の存在感を示していきますように医局員一同、日々努力する所存でございます。地域においては県内外の病院や開業医の先生方と当科の間にネットワークを形成することで円滑な診療を行えること

を目指し、院内においては他科からのコンサルト等には誠実に対応し先生方から信頼される皮膚科となることを目指しております。

皮膚科にとって病理診断は不可欠なものであることから、医局員は病理検査による正しい組織診断を通して正しい皮膚科診療をすることを心掛けております。病理検討会には研修医や学生も参加し、活発な議論を通して診断や治療方針の決定をしています。また診療の合間には病理勉強会を行い絶えず研鑽を積んでいます。

まだ始まったばかりの医局ですので何かと至らぬ点があるかとは存じますが、どうか温かく見守っていただき、ご指導ご鞭撻いただきますと幸いです。今後は大日教授の専門である脱毛症の専門外来を予定しております。

医師として香川県の地域医療に貢献することは我々の本望でございます。何かしら先生方のお役に立てることがございましたら、ご紹介等よろしくようお願い申し上げます。

(和泉 記)

精神神経医学

当講座に中村祐教授が就任して16年目を迎えました。中村教授就任以降、香川県内の精神科医療の連携を図るため、香心会が創設されました。また、香川県との連携も進められ、地域医療精神医学講座が開設されました。この間に医局員は増え、同時に精神保健指定医も増えました。香川県内の関連病院にも人材を派遣し、香川県の地域医療を支える一助となっております。2018年度から新専門医制度が始まりましたが、本年度も4名の専攻医を迎えることができました。

現在、認知症から児童・思春期（摂食障害を含む、2014年4月1日より「子どもと家族・こころの診療部」を引き継いで運営）、睡眠障害、緩和ケアなど、全ての精神科領域をカバーして診療を行っています。身体疾患を合併する患者様については、身体科の先生方には大変お世話になっております。また逆の場合もあろうかと思ひます。今後も、香川県の地域医療の支えとなるよう、医局員一同努力する所存です。讃樹會の先生方にはより一層のご支援を賜りますようお願いいたします。(今井 記)

小児科学

日下教授就任7年目となる当講座は、「楽しくなければ小児科ではない」のスローガンのもと、「成熟した小児科医」を目指し、香川県の地域医療を支え、国際貢献のできるグローバルな視野を持った医師育成のため、臨床、教育、研究を行っています。

当大学における卒後臨床研修の小児科コースでは、初期研修期間に「小児科医として必要な夜間の救急外来初期対応ができるようになる」ことを目標に、夜間当直のトレーニングも積極的に行っています。今年は、初期研修1年目小児科コースは1名（矢野先生）、小児科専攻医1名（日下先生）に加え、自治医科大学出身の井上先生がNICU研修を開始され、皆和気藹々とやっています。

研究では、大学院生2名（中田先生：高知医療センター 新生児科、Yinmon Htun：ミャンマー留学生）が卒業され、

現在の15名の院生が継続して研究を行っています。また、日下隆教授、安田准教授（卒後臨床研修センター）を中心に、厚生労働省が国立国際医療研究センターを実施主体として委託している医療技術等国際展開推進事業「ミャンマーにおける核黄疸撲滅プロジェクト」で、経皮黄疸計を用いた経皮ビリルビン値のノモグラム作成及び論文文化を終え、昨年12月に11台の経皮黄疸計寄付式典が現地（Yangon children Hospital）で行われました。

新型コロナウイルス下で先行き不透明な状況ですが、香川県小児医療を支えていくため、医局員一丸となって精進してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願いたします。（中村 記）

小児外科学

当科は4名と少ないスタッフではありますが、香川県の小児医療の一翼を担うべく、「断らない」ことをモットーに日々診療にあたっています。

小児外科の扱う疾患は頭頸部、胸部（肺・縦郭）、腹部（消化器・肝胆膵・泌尿器）、体表と多岐にわたります。また、生まれただけの新生児から中学生、さらには成人期に移行した方もいます。小児でありながらも、予後の厳しい症例もありますが、子供たちだけでなくそのご家族の気持ちにも寄り添った医療を提供することを心がけています。

高松赤十字病院では久保先生が外来や手術に取り組まれています。

研究面では、精巣捻転モデルや、壊死性腸炎、短腸症候群などをテーマとして精力的に取り組んでいます。

2019年5月から小児外科ホットラインを開設しており、今まで以上にスムーズに小児外科疾患を受け入れ可能となり、より一層、地域医療の支えとなるよう精進していききたいと思います。（田中 記）

消化器外科学

当科は「患者さん中心の全人的医療の提供」を理念とし、手術を柱とした安全かつ高度な医療を提供しています。日本消化器外科学会の指定施設であることに加え、日本肝胆膵外科学会の高度技能専門医修練施設A（全国で約120施設、香川県で唯一）にも認定されており、高難度肝胆膵外科手術の安全性と長期成績は高く評価されています。中でも難治性の膵臓癌に対しては、術前化学放射線治療を加えることで成績は向上しており、世界に向けて情報発信を続けています。また様々な消化器疾患に対して、内視鏡を用いた低侵襲手術（腹腔鏡・胸腔鏡手術、ロボット手術）も積極的に取り入れています。移植医療としては、四国唯一の膵臓移植実施施設（全国18施設）に認定されており、1型糖尿病患者さんに対する膵臓移植を行っています（過去9例に施行）。毎年、素晴らしい新入局員（今年度は水田医師の1名）が加わり、教室は若い力で活気に満ちています。若手からベテランスタッフまで多数の手術を受け持ちながら、さらなる治療成績向上へ向けて日々精進しております。

研究面では、現在4名の大学院生を中心に、それぞれが膵臓癌や大腸癌、膵臓移植などの研究テーマを持ち、熱意をもって取り組んでいます。今後も患者さんのお力になれ

るようにスタッフ全員が誠意を持って診療を行ってまいります。今後ともご指導を何卒宜しく願いたします。

（浅野 記）

呼吸器・乳腺内分泌外科学

当教室は横見瀬裕保教授が就任して22年目を迎えました。4月から呼吸器外科へ佐藤医師が入局してくれました。今年度の体制は呼吸器外科11名、乳腺内分泌外科3名体制となります。昨年度に引き続き若手医師が入局してくれており、教室全体の雰囲気もますますよくなっています。

臨床においては、教室全体で年間手術症例は370例を超え、四国においてトップクラスを維持しております。昨年は喜ばしいことに呼吸器外科として一つの目標であった年間肺癌手術症例150例を超えることができました。これはひとえに皆様のご支援とご協力のおかげです。これを通過点としてますます精進していききたいと思います。また肺癌、縦隔腫瘍に対して「da Vinci®」を用いたロボット支援手術の導入を昨年からはじめております。放射線科、呼吸器内科、病理診断部といった様々な科と定期的に合同カンファレンスを行い、積極的に意見交換しております。

当教室には県内はもちろん、県外にも関連施設（高松市立みんなの病院、KKR高松病院、坂出市立病院、高知医療センター（高知県）、神鋼記念病院、明和病院（ともに兵庫県）等）が多数あり、20名を超える医局員がそれぞれの場所で活躍しております。

研究においては4名の大学院生を中心に肺癌の遺伝子解析とそれを基にした新たな治療法の開発、メディカルガスを用いた長期肺保存と肺移植、ICG蛍光カメラを用いた手術手技の開発、気管や肺の再生医療等を研究テーマとし、日々熱意をもって取り組んでいます。

当教室の合言葉は横見瀬教授就任時より一貫して、「art, heart, science」です。すなわちアート（卓越した技術）、ハート（患者さんの身になり）、サイエンス（科学的根拠）に基づいて、自分が最も愛する人に行う治療を全ての患者さんに行うことです。医局員全員がその言葉を胸に、最新で最適な治療を患者さんへ提供できるよう取り組んでまいります。今後とも御指導・御鞭撻のほど、何卒宜しく願いたします。（加藤 記）

整形外科

整形外科は山本哲司教授が就任後16年目を迎えました。昨年までの3年間は4人、6人、3人と複数の入局者を潤沢に確保できておりましたが、今年はゼロと当科は冬の時代に突入しています。主治医業務と関連病院の業務を埋めるために外に出ていた人員をかき集め、何とか分担しながら手術、病棟、検討会といった日々の業務をこなして行く予定でしたが、今年は新型コロナウイルスの影響で、大学病院の入院手術患者数が著しく制限する状態となっているばかりでなく、学会や講演会活動も自粛続きで、折角かき集めた人員が十分に手腕を発揮できない状況に陥っています。収束して早く以前の状態に戻って欲しいという思いは当然ありますが、多忙を極める整形外科医にとって、このようなゆとりの持てる期間は逆に貴重でもあります。各自

が今できることを着実にやっつけ、自分を見つめ直す時間として有効に活用し、これからの業務回復に向けて英気を養っている最中であります。

毎年力を入れてきた日本整形外科学会が開催する医局対抗の野球、サッカーの全国大会も、今年は学会自体がインターネット開催となったことで中止になってしまいました。当科の野球チームは5年連続で中四国予選を勝ち上がり、今年も本戦出場権を獲得してただけに大変残念です。今年も秋冬に開かれる予定の中四国予選を勝ち上がり、何とか来年も本戦出場を果たしたいと考えていますが、以前からお伝えしているとおり選手の高齢化、老朽化が加速しており、若い人材の確保が急務となっています。当科は野球、サッカー経験者のみならず今後の医局を支えてくれる人材を幅広く募集しております。

こんな時期ではありますが、整形外科は診療のみならず、若手育成や研究活動も含めた全体的なレベルアップを目指して日々研鑽を積んでおりますので、ご支援の程よろしくお願いいたします。(真柴 記)

形成外科学

2017年4月に永竿智久教授が就任して4年目を迎えます。臨床では教授の得意分野である漏斗胸に対する胸郭形成術が多く行われています。他県からの手術希望者が多く中四国だけでなく、九州や東海・関東からも外来に多くの患者様が受診にいられています。

研究においては工学解析・シミュレーションを用いた多くの報告をしています。ケロイドが発生する力学的メカニズム、顔面骨折はどのように生じるのか、顔面骨折の修復固定における効率的な固定方法などについて、シミュレーションを用いて解析し報告しています。

また、今年の4月には高橋宥貴先生、田中萌実先生が仲間に加わりました。頼もしく育ってくれそうな二人を加えて、現在は頭頸部再建・マイクロサージャリーを修行中の三柳友樹(医員)、子育てと仕事を両立させる松本絵里奈(医員)、唇顎口蓋裂や四肢の先天異常、がん切除後の再建を専門とする玉井求宜(助教)、母斑血管腫治療の中心となっている木暮鉄邦(助教)、漏斗胸・乳房再建を得意とする永竿智久(教授)で診療にあたっています。

引き続き若い先生が興味を持ち、入局してもらえるように医局の魅力を高めていきたいと考えています。今後とも形成外科教室を宜しくお願いいたします。(玉井 記)

泌尿器科学

2018年7月に香川大学出身かつ香川県出身の杉元幹史先生が教授に就任されて2年が経過いたしました。今年の当教室において一番嬉しいニュースかつ最大のニュースとして、4名の先生が入局したことが挙げられます。4人とも香川大学の卒業生です。香川大学で初期研修後入局した香川県出身の本田智子先生は坂出市立病院で後期研修を開始しました。香川大学で初期研修後入局した兵庫県出身の藤原健吾先生、岡山県出身で神戸大学にて初期研修後香川に戻ってきた松田伊織先生、広島出身で広島にて初期研修後、同じく香川に戻ってきた原田怜先生の3名は香川大学で後

期研修を開始しました。4名とも将来立派な泌尿器科医となり母校、香川県及び日本や世界の医療に貢献してくれると信じています。大学及び関連病院のスタッフも彼らに負けないよう、香川大学泌尿器科医局を選んで本当によかったと思ってもらえるよう日々努力を重ねたいと思います。引き続き杉元教授の強力なリーダーシップのもと患者さん中心のQOLを重視した、逃げない・寄り添う医療を目指して参ります。(常森 記)

脳神経外科学

脳神経外科教室は、2007年に田宮隆先生が3代目教授に就任してから13年目となります。2019年秋からは田宮教授が病院長を兼任されたため、現在は診療業務については、三宅啓介准教授を中心に教室員が一致団結して頑張っています。学術集会においては、令和3年2月に第44回日本脳神経外傷学会を主催する予定となっております。その頃までにコロナの影響が一日でも早く収束していることを願っています。

臨床においては、これまで治療困難であった巨大脳動脈瘤も、血管内治療に用いるデバイスの進歩により現在は治療可能になっており、脳腫瘍に対する治療も悪性腫瘍に対して電磁波を用いた新規治療を開始し、神経内視鏡も積極的に活用するなど、より充実した医療を提供できるよう努めております。そのため、ここ数年で順調に入院患者数および手術件数は増えてきております。研究分野でも、脳腫瘍、中枢神経PET、脳卒中、救急など各分野において大学院生7名で様々な研究活動を行っております。「患者さま中心の治療」を念頭にこれからも精進してまいりたいと思います。今後とも脳神経外科教室をよろしくお願いいたします。(島山 記)

眼科学

2018年9月に鈴間潔教授が着任され、もうすぐ2年が経とうとしています。

現在、眼科学教室は17名の医師と視能訓練士8名、外来クラーク3名で構成され、網膜・硝子体外来、黄斑外来、緑内障外来、眼循環外来、斜視・弱視外来、涙道外来の専門外来を中心として、診療・研究・教育を行っています。

今年は3名の入局があったのですが、2名が年度末まで新型コロナウイルス感染拡大地域で前期研修していたことで2週間の自宅待機期間をとるために出勤できず、いきなりコロナ禍の影響を受けました。そして感染拡大のピークを迎える頃と年度初めが重なったため、患者数、手術件数が減っており十分な研修が受けられない状況の中で後期研修がスタートしましたが、いつかこの経験が役に立つこともあろうと前向きに考えて、できるだけ良い研修ができるように工夫できればと考えています。

このコロナ禍の中、同窓会の先生方もご苦労されていることと思いますが、今後ともよろしく願い申し上げます。(山下 記)

耳鼻咽喉科学

2015年4月に星川教授が3代目教授に就任してから、5年が経過しました。若手・中堅医師の成長もあり、教室の体制が整いつつあります。

今年度は和家先生が2年間の初期臨床研修を終え、当教室の仲間となってくれました。もともとバドミントン部で、あらゆるスポーツの中でも相当過酷と言われるシングルス専門とする、ストイックな青年です。手術でも持ち前のストイックさを発揮し、糸結びなどの自己鍛錬に余念がありません。今後の成長が楽しみです。

当科では耳科（宮下、高橋、藤原）、鼻科（秋山、寒川）、音声・嚥下（印藤・福村）、頭頸部腫瘍（星川・岸野・森・大内）の各専門領域につき、担当医を中心に非常勤医師の協力も得ながら診療・研究を進めています。若手医師も病棟業務を中心に多種多様な耳鼻咽喉・頭頸部疾患の診療に当たっています。関係各位との連携が必要なことも多く、お世話になることも多々あるかと思えます。今後とも当科診療・研究につきご助力賜りますよう、どうかよろしくお願いたします。（岸野 記）

放射線医学

西山佳宏教授となり、今年度で13年目となりました。

本年3月末にCT装置1台とPET-CT装置1台の更新が行われました。CTはGE社の256列MDCTで当院では初めてデュアルエネルギーCTが導入されました。このデュアルエネルギーCTの機能を最大限に活かすべく、若い先生や技師さん達が頑張ってくれています。

若手から中堅の先生も順調に成長し、遠迫先生と藤本先生が昨年度「放射線科専門医」を無事取得されています。遠迫先生は4月より大学に戻ってきてIVRを中心に活躍されています。同様に昨年度2月には安賀先生が高松赤十字病院に赴任し、今年度4月に福田先生と岡田先生が四国こどもとおとなの医療センターに赴任しました。藤本先生は博士号を取得し、大学院を卒業しました。卒業後は前述のデュアルエネルギーCTのプロトコルの作成や画像検討など、臨床、研究方面共に頑張っております。また、今年度当科では、新規で科学研究費が基盤研究(C)三つ、若手研究二つが採択されました。

昨年9月大変残念なことに、初代教授 田邊 正忠 先生がご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。田邊先生に頂いた多くのご指導を、今後とも研究や教育に活かして参りたいと思えます。

これからも当科ではより一層、「患者さんに寄り添う放射線診断」及び「放射線診断へ様々なアプローチによる探求」を行っていきたく思っております。（室田 記）

麻酔学

麻酔学教室では、白神豪太郎教授のもと多くの医局員が周術期管理、集中治療、ペインクリニック、緩和医療の分野で診療、研究や教育に励んでおります。

本年は、新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)のパンデミックにより我々の教室も主催予定であった日本麻酔科学会中

国・四国地方会の中止を始め、COVID-19患者の受け入れや周術期管理対応、医療器材の供給不安定化による手術制限、医学生の実習制限など、大きな影響を受けました。

そのような状況下にあいながらも研究に邁進した植村先生が医学博士を、京嶋先生、喜多條先生、黒田先生、水田先生が麻酔科専門医を見事取得されました。各々の分野で一層の活躍と教室の発展に寄与していただけるものと期待しております。

診療では、周術期管理チーム、ICUやペインクリニックの体制拡充、術後回復室の運用を行いながら、ライフワークバランスの適正化などの働き方改革を進めています。

今後は、大学病院の収入の基幹となる手術数を速かにパンデミック以前の状態へと戻すべく診療各科と協力し、社会的期待に応え責任を果たすべく精進してまいります。（岡部 記）

歯科口腔外科学

歯科口腔外科学教室は、三宅 実教授が就任後6年目を迎えました。今年度は独立行政法人国立病院機構四国こどもとおとなの医療センターに新しく歯科口腔外科が開設され、当医局より岩崎昭憲を初代医長として派遣いたしました。地元善通寺市歯科医師会と連携し口腔外科治療、障がい児（者）歯科治療、周術期等口腔機能管理を行うことになりました。また今年度本学附属病院歯科医師臨床研修プログラムを修了した3名が全員入局しとても活気づいています。関連病院である和歌山県紀南病院から中井康博とかがわ総合リハビリテーションセンターから塚本豊浩が医局に帰り、交替で、紀南病院には宮寄亮、かがわ総合リハビリテーション病院歯科には芳地裕梨が出向することになりました。同センターには当科所属の南祐子も医長として勤務しており、障がい児・者に対し専門的で安心できる歯科医療を提供しています。香川県内では唯一日帰り全身麻酔下歯科治療を実施しています。大学院教育としては、今年度前半に中井史と宮寄亮が学位を取得しています。

従来の口腔外科疾患に加え、がん患者等の周術期口腔機能管理、歯科インプラント、歯の内視鏡下およびマイクロスコープを使用した歯根端切除術、内視鏡下唾石摘出術等の個々に応じた最善の医療を提供しています。（三宅 記）

内分泌代謝・先端医療・臨床検査医学

内分泌代謝内科は村尾孝児教授のリーダーシップのもと、一致団結して臨床、研究、教育に励んでおります。幸い、当科では村尾教授が就任以降、8年連続で新規入局者を迎えており、また女性医師も多く、今後も若い先生方に選んで頂けるよう、より一層内分泌代謝学の魅力を伝え、さらに働きやすい環境を整えてまいります。診療面では、2018年度以降は外来患者数が1万人を突破し、入院患者数も年々増加しております。2020年10月には第58回日本糖尿病学会中国四国地方会（会長：村尾孝児）、2021年には第17回日本臨床検査医学会中国四国支部総会（会長：井町仁美）を主催予定です。新型コロナウイルスの動向を注視しつつ、無事開催できるよう万全の対策を整え、医局一丸となって日々準備に取り組んでおります。対外的には、希少糖臨床

応用についての共同研究・開発を香川県・国際希少糖教育研究機構・地元企業と産官学一体となりプロジェクトを進めております。また香川県歯科医師会との医科歯科連携事業、かがわ糖尿病療養指導士育成事業など多岐にわたるプロジェクトを展開しております。これからも皆様から信頼される内分泌代謝領域の診療を行い、香川県の内分泌代謝学の発展に貢献できるよう精進してまいりますので、今後とも宜しくお願い申し上げます。(福長 記)

臨床腫瘍学

近年、がん診療はがんを標的とする分子標的治療の進化、がん免疫療法の登場、ゲノム解析によるがん個別化医療など新たな時代の幕開けを迎えています。2015年2月の講座新設以来、臓器横断的ながんの集学的治療をはじめ、地域連携、がん予防の啓発、支持療法・緩和ケアの推進と共に、治験や多施設共同の臨床試験による先進的な診療に力を入れています。

昨年度は、附属病院スタッフの皆様や学内の関係講座の皆様のご協力・ご指導のおかげで、四国の大学病院としては初めての、がんゲノム医療拠点病院の指定を受けました。いよいよ保険適応となったがんゲノムによる精密医療の実践に踏み出しました。手探りの部分もありますが、皆様のご協力とご理解のもとで、がん患者さんや地域の方々に、最良のがん診療を提供していきたいと考えています。

辻教授の指導のもと昨年度は、奥山が、がんゲノム医療センターの専任スタッフとして講師に昇進しました。がんゲノム外来を開設し、始まったばかりの香川県のがんゲノム診療の発展に邁進しています。大北も学内講師に昇進し、肉腫・希少癌・頭頸部癌などの非常に幅広いがん診療と、治験や多施設共同臨床試験などの新規治療開発に取り組み、新たに病棟医長としても活躍しています。村上は、心と体のサポート役として、患者様の信頼も厚く、緩和ケアチームのリーダーとして診療科の垣根を超えた緩和治療の実践と、香川県の「がん患者ニーズ調査」研究責任者も担当しています。一方で2児の母でもあり、子育てと仕事を両立する素晴らしいロールモデルです。昨年入局した羽床は、入院患者の診療を担当していますが、学生や研修医の指導にも熱心に対応して医局の雰囲気も大変活気づいてみんな感謝しています。早くも膀胱癌のレトロ研究論文や依頼原稿を投稿準備して、臨床・教育・研究共に大活躍です。西内は、日本がんサポーターケア学会編の「がんサポーターケアのための漢方活用ガイド」の編集に追われましたが2020年中の出版見込みです。漢方指導医認定も受け、当科での日本東洋医学会漢方専門医養成が可能となりました。

また学会関連行事としましては、多くの関連の先生方のご協力をいただき、2020年7月に日本消化器病学会四国支部会教育講演会を、2021年2月には日本老年病学会四国地方会を主催させていただき予定で、皆様の益々のご支援を、この場をお借りしてお願い申し上げます。

現在、医局員は、辻教授以下6名ですが、皆それぞれの特徴を生かして切磋琢磨して実績を挙げております。これからも次世代のがん診療と研究、教育のために研鑽と挑戦をしてゆく所存ですので、皆様の引き続きのご指導を宜しくお願い申し上げます。(西内 記)

総合診療医学

総合診療医学では4人のスタッフがそれぞれのSubspecialty 専門領域(循環器、消化器、脳神経内科)を生かしながら総合内科として診療を行っています。発熱、全身倦怠感、体重減少など受診時にはすぐに診断がつかない患者さんを対象として診断、治療にあたっています。大学病院は全診療科が専門医の集団ですが、その中でこそ総合診療的な診療が必要な場合もあり、当科が果たすべき役割と考えています。

2018年から新専門医制度が開始され、本教室では「香川大学総合診療専門研修プログラム」を作成し、大学病院と香川県内の地域の病院とをローテーションしながら総合診療専門医資格を取得できるプログラムを用意しています。研究面では各スタッフが専門領域に基づく研究を行い学会発表、論文執筆を行っています。

診療、教育、研究面での本教室の役割を果たせるよう努力してまいりますので今後ともご支援をよろしくお願いいたします。(舩形 記)

放射線腫瘍学

2012年1月の活動開始以来、「高精度放射線治療の基礎的・臨床的研究の推進およびがん治療の将来を担う専門医の育成」を目標に掲げています。治療専門医・指導医として柴田教授・高橋助教が常勤し、専攻医として穴田医員・西出医員が研鑽を積んでいます。2020年4月から古高松出身の香西医員が新たに入局し、後期研修を開始しました。

臨床面では、2014年度に導入した治療技術の高度化に対応した機器を用いて、強度変調放射線治療(IMRT)・画像誘導放射線治療(IGRT)等に積極的に取り組み、前立腺癌や頭頸部腫瘍だけでなく、脳腫瘍や子宮頸癌に対するIMRTの実績を増やしています。通常照射・ピンポイントの定位照射・小線源治療等と合わせ、年間450例前後に治療を行い、診療報酬の増収を達成しています。

研究面では、2名のがんプロ大学院生(木下[子宮頸癌]・片山[医学物理])が課題に取り組んでいます。また、科研費にも着実に採択され、国内外の学会や英文論文で成果をコンスタントに発表しています。

皆様には臨床や共同研究でお世話になっておりますが、引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

(高橋 記)

医療情報学

前年度終わりからの新型コロナに関して、当部への影響も小さくありませんでした。最初に行ったことは、院外から電子カルテにアクセスするツールの整備でした。治療した患者がコロナ陽性であった場合、対応したスタッフがやむを得ず自宅待機を行う状況を想定されたからです。この機能を用いながら、情報部の業務も一部、在宅勤務・テレワークで行い、三密対策、感染リスクの分散を行いました。

その他、院外からモニターが来訪して元データをチェックする、治験・臨床研究におけるモニタリング作業についても、かねてから準備・研究していたリモートモニタリン

グ手法を導入するなどの対応をしました。

この度の世界的な感染爆発では、ICTつまり情報通信技術の重要性が再認識されました。対面での会議・会合の方が議事進行はスムーズですが、感染拡大防止のためには対面を断念せざるを得ません。このような状況で医療情報学会は6月の学術集会をWeb講演に変更して行いました。参加者は2000人以上を数え、盛大な学会となりました。私も座長を行いました。なんとかつつがなく務めることができました。このようにして得たノウハウについては、同窓の先生方と是非共有していきたいと思っておりますので、お気軽にご相談ください。(横井 記)

薬剤学

2020年4月1日付けで医学部附属病院 教授・薬剤部長を拝命いたしました小坂信二です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

薬剤学教室では、従来より安心して安全な薬物療法の支援を行うために様々なテーマで研究を行ってまいりました。今後の展開として感染制御部門などに対する臨床支援業務をはじめ、臨床薬学の知識・技術を駆使して新医療システムの構築や社会的要求の高い研究も可能にするような業務展開を図って行きたいと考えております。

また、すべての医療者が適正な薬物療法を行うことが出来るように学部での教育支援も行ってまいりますので、「讚樹會」会員の皆様には広くご指導ご支援ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願ひ申し上げます。(小坂 記)

健康科学

健康科学は、医学科に属してはいますが、その業務の主体は看護学科になります。しかしながら以前より附属病院での診療、医学科の統合講義の一部も行っており、医学科の学生さんとも機会は少ないですが交流しています。また峠教授は非侵襲的脳刺激法による種々の研究で、私は法医

学における画像診断の研究の一部で、医学科の教室と連携させて頂いております。

看護学科の学生さん達は、喜怒哀楽に激しいところがありますが、やはり全体に優しい性格を持ち合わせている気がします(もちろん医学科生が優しくないと言っているわけではありません)。体調が悪い時、なんとか頑張っているけど必ず誰かが「先生、調子悪いん？大丈夫？」と聞いてきます。彼ら、彼女らは将来看護師、保健師、助産師や養護教諭になることを夢見て日夜励んでおりますが、持ち合わせた性格というものも将来の仕事にあっているんだなあ、と思うことが少なくありません。病棟で働いていた頃、主治医の私には何も言わない患者さんが、看護師さんには心を開いて本心を伝える……ということは一度や二度ではありませんでした。看護学生の頃から培われた、もしかしたら入学前から備わっている能力なのかもしれないと、最近感じています。(筒井 記)

病理部・病理診断科

香川大学医学部医学科の同窓会のみなさま、こんにちは。香川大学医学部附属病院病理診断科・病理部です。私たちは病理医8名、臨床検査技師10名、事務1名で毎日働いています。患者さんの体から採取された胃生検や手術検体などの組織診、手術時の術中迅速診断、尿や子宮頸部からの細胞診、不幸にして亡くなられた方の剖検など、仕事は多岐にわたります。また、初期臨床研修医やスーパーポリクリの学生を受け入れており、卒前・卒後教育にも力を入れています。病理診断は最終診断です。治療方針の決定に大きく関与しており、迅速で正確な診断が求められます。プレッシャーを感じることもありますが、臨床的に鑑別診断に挙げられていない疾患を診断できたときはとてもやりがいを感じます。一見、何をしているか分かりにくいと思いますが、自由に入出入りできますのでぜひ一度遊びに来てください。病理診断科・病理部一同、お待ちしております。(香川 記)

学 生 の 短 期 留 学 報 告

ブルネイ・ダルサラーム大学

2020年2月2日～2020年2月28日

3（現4）年 花田 佳奈

①学習状況について

3年次の課題実習としてブルネイ・ダルサラーム大学（以下UBD）に留学し、派遣学生の一人と共に、薬理学の教室でbiomedicalの学部所属する4年生の卒業論文に参加する形で研究を行った。研究内容は、*Annona muricata*という植物の葉から作成したナノ分子の大腸癌への影響を研究するというものだった。主に私達が行ったのはナノ分子の作成であったが、それらは大腸癌を持つラットに与えられ、効果を調べられているようだった。

この他にも、ナノ分子を作成する前には実験のプロトコルを作成したり、論文検索アプリケーションであるMendeleyを用いた論文作成の練習、大腸癌に関する論文内容を簡潔にまとめたプレゼンテーション、他の学生の研究で用いられるmicrospungeの作成にも参加した。また、今回入室しての実験参加は叶わなかったが、動物実験施設に入るために必要なhand wash techniqueも教えていただき、新型コロナウイルスの感染が広がる中、感染予防に非常に役立っている。

これらの研究に加えて、派遣学生全員でInterprofessional

Educationというベッドサイドでのチーム医療を体験出来る実習や、PBLを見学させていただいた。IPEは香川大学では行っておらず、PBLは3年時に経験したものは全く異なるもので、UBDの学生が受ける授業や実習の質の高さや意欲の高さを感じることができた。

②生活状況について

生活拠点はUBD内にあるCoreという建物であった。共用スペースと一人部屋が五つあり、私は派遣学生二人と、日本国内の他大学の留学生一人と同室であった。初日に部屋のエアコンが使用できなかったり、直してもらった後にはエアコンを消すことができなくなったりと幾つかトラブルはあったが、基本的に生活に大きな支障はなかったように思う。

食事は日本とは異なり、非常に単価は安く、美味しいものが多かった。ただ、野菜が少なく、味付けが濃いため、日本での生活と比べて体調管理に気を配る必要があった。

また、平日の夜や休日には、以前香川大学に留学したUBDの学生や教授が様々な場所を案内してくれた。特に印象的だったのは、建国記念日の式典である。2月23日はブルネイの建国記念日であり、ちょうど留学



お世話になったUBDの学生と



日本大使館にて

期間中であつたので参加することができた。王族の方々の目の前で、市民によるマスゲームや軍隊の行進などが行われており、王族と市民との距離の近さが窺えた。

また、日本ではあまり馴染みのないイスラム教に触れる機会が多くあつた。ブルネイの休日は金曜日と日曜日で、金曜日の12時～14時はお祈り時間であるため全ての店が閉店する。また、non halalの店でない限り豚肉は提供されず、飲酒も限られた場所でしか可能ではない。早朝やお昼にはモスクからアラビア語のアナウンスが流れ、街中にも多くのモスクが立ち並ぶ。日常に馴染むほどの宗教的な文化が無い私たちにとって、どれをとっても新鮮なものばかりで、良い経験になったように思う。

③後輩へのアドバイス

1ヶ月間の留学は、数日間の旅行とは異なり、その土地で生活することが出来る良い経験になります。特にブルネイは、日本とは気候も、宗教も、食事も、多



研究室のみなさんと

くのものが異なる国です。また、とても親切な人ばかりで、その優しさに助けられたことが何度もありました。違いを感じて理解する良い場所であり、良い機会になると思います。参加を迷っているのであれば、一歩踏み出して挑戦することをおすすめします。



3 (現4) 年 盧 宰賢

①学習状況について

私がブルネイ・ダルサラームで行った研究は、糖尿病性網膜症に対してOrthrosiphon Stamineus とよばれる植物が治療薬として用いることができるかもしれないと言われていて、そこで世界中の論文を集めて、その論文の内容を読んで、実際にこの植物が糖尿病性網膜症に有効なデータや結果があるかを調べて、実際に治療薬として用いることができるのかを調べる研究を行いました。

また英語に関しては、最初研究を指導してくれる先生にどのような研究をするのかを説明してもらいましたが、話すことを全く聞き取れず、まるで違う言語のように聞こえました。またブルネイの学生の話す言葉も聞き取れないことが多く、このまま本当に1ヶ月間、英語しか使えない環境で研究なんてできるのかと思い、とても不安でした。そのため、会話していてわからない単語は携帯で調べ、そして滞在先に帰って英語の勉強をし、また現地の学生や留学生が集まる場所に行き、会話をしているうちに次第に聞き取れるようになり、自分の伝えたいこともある程度伝わるようになりました。

②生活状況について

留学中は研究をするだけでなく、たくさんの貴重な



ブルネイの大学生とOSCE実習

経験をしました。例えば現地の学生にブルネイやインドネシアやマレーシアのレストランについて行ってもらい、また現地の大学の教授にも、ハイキングやブルネイで人気の日本食のレストランなどに連れて行ってもらいました。

またブルネイ・ダルサラーム国では2月23日にNational day というブルネイ・ダルサラームの独立記念日があり、記念パレードが行われているとのことなので見に行きました。パレードは活気があり、盛大に行われていて、この時期にブルネイに行けたことは非常に良かったと思いました。

③後輩へのアドバイス

香川大学は非常に国際交流をしやすい体制が取られていると思います。特に香川大学とブルネイ・ダルサラームは長期間交流していて、毎年ブルネイの学生もこちらの大学に留学に来ます。その際にwelcome partyや小豆島や瓦町を散策するなどの交流するチャンスがあります。

そこでブルネイ・ダルサラームに留学を考えている方や英語を上達させたい方、また海外の友人を作りたい方は、ブルネイの学生が香川大学に留学に来ているときに、ぜひ大学で開かれるパーティー等に参加して留学生と一度交流してみることをおすすめします。はじめは英語が全然出来ないから無理だと考えるかもしれませんが、必要最低限の英単語を使い、ジェスチャーを交えながら話したらコミュニケーションが取れると思います。

④その他

食事に関してはブルネイ・ダルサラームの料理は野菜が少なく、加えてほとんどはスパイシーなものです。そのため便通や皮膚の状態が悪化することが多いため、サプリメントや便秘薬や止瀉薬、整腸剤を必要以上に持っていく、また、体調が悪いときに食べるうどんなどのインスタント日本食を持参するのがよいと思います。

アクティビティに関して、友達や先生にハイキングなどの運動に誘われることもあるので、運動用の靴、日焼け止めなどを持参したらいいかもしれません。

そしてブルネイでは外気温は高いが、その分講義室や会議室や友人の車は冷房の設定温度が非常に低いので、羽織るものを持っていくほうが好ましいです。



ブルネイでの病院見学



National dayのパレード

編集後記

編集後記を記すにあたり、はじめに、このたびの九州地方豪雨災害におきまして、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。新型コロナウイルス感染症により亡くなられた皆さんに哀悼の意を表します。また、闘病されている皆さんの一日も早い回復を祈念するとともに、人々の命を守るために医療現場等で絶え間なく働いてくださっている同窓生の皆さんに心より感謝をいたします。

ようやく梅雨も明け、いよいよ夏本番にさしかかってきましたね。私はコロナで外出も控えるようになり運動不足解消のために、学会の延期やweb開催で時間に余裕ができた週末夕方頃に1時間半の散歩を習慣にしているのですが、川辺の鳥たちと目があうくらいゆっくりと穏やかに日々を過ごしております。

讃樹會会長就任のご挨拶を、平川栄一郎先生よりいただきました。会長交代で讃樹會も新たな区切りとともに、明るい話題の多い一年になることを期待したいと思います。

さて、早速ですが本号ではコロナ特集として香川大学の取り組みを門脇則光教授にご寄稿いただきました。「卒業記念に思う」には2期から7期の先生方からご寄稿頂き、香川大学医学部卒業生が記念碑に託した思いを感じさせるものでした。

関連病院訪問記では、香川県済生会病院を紹介させていただきました。ここで、悲しい話題ですが香川大学医学部を支えていただいた前田昌純前教授、飴野清先生、若くして旅立たれた中根秀之先生への追悼文を寄稿いただき、讃樹會からも安らかなご冥福をお祈りさせていただきました。

「Clap for Carers (医療・介護従事者に拍手を)」というキャンペーンが欧米を中心に広がりを見せ、日本でも、医療現場で奮闘する医師や看護師、薬剤師らに感謝の気持ちを示そうと市民が一斉に拍手でたたえる光景をニュースでみました。人との接触を自粛しなければいけない今だからこそ、心のふれあいや共感できる思いというのが大切なのではないかと感じます。コロナ禍が早く終息してほしいと願う気持ちが皆同じであるように、この危機を乗り越えるために我々医療者が思いをひとつにする、それこそが今、必要なことなのではないかと思う次第です。毎号のことながら、ご多忙中にも関わらず寄稿してくださいました皆様、讃樹會会員、事務局の皆様にも心より感謝申し上げます。更に親しまれるような紙面になるよう、微力ながら努力してまいります。些細な事でも結構ですので、ご意見ご提案がございましたら宜しく願い申し上げます。

広報局長 谷 丈二 (平成14年卒・17期生)

事務局からのお知らせ

【連絡・問い合わせ先】

TEL 087-840-2291

Email: dousou@med.kagawa-u.ac.jp

- ◆医師賠償責任保険を年間通じて受け付けています(途中加入ができます)。詳細は事務局にお問い合わせ下さい。
- ◆国外留学助成金の申込は年2回です。直近の締切は本年9月末日です。次は来年3月末日となります。
- ◆同窓会イベント中止のお知らせ
岡山讃樹會

訃報

名誉会員

前田 昌純先生 2020年2月

特別会員

飴野 清先生 2020年3月

正会員

中根 秀之先生 (昭和63年卒・第3期生)
2020年3月

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。